

人物と交流 I (中津市歴史民俗資料館 分館村上 医家史料館資料叢書 5)

Michel, Wolfgang
Kyushu University : Professor emeritus

<https://hdl.handle.net/2324/17763>

出版情報 : pp. 1-104, 2006-03. 中津市教育委員会
バージョン :
権利関係 :



中津市歴史民俗資料館 分館 村上医家史料館資料叢書V

人物と交流 I



ヴォルフガング・ミヒェル編

中津市歴史民俗資料館 分館 村上医家史料館資料叢書V

人物と交流 I

ヴォルフガング・ミヒエル編

編者前書き

昨年度は叢書として「村上玄水資料Ⅲ」を編集しましたが、加えて文部科学省の科学研究費補助金を得て、東京理科大学薬学部
の遠藤次郎助教授及び中村輝子講師と共に行った、村上医家史料館蔵の薬箱及びランビキに関する報告を叢書の第四号として刊行
しました。前号は器物資料を中心に編集しましたが、今回は再び文書資料に目を向け、叢書第五号においては、村上玄水、奥平昌
高、青木周蔵など中津関係の人物像を追究することにしました。

吉田洋一氏は、七代目村上玄水が中津藩主奥平家の参勤交代に随行した記録を中心に検討し、その足跡を辿ることで藩侍医とし
て随行することの意義を再考しようとしてしました。

大島明秀氏は、現在中津市で銃砲火薬店を営む富永亮一氏が所蔵されている未発表史料に基づいて、第一次山県有朋内閣で外務
大臣を務めるなど明治日本の近代化に貢献した青木周蔵の中津滞在期の中で、これまで空白となっていた期間について新たな知識
を提示しました。

引き続き編者は、中津第五代藩主奥平昌高と新しい史料および欧文史料を提示しながら、昌高と外国人の交流および、その交
流にあたって大きく貢献していた昌高の側近神谷源内について追究しました。

また、いろいろと調査を繰り返しても資料的に論文にまで発展する見込みのない場合もあり、本号から「研究ノート」という章
を設けました。小さな資料や方法論上の問題、新解釈の試みなど、読者も参加できるような場となれば幸いです。

平成一八年 春

ヴォルフガング・ミヒエル

目次

編者前書き

凡例

【論文】

村上玄水の参勤随行記

吉田 洋一

はじめに

..... 1

一、中津奥平家の参勤交代

..... 1

二、村上玄水の諸国紀行

..... 4

おわりに

..... 8

【資料一】「文政十有三年秋九月」

..... 9

中津藩主奥平昌高と西洋人との交流について

ヴォルフガング・ミヒエル

はじめに

..... 20

一、「蘭癖大名」という肩書

..... 20

二、奥平昌高と出島商館長ヘンドリック・ドウフ

..... 21

三、奥平昌高と蘭館長ヤン・コック・プロムホフ

..... 24

四、商館長デ・スチュルレル及び蘭館医シーボルトと昌高との交流

..... 32

五、仲介役を務めた藩士神谷弘孝（源内）について

..... 48

六、シーボルト事件以降の昌高公の動き

..... 56

おわりに

..... 56

青木周蔵の中津滞在期く富永家所蔵史料を中心にく

大島 明秀

はじめに 62

一、青木周蔵の経歴 63

二、『青木周蔵自伝』に見る中津滞在期 63

三、青木周蔵と中津藩の学者 68

四、富永家所蔵史料に見る青木周蔵の中津滞在期 71

おわりに 78

【資料二】 明治一九年四月二五日付富永章一郎宛て書簡 81

【資料三】 明治三二年九月一〇日付富永策郎宛て書簡 82

【資料四】 明治二四年一月二日付富永策郎宛て書簡 83

【研究ノート・史料紹介】

・ 中津藩医村上玄水による人体解剖の位置づけについて ヴォルフガング・ミヒエル 85

・ 村上玄水自筆写本「草稿」について 大島 明秀 88

・ 村上玄水の未発表書簡について 吉田 洋一 91

参考資料 94

索引 99

執筆者一覧 104

【凡例】

- 一、底本は村上医家史料館蔵「文政十有三年秋九月」（史料番号 九部、一〇〇）、及び「富永家宛て青木周蔵書簡」（三通、富永亮一氏蔵）を使用した。
- 一、原文の欠字・改行・平出その他体裁は総じて底本の表記を反映するように記した。
- 一、異体字・略字などは通用する字句に改めた。
- 一、虫損・破損など判読できないものは□とし、字数が確定できないものは「」とした。
- 一、「文政十有三年秋九月」原文の繰り返しの記号は全て、（または、）とした。
- 一、「文政十有三年秋九月」原文の訓点・返り点は原文のまま付し、誤字・脱字等は「読み下し」にて補足・修正した。
- 一、「文政十有三年秋九月」の頭注は、できるだけ該当箇所の上に付し、頭注の訓点・返り点は省略した。
- 一、「文政十有三年秋九月」原文に付されている訓点については、原文ではこれを尊重するが、「読み下し」にあたっては筆者の判断の元に適宜改めた。
- 一、「旺相門解」は解説の便宜上、原文に句読点を補った。

村上玄水の参勤随行記

吉田 洋一

はじめに

村上家七代目玄水（一七八一—一八四三）が中津藩医として奥平家に仕えたのは、文化八（一八一—）年のことである。仕官後の活躍は周知の通り、文政二（一八一九）年三月の人体解剖に代表される業績が著名である。ただ玄水は当然のことながら「医者」として藩政に携わることを主業務としていたので、他の中津藩医と同様の職務を担っていたことは自明の理である。本稿はその職務の一例として、藩主参勤の随行に関する書冊を中心として検討するものである。先ず中津奥平家の参勤交代について概観し、その上で玄水が随行した参勤の行程及び随行の様子について考えてみたいと思う。

一、中津奥平家の参勤交代

奥平家の参勤に関してふれる前に、「参勤交代」についての概要を簡単に述べることにする。

参勤はもともと「参観」と表記し、文字通り「まみえる」、「拝謁する」という意味である。「参観」が「参勤」という文字に変

わっていくのは、隔年の江戸参府が大名の勤めであったので、「参勤」という文字に違和感がなかったからであるという¹。参勤交代の源流について丸山雍成氏は、鎌倉時代御家人の奉公義務であった京都・鎌倉大番役や異国警固番役などの軍役負担がそれにあたるとしている²。

江戸時代となって参勤交代制が制度化したのは、寛永一二（一六五三）年である。三代將軍・家光は武家諸法度を改定し、西国大名が三月末から四月の始めにかけて江戸に参府、入れ替わりで江戸にいた東国大名が国許に帰るという形式が成立した³。その後同一九（一六四二）年、従来在府中の譜代大名に六月までは八月の交代、関東の譜代大名に二月・八月の半年交代などを取り決め、全大名に一般化されるに至った。参勤交代制はその後幾度かの改変を経て幕末期まで継続、幕藩制国家支配の政治的基幹として、幕府が諸大名の地方割拠の形勢を抑制して中央集権の実をあげるのに絶大な効果があつた⁴。

参勤交代制度が江戸時代幕藩制国家の存続に重要な役割を担っていたことに関しては、膨大な先行研究の蓄積をみれば疑いのないことであり、その全貌を本稿で検討することは不可能である。したがってここでは、中津藩、特に奥平家人城後の参勤

交代についてその概要を述べる。

近代以降の中津藩、特に参勤に関する研究は、河野福夫「中津奥平侯の参勤交代（上・下）」⁵をその出発点として間違い無からう。それによると、享保二（一七一七）年、丹後国宮津藩より奥平昌成（初代）が中津に入城して以来、幕末の昌服（八代）に至るまでの約一五〇年間に、参勤三八回、交代四一回が実施され、その間、参勤交代不明の年がある九年間にも規定通り行っていたとすれば、参勤四三回、交代四五回になる。交代が二回多い理由について同論文では、天保一三（一八四二）年、当時の藩主奥平昌猷（七代）が病氣となり、参勤せずに中津で没したためであるという⁶。（表一）は同論文に付されている「参勤交代表」の一部である⁷。

表一 奥平昌高・昌暢・昌猷の参勤交代表

河野福夫「中津奥平侯の参勤交代（上）」（『中津史談』第一卷第二号、一九三九年三月所収）より作成。

年号（西暦）	藩主（諱）	備考
寛政七（一七九五）	昌高	七月一日江戸発、中津初入城（八月七日） 陸路（東海道・美濃路・中国路）
寛政八（一七九六）	昌高	参勤（九月四日発、一〇月六日参府） 陸路（中国路・東海道）
寛政九（一七九七）	昌高	六月二日発、七月二六日中津入城 陸路（東海道・山崎越・中国路）

年号（西暦）	藩主（諱）	備考
寛政一〇（一七九八）	昌高	参勤（三月五日発、四月七日着府） 陸路（中国路・美濃路・東海道）
寛政一一（一七九九）	昌高	七月四日発、八月七日中津入城 陸路（東海道・中国路）
寛政一二（一八〇〇）	昌高	参勤（六月一日発、七月六日着府） 陸路（中国路・東海道）
享和元（一八〇一）	昌高	八月四日発、九月一三日中津入城 陸路（東海道・中国路）
享和二（一八〇二）	昌高	参勤（三月一日発、四月七日着府） 陸路（中国路・東海道）
享和三（一八〇三）	昌高	滞府（四月一四日、麻疹のため御名代辞退） 滞府（七月二八日、全快）
文化元（一八〇四）	昌高	文化二（一八〇五）
文化二（一八〇五）	昌高	八月二八日発、閏八月二二日中津入城 陸路（東海道・中国路）
文化三（一八〇六）	昌高	参勤（五月二日発、六月九日着府） 陸路（中国路・東海道）
文化四（一八〇七）	昌高	六月二六日発、七月二六日中津入城 陸路（東海道・中国路）
文化五（一八〇八）	昌高	参勤（閏六月二日中津発、七月四日着府） 海路（六月一〇日播磨室湊上陸、東海道・中国路）
文化六（一八〇九）	昌高	滞府（此年病氣（癩癧）二付追々願之上滞府）
文化七（一八一〇）	昌高	滞府（病氣、大手門守衛ノ命）
文化八（一八一一）	昌高	中津入城（八月九日）海路

年号(西暦)	藩主(諱)	備考
文化九(一八二二)	昌高	参勤(六月一八日発) 海路
文化一〇(一八二三)	昌高	中津入城(八月五日) 海路
文化一一(一八二四)	昌高	参勤(六月一日発) 海路(播磨室湊上陸、東海道・中国路)
文化一二(一八二五)	昌高	中津入城(九月一日) 陸路
文化一三(一八二六)	昌高	参勤(六月発) 陸路
文化一四(一八二七)	昌高	滞府(溜詰格、侍従二昇進『市令録』)
文政元(一八一八)	昌高	滞府
文政二(一八一九)	昌高	中津入城(六月二〇日) 経路不明
文政三(一八二〇)	昌高	参勤(四月二日発) 経路不明
文政四(一八二一)	昌高	滞府(痢癰)
文政五(一八二二)	昌高	滞府
文政六(一八二三)	昌高	中津入城(九月二日) 経路不明
文政七(一八二四)	昌高	参勤(三月三日、中津発) 経路不明
文政八(一八二五)	昌暢	五月、昌高隠居。昌暢、中津入城(九月九日) 陸路
文政九(一八二六)	昌暢	三月、廻郡。参勤(六月一日発) 陸路
文政一〇(一八二七)	昌暢	滞府
文政一一(一八二八)	昌暢	滞府(上野御靈屋普請御用『市令録』)
文政一二(一八二九)	昌暢	中津入城(六月一日) 経路不明
文政一三(一八三〇)	昌暢	参勤九月九日発、一〇月二〇日品川着、二月改元 海路(下関) 陸路(中国路・東海道) 本文参照
天保二(一八三一)	昌暢	滞府(痢癰、足痛)
天保三(一八三二)	昌暢	昌暢没(十一月、享年二四)、弟昌猷家督

年号(西暦)	藩主(諱)	備考
天保四(一八三三)	昌猷	滞府
天保五(一八三四)	昌猷	滞府
天保六(一八三五)	昌猷	閏七月五日発、八月一六日中津初入城、陸路
天保七(一八三六)	昌猷	参勤、経路・日程不明
天保八(一八三七)	昌猷	七月一八日発、八月一九日中津入城、陸路
天保九(一八三八)	昌猷	参勤、経路・日程不明
天保一〇(一八三九)	昌猷	九月一八日発、一〇月中津入城、経路不明
天保一一(一八四〇)	昌猷	参勤、経路・日程不明
天保一二(一八四一)	昌猷	一〇月二八日発、十一月二〇日中津入城、経路不明
天保一三(一八四二)	昌猷	中津在国、八月、昌猷没(享年二九) 一月弟昌服家督

この表より注目すべきことは、行程に陸路と海路が存在することである。このことに関して同論文では、大坂・中津間は海路によることが奥平家以前の中津藩主(細川家・小笠原家)時代から定式であったという。しかしながら実際の参勤交代における奥平家は海路の利用が少ない。奥平家の各藩主が海路を選択しなかった理由として、同論文では「三河から出身以来宇都宮山形宮津の藩主として殆ど全く海に縁がなかったため¹⁰⁾」としているが詳細は不明である。

奥平家の参勤における行列の編成に関しては、前掲の河野論文では全く記述がない。しかしながら、その後の先行研究により、嘉永五(一八五二)年の参勤交代に関しては、約二四〇人随行し

ていたことが判明している”。また個々の参勤交代の所要日数は、(表二)にあるように三〇日前後が通例である。



図一 「道中日記」表紙。恐らく文政期ころ、玄水が漫遊する度に携帯していたものと思われる(村上医家史料館蔵)。

二、村上玄水の諸国紀行

村上玄水の諸国歴訪に関する詳細は現在のところ判明していない。従来までの先行研究において年次がほぼ確定している事項は、寛政一〇(一七九八)年の京都遊学の後、久留米藩儒・梯隆恭

(一七六八―一八一九)のもとに軍学(兵学)修行に赴いたことのみである。したがって本稿で紹介する参勤随行記が、中津―江戸間の行程の様子がわかる唯一の史料である。

① 道中日記について

寛政一〇(一七九八)年の京都市行き、及び本稿で紹介する文政一三(一八三〇)年の参勤随行記以外にも、玄水には諸国を巡ったと思われる史料が存在するが年次が明確でない。したがって彼の生涯における漫遊の回数や交友など、その詳細に関してはほとんど解明されていないのが現状で今後の課題となる。(図一)の「道中日記」に関しても、村上医家史料館の目録中には「文政八年」とされているが、管見に及ぶ限りにおいては年次比定の

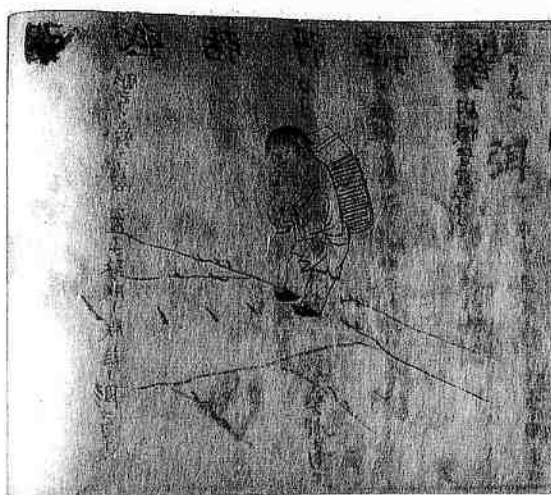


図二 「道中日記」絵図。書中の絵図。「尼崎」、「ツクタ村」(現大阪市西淀川区佃のことか)などの地名がみえる(村上医家史料館蔵)。

根拠を見出し得ない。ただ「道中日記」九丁表の絵図(図二)には「尼崎」とある。これは文政一三年の随行記には記載されていない地名ではあるが、この「道中日記」を携帯していたことも考えられるので、今後「道中日記」と参勤随行記との関連について検討する必要がある。なお「道中日記」の書中には(図三)にみられるような挿絵が数点ある。玄水がどのような意図で画いたのか不明であるが、このことに關しても今後検証が必要となろう。

②「文政十有三年秋九月」について

本稿は「文政十有三年秋九月¹⁾」と題された書冊である(図四)



図三 「道中日記」挿絵。書中の挿絵。書冊らしきものを担いだ童子、自画像か否か不明(村上医家史料館蔵)。

(図五)。これは、文政一三(一八三〇)年九月一九日より、當時の中津藩主・奥平昌暢の参勤交代に随行した時の記録である。奥平家が中津入府以降、四三回の参勤が行われているが¹⁾、玄水による記録が存するのは、文政一三年時のみである。その行程を簡条書きにすると以下の通りである。

【往路】

(文政一三年) 九月一九日 中津発↓小犬丸↓八屋↓椎田

二〇日 大橋↓荊田↓曾根↓大里

二一日 船木

二二日 宮市

二三日 花岡

二四日 関戸

二五日 広島

二六日 四日市

二七日 三原

二八日 神辺

二九日 川辺

一〇月 朔日 藤井

二日 有根

三日 姫路

四日 大蔵谷

五日 西之宮

六日 伏見(二泊)

【復路】

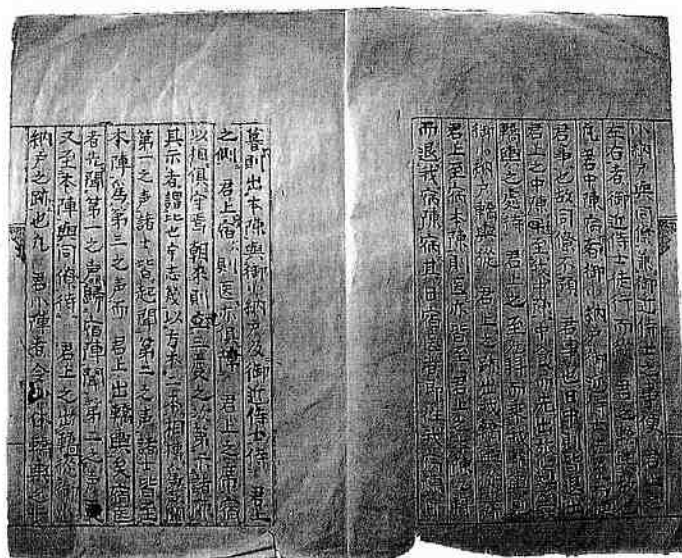
(文政一三年)

八日	石部
九日	関
一〇日	桑名
一日	宮
二日	藤川
三日	荒井
五日	袋井
六日	岡部
七日	由比
八日	三島
九日	小田原
二〇日	川崎↓品川
十一月二日	江戸発
三日	小田原
四日	沼津
五日	奥(興)津
六日	藤枝
七日	袋井
八日	荒井
九日	藤川
一〇日	宮
一日	四日市
二日	土山

以下、内容についての若干の解説を付したい。

中津出発の記載に関して、実際の原史料には「廿九日」という記載があるが、これは明らかに亥水の誤りで、中津の町年寄の記録『惣町大帳』¹⁵の文政一三年九月十九日条に「二 御発駕 椎田御泊」とあることから、九月十九日出発したことはほぼ間違いないだろう。その後の往路(参勤)の行程は従来の参勤経路に沿って進んでいく。一〇月二〇日、品川宿に一行が到着したときに

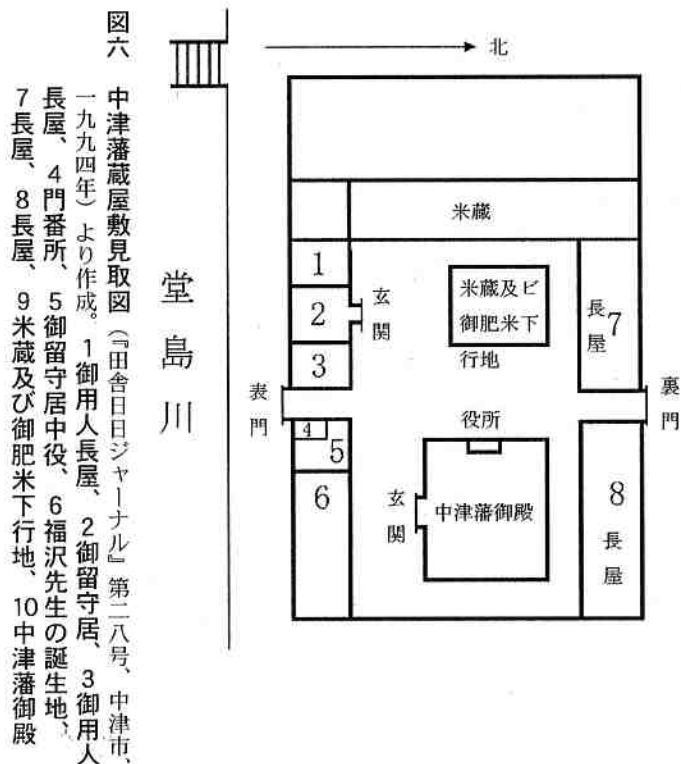
一三日 草津
 一四日 伏見
 一五日 浪華(一九日発)
 一九日 兵庫
 二〇日 牛嶋志和久嶋
 二一日 多加嶋
 二三日 三原付近↓尾道(泊)
 二四日 三原付近の島
 二六日 美多良伊(御手洗)嶋
 二七日 二九日 滞留
 三〇日 大畑(大島)
 一二月朔日 三日 滞留
 四日 辺久利(平群)嶋↓上関
 五日 伊保々嶋
 六日 七日 滞留
 八日 室積↓加佐(笠)嶋↓多加麻津
 一〇日 中津



図五 資料の一丁裏、二丁表。参勤出発時の様子がうかがえる（村上医家史料館蔵）。



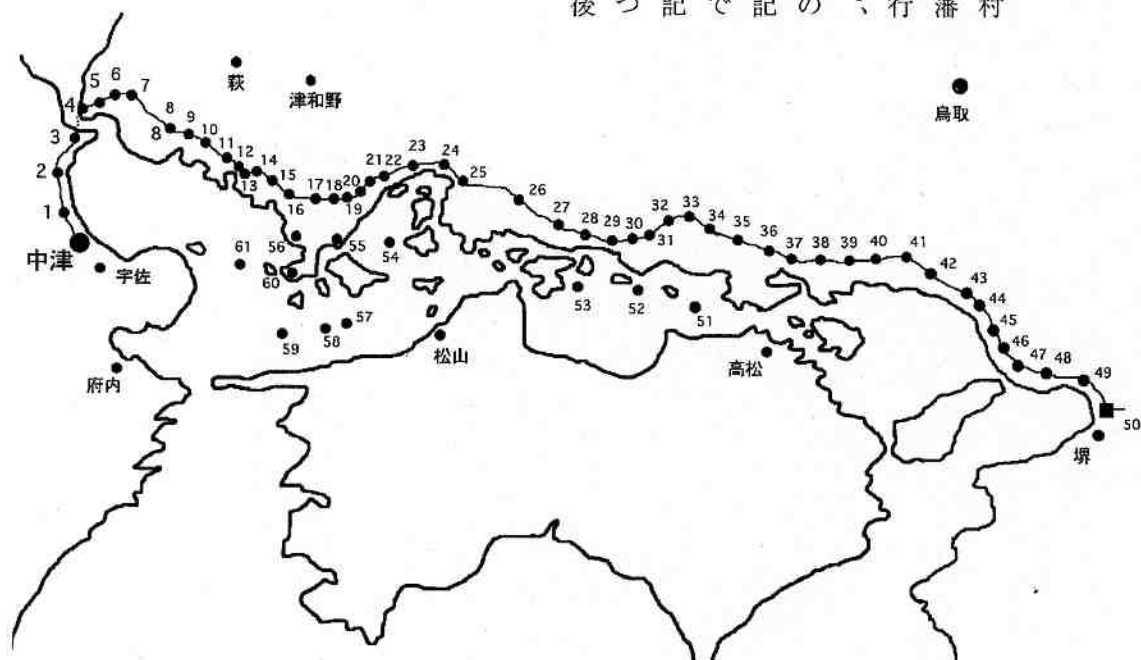
図四 村上玄水の参勤交代資料冒頭。「文政十有三年九月…」とみえる（村上医家史料館蔵）。



は、藩主の弟「勇吉君」が出迎えた。「勇吉」に関しては、中津藩御側御取次衆の記録である「採要集」に文政一二（一八二九）年松平伊予守（岡山藩）の養子となった昌暢の弟「勇吉様」の記述がある¹⁶。江戸に一〇日ほど滞在した後、藩主を江戸に残して一行は帰路につくが、この時の人数は判明しない。大坂の蔵屋敷（図六）にて当時の大坂留守居役・猪狩勝蔵のもとに滞留し、恐らく御用商人であろう「中津播磨屋大吉」の船（大黒丸）で帰省する。史料中には、瀬戸内海の海流により遅延している様子が克明に記されている（図七）。詳細は以下の読み下しを参照されたい。

おわりに

以上、奥平中津藩の参勤交代とそれに随行した村上玄水の記録に関して若干の解説を記した。中津藩の参勤交代に関しては、その解明に必要となる先行研究や資料の精読が今後必要となろう。その上で、今回紹介する随行記がどのような位置づけになるのかを検討しなければならない。恐らく「随藩医の記した参勤の記録」としては全国的にも珍しい史料であることは間違いない。しかしながら、この随行記には医療活動の記述がないため、史料自体の意義づけをどのようにすればよいのか、ということが今後の最も大きな課題であろう¹⁷⁾。



図七 中津—大坂間宿場及び宿泊・休憩所（嘉永五・一八五二年当時）中津藩政史料撰集二『（仮題）御参勤御供日記』（中津市立小幡記念図書館、中津、二〇〇三年、三〇～三一頁）より作成。

1 椎田、2 苅田、3 内裡（大里）、4 下関、5 長府、6 小月、7 吉田、8 船木、9 山中、10 小郡、11 宮市、12 三田尻、13 富海、14 福川、15 徳山、16 花岡、17 呼坂、18 高森、19 玖賀本郷、20 御庄、21 関戸、22 玖波、23 廿日市、24 広島、25 海田、26 西条四日市、27 沼田本郷、28 三原、28 尾道、30 今津、31 神辺、32 高屋、33 七日市、34 矢掛、35 川部、36 板倉、37 岡山、38 藤井、38 片上、40 三ツ石、41 有根、42 正条、43 姫路、44 御着、45 加古川、46 明石、47 大蔵谷、48 兵庫、49 西宮、50 大坂、51 牛嶋、52 高島、53 御手洗、54 加室（頭）島、55 大畑（畠）、56 室積、57 辺久利島、58 也（八）島、59 伊保々（祝）島、60 上関、61 加佐度（笠戸）島

【資料一】「文政十有三年秋九月」

【原文】

〔二丁表〕

文政十有三年秋九月從^ニ 君上^一役^ニ東都^一廿九
日四鼓 君上登^ニ豐城^一其行西^ス 同僚^カ原岡秀

圃大江玄明俱^ニ役也^一群士濟々正行烈々路人

由側皆^ス拜^ス小陣於小犬丸^一小陣於八屋^一其宿本

陣^テ者^レ椎田驛也^一凡^ニ君上之陣所謂^ニ本陣^一諸士

之陣^カ謂^ニ諸陣^一廿日小陣於大橋^一中陣於刈田^一小

陣於曾根^一而至^ニ大里黑^一屋氏以^ニ君上^一船及

群舟^ニ以^テ至^ル群舟乘^ニ群士^一先渡^ニ君上渡海^{レハ}則

群士出迎其^ノ宿陣者下關也^一凡^ニ君小陣則御

〔二丁裏〕

小納戸與^ニ同僚^一兼御^テ近侍士之事^ヲ便^ル 君上之

左右^一者^ハ御近侍士徒行而從^ニ 君之轎輿^一故也

凡^ニ君中陣宿者^{陳則}御小納戸御近侍士先至^テ而便^ニ

君^ノ事^ヲ也故^ニ同僚不^レ預^ニ 君^ノ事^一也日中則皆^ナ退^ニ出^ル
君上之中陣^ヲ早^{速ク}至^ニ我中陣^一中食而先^ツ出^ニ旅道^一至^ニ我
轎輿之處^ニ侍^ニ 君之上至^ニ九拜而乘^ニ我轎輿^一見^ル
御小納戸^ノ轎輿從^ニ 君上之跡^ニ出^ニ我轎輿^一從^ニ其跡^一
君上至^ニ宿本陣^一則^モ医^ニ亦皆^ナ至^ニ 君上宿本陣^一九拜
而退^ニ我宿陣^一宿^ス其^ノ日宿医者^ハ即^チ往^{ニシテ} 我宿陣^ニ日

〔二丁表〕

暮^{レハ} 則^{レハ}出^ニ本陣^一與^ニ御小納戸及^レ御近侍士^一侍^ニ 君上

之側^ニ 君上宿^{發レハ} 則^モ医^ニ亦俱^ニ陣^一 君上之席^一宿

以^ヒ相^ニ俱^ニ守焉^一朝來則立^建三度之次第^一示^ニ諸陣^一

其示者^ヲ謂^ニ比也^一宇志幾^一以^ニ方木二本^一相搏^テ為^レ聲^ヲ聞^ニ

第一之聲^一諸士皆^ナ起聞^ニ第二之聲^一諸士皆^ナ至^ニ

本陣^一為^ニ第三之聲^一而^ニ君上出^ニ轎輿^一矣宿医

者先^ツ聞^ニ第一之聲^一則^モ歸^ニ宿陣^一聞^ニ第二之聲^一実

又至^ニ本陣^一與^ニ同僚^一待^ル 君上之出^レ轎^ニ從^ニ御小

納戸之跡^ニ也^一凡^ニ君小陣者^ハ令^テ小休轎輿之歩

〔二丁裏〕

卒小休上○故也凡 君中陣者ハ 君中食則臣モ 亦中

食故也廿一日其行東北ス 其宿陣者ハ 船木也

廿二日宮市也廿三日花岡也廿四日關戸也

廿五日廣瀨也廣瀨之國君令下 騎馬之士シテ 率テ 步

卒一 守テ 無中 火災上 又令下 群卒シテ 每中 街守中 非常上 凡

君上過下 諸侯之都城下 其侯令下 上士問中 君上之安

否一 又令下 卒守中 道路之非常上 而送下 吾ヲ 於都外城

藝之國君更ニ 令下 卒送中 吾ヲ 於國之堺城ニ 甚タ 備タリ 矣

廿六日四日市也廿七日三原之城下 廿八日神邊也

〔三丁表〕

廿九日川邊也冬十月朔日藤井也二日有根也

三日姫路之城下○也四日大藏谷也五日西之宮也六日

其行不レ 往浪華 大坂一 過他 山崎一 信一 宿伏見一 信宿者今悉

徒大息故也八日發ニ 伏見一 宿石部 九日宿關

十日宿桑名 十一日桑名之君令下 主船上士率中

舟卒ヲ 許楫ヲ 船舟ニ 渡ニ 君上於宮驛其 海數七

里也其行上 發ヤ 也以レ 歌其進ヤ 也以レ 鼓遂ニ 渡レ 吾也海

則尾洲之大主モ 亦令下 上士問中 君上之安否上 也

〔三丁裏〕

將軍備ニ 之關謂 荒井關荒井與 舞坂其 有間 海其

數一里國君亦令下 亦徒備中 君上之船一 而渡海焉凡

君上乘レ 船則近臣皆ナ 乘其 船一 便左右 故也其宿

陣者ハ 袋井也舞坂與袋井 之間有濱松城 與見付

其間有天龍河 以渡舟 渡吾 十五日發袋井 過二

掛川城一 則有金谷與 嶋田其 有間 大河一名 大井河

其驛人以長木二本 鑿ルコト 其中間三四 以短木 貫其

中以為 橫名之 連臺ト 渡人上セ 輜輿ヲ 於其上 以長繩 繼結約束

之而渡レ 吾其宿陣者ハ 藤枝也十六日過岡部 鞠

〔四丁表〕

子至阿部村有河謂在 阿部河渡法如大井河 矣

而過府中 城與江尻 宿沖津 也十七日過由井

蒲原有岩淵村 其眼下有富士河 以渡舟 渡

吾矣見富士山 於右左 而過吉原及 原驛ヲ 至沼津 城

下宿也十八日過三嶋即登箱根山山上有箱根驛々
後有湖水將軍備之關謂箱根關越關降山即
小田原城下也其○陣小田原也○發小田原即○佐加波
河常作橋以渡吾水多以連臺渡人云過平塚有
馬入河以渡舟渡吾也其宿陣戶塚也廿日過川

〔四丁裏〕

崎有六合河以渡舟渡吾也過六合河君上
之尊弟勇吉○乘逍遙馬率騎馬之士迎

君上於野外其行至品川江府之諸士○迎

君上君上則帥平常之從卒至御老中之館告

入江府之事也○迎君上之諸士及從旅道之殘

餘之諸士卒同僚○皆先入江府○待君上之人

府君上入即與在府之諸士俱皆賀矣

廿日入江府之日同僚久恒生先迎我以饗酒食富

矣饗終則入賜我江屋江之同僚俱來便左右之

〔五丁表〕

有無厚情之至也居也二三日君上招旅道

之士於後堂勞之令飲酒尊夫人^{堂ニ}在○

士皆感其厚愛奉恩眼目皆濕也酒酣

或歌或舞士皆醉公宴終而皆奉恩九拜退

出也十月廿九日告歸期于君上之尊大人勞

吾等賜方金五片^數奉恩九拜退出也十一月

朔日朝起見諸侯之朝勤於桔梗門前

又見壕池之鳧鳥近人^{キヲ}知將軍之勵威其日

又告歸期于君上○又至于尊夫人之堂

〔五丁裏〕

招吾等於楷下有賜○奉恩九拜退出也二日

發東府○宿戶塚也七日小田原也四日沼津也五日

奧津也六日藤枝也七日袋井也八日荒井

也九日藤川也十日宮也十一日四日市也十

二日土山也十三日草津也十四日伏見也伏見也其

夜舟乘^リ下浪華^ハ至^{レハ}則十五日也朝來至君

上之藏屋敷其前則堂寫玉江橋也即至御留

主居猪飼氏之堂^自君上賜^於吾等船及二度

之滯留食又賜船中十日之食公事終也

〔五丁裏頭注〕

△過泉岳寺有思賦

五日過原驛有思賦賦曰

又過岩淵佐津多富士賦

〔六丁表〕

猪飼氏者^ハ所^ニ我友^シ善^キ也相俱^ニ延^ニ旅中故郷之情

●我等出酒肴^令飲酒^ニ饗宴終而及^ニ渭城^ノ朝雨^ノ嗚呼

君^ハ滯^ハ留浪華^ニ我^ハ去^テ歸^ニ中津^ニ生別離之難^キ何

堪矣^乎○席上有^下歌^ニ蘓李^ノ之詩^者相俱皆淚

下^ル遂^ニ其夜乘^ニ中津播麻屋代吉之船大黒

丸^ニ十九日出帆浪華^過兵庫^リ又揚帆廿日至^ニ牛

嶋志和久嶋之邊^ニ泊^ス廿一日揚帆西風難^レ向^レ船至^ニ

多加嶋^ニ泊^ス多加嶋山上有^ニ松林^ノ問^ニ之船師^謂金

毘羅之舊跡^云廿三日揚帆風弱^{ニシテ}而^ニ至^ニ三原^之

〔六丁裏〕

邊嶋^ニ泊^ス其夜暴風不得^レ泊^ニ其處^ニ即^チ至^ニ尾道^泊

廿四日滯溜廿五日揚帆西風難^レ行^キ又至^ニ三原之邊嶋^ニ

泊^ス廿六日揚帆至^ニ美多良伊嶋^ニ泊^ス廿七日廿八日廿

九日滯溜^ス卅日揚帆得東風[○]至^ニ大畑^ニ泊^ニ十二月朔

日一二三日滯溜四日揚帆過^ニ飯盛[○]邊久利嶋及[○]仁奈伊馬

也嶋^ニ至^ニ上^ノ関^ニ泊^ス五日揚帆至^ニ伊保々嶋^ニ去^ニ玉女

峯^ニ七里[●]又風弱^{ニシテ}難^レ行^テ西風起^テ至^ニ室積^泊六日滯

溜七日揚帆[○]西風起歸^ニ室積^泊八日得^ニ東風^ニ

行^{クコト}一二時至^ニ加佐嶋之南^ニ西風又起^テ至^ニ多

〔七丁表〕

加麻津^泊九日得^ニ東風^速見^ニ玉女峯於後^之

又風弱^{ニシテ}船難^レ行^{一時}又得^ニ北風^至不津邊[○]沖^ニ

又風弱難^レ行[○]至^ニ和麻加波奈之邊^ニ○日暮楫^テ而^ニ

朝來[○]入^ニ中津之涯^ニ

村上六祖玄水卓^謹○記

〔読み下し〕

〔二丁表〕文政十有三年秋九月、君上に従いて東都に役す。廿九日四鼓、君上豊城を発し、其の行西す。同僚か原岡秋圃・大江玄明俱に役すなり。群士渚々として正行すること烈々たり。路人、

側に由りて皆拜す。小犬丸に小陣し、八屋に小陣す。其の宿本陣は椎田駅なり。凡そ君上の陣所は本陣と謂ひ、諸士の陣を諸陣と謂ふ。廿日、大橋に小陣し、刈田に中陣す。曾根に小陣し、而して大里に至る。黒屋氏の君上船及び郡舟を以てす。以て郡舟に至れば郡士を乗せ先に渡る。君上渡海すれば則ち郡士出迎ふ。其の宿陣は下関なり。凡そ君小陣は則ち御「二丁裏」小納戸と同僚と与に御近待士の事を兼ね、君上の左右に便なる者は、御近待士徒行して君の輜輿に従ふが故なり。凡そ君中陣・宿陣は則ち御小納戸・御近待士先ず至りて、君の事を便するなり。故に同僚君の事に預からざるなり。日中は則ち皆君上の中陣を退出し、速く我が中陣に至りて中食し、而して先ず旅道に出る。我が輜輿の処に至りて、君上の至るを待ちて九拝し、而して我が輜輿に乗り、御小納戸の輜輿、君上の跡に従ふを見て、我が輜輿を出す。其の跡に従ひて君上、宿本陣に至れば則ち医も亦た皆君上の本陣に至り、九拝して我が宿陣に退きて宿す。其の日の宿医は即ち我が宿陣に往きて、日「二丁表」暮れば則ち本陣を出で、御小納戸及び御近待士と与に君上の側に侍る。君上寝宿すれば、則ち医も亦た俱に君上の席に陣し、宿して以て相俱に守る。朝来すれば、則ち三度の次第を建て諸陣に示す。其の示す者を比也宇志幾と謂ふ。方本二本を以て相搏ちて声を為す。第一の声を聞き諸士皆起き、第二の声を聞き諸士皆本陣に至る。第三の声を為して君上輜輿を出づ。宿医は先ず第一の声を聞けば、則ち宿陣に帰り、第二の声を聞けば、又本陣に至り、同僚と与に君上の輜輿を出づるに侍りて、而して御小納戸の跡に従ふなり。凡そ君の小陣は、輜輿の歩「二

丁裏」卒を小休せしめるが故なり。凡そ君の中陣は、君、中食すれば、則ち臣も亦た中食するが故なり。廿一日其の行は東北す。其の宿は船木なり。廿二日は宮市なり。廿三日は花岡なり。廿四日は関戸なり。廿五日は広島なり。広島は國君は騎馬の士をして歩卒を率いて而して火災無からしむ。又、群卒をして街毎に非常を守らしむ。凡そ君上、諸侯の城下を過ぐるに、其の侯上士をして君上の安否を問はしむ。又卒をして道路の非常を守らしむ。而して吾を城外に送る。芸の國君、更に卒をして吾を國の堺域に送らしむるは、甚だ備たり。廿六日は四日市なり。廿七日は三原の城下なり。廿八日は神辺なり。「三丁表」廿九日は川辺なり。冬十月朔は藤井なり。二日は有根なり。三日は姫路の城下なり。四日は大蔵谷なり。五日は西宮なり。六日は其の行、浪華に往かず、山崎を過ぎて伏見に信宿す。八日は伏見を發し石部に宿す。九日は関に宿す。十日は桑名に宿す。十一日、桑名の君、主船の上士をして舟卒を率いせしめ、許して船舟に楫とりして君上を宮駅に渡す。其の海数は七里なり。其の行、發するや、歌を以てし、其の進むや鼓を以てし、遂に吾を渡すなり。渡海すれば則ち尾州の大主も亦た上士をして君上の安否を問はしむるなり。其の宿陣は宮駅なり。十二日は藤川なり。十三日は荒井なり。「三丁裏」將軍之に関を備へ荒井関と謂ふ。荒井と舞坂とは、其の間に海有り。其の数一里なり。國君も亦た悉徒をして君上の船に備へしめ、而して渡海す。凡そ君上船に乗れば則ち近臣皆な其の船に乗る。左右に便するが故なり。其の宿陣は袋井なり。舞坂と袋井との間には浜松城あり。見付と其の間には天竜河有り。渡舟するを以て

吾を渡す。十五日袋井を發し、掛川城を過ぐれば則ち金谷有り。島田と其の間とに大河有り。大井河と名づく。其の駅人、長木二本を以て其の中間を繋ぎ、三四短木を以て其の中に貫き以て横と爲す。之を連台と名づく。渡人、輜輿を其の上に上せ、長繩を以て之を約束し、而して吾を渡す。其の宿陣は藤枝なり。十六日、岡部鞠〔四丁表〕子を過ぎ阿部村に至る。阿部河と謂ふ河有り。渡法は大井河の如し。而して府中城と江尻とを過ぎ、沖津に宿す。十七日、由井蒲原を過ぎ、岩淵村有り。其の眼下に富士河有り。渡舟を以て吾を渡す。富士山を左に見、而して吉原及び原駅を過ぐ。沼津城下に至りて宿すなり。十八日、三嶋を過ぐれば即ち箱根山に登る。山上には箱根駅有り。駅の後湖水有り。將軍之に關を備へ箱根關と謂ふ。關を越へ山を降れば即ち小田原城下なり。其の宿陣は小田原なり。十九日、小田原を發すれば即ち佐加波河有り。橋を作りて以て吾を渡す。水多ければ連台を以て人を渡すと云ふ。平塚を過ぎ馬入河有り。渡舟を以て吾を渡すなり。其の宿陣は戸塚なり。廿日川崎を過ぎ〔四丁裏〕六合河有り。渡舟を以て吾を渡す。六合河を過ぎ君上の尊弟・勇吉君、逍遙馬に乗り、逍遙馬の士を率いて君上を野外に迎ふ。其の行は品川に至り、江府の諸士も又君上を出迎ふ。君上は則ち平常の從卒を帥いて、御老中の館に至り、江府に入るの事を告ぐるなり。勇吉君先ず江府に入る。君上を迎ふるの諸士及び旅道從り殘余の諸士卒同僚も亦皆江府に入りて、君上の府に入るを待つ。君上入れば則ち在府の諸士と俱に皆入りて賀す。廿日、江府に入るの日、同僚久恒生、先ず我を迎へ以て饗す。酒食富たり。饗終れば則ち我に賜る江屋

に入る。江の同僚、俱に來たり左右の〔五丁表〕有無を便ず。厚情の至りなり。居ること二三日君上、旅道の士を後堂招く。之を勞ひて飲酒せしむ。尊夫人堂に在り、士皆其の厚愛に感じ、恩を奉じて眼目皆濕なり。酒酣し、或は歌ひ、或は舞ふ。皆酔ひて公宴終ゆ。而して皆恩に奉じ九拜し退出するなり。十月廿九日、帰期を君上の尊大人に告げ、吾を勞ひ方金數片を賜ふ。恩に奉じ九拜して退出す。十一月朔日、朝起して諸侯の朝勤を桔梗門前に見ゆ。又塚池の鳧鳥の人に近きを見る。將軍の励威を知る。其の日又帰期を君上に告げ、官より道路の旅金を賜ふ。又尊夫人の堂に至る。〔五丁裏〕吾等を楷下に招く。賜有りて皆恩を奉じ九拜して退出す。二日、江府を發す。其の行、西南し戸塚に宿す。三日は小田原なり。四日は沼津なり。五日は奥津なり。六日は藤枝なり。七日は袋井なり。八日は荒井なり。九日は藤川なり。十日は宮なり。十一日は四日市なり。十二日は土山なり。十三日は草津なり。十四日は伏見なり。其の夜、舟に乗り浪華に下りて至れば則ち十五日なり。朝來りて君上の蔵屋敷に至る。其の前は則ち堂島玉江橋なり。即ち御留守居猪狩氏の堂に至る。君上より吾等船及び滞留食を賜ふ。又船中の食を賜ふ。公事の終るや〔六丁表〕猪狩氏は我が友の善き所なり。相俱に旅中故郷の情を延ぶ。我等出酒肴して飲酒せしむ。饗宴終わりて渭城の朝雨に及ぶ。嗚呼、君は浪華に滞留し、我は去りて中津に歸す。生別離の難き、豈何ぞ堪えんや。席上に蘇李別離の詩を歌ふ者有り。相俱に皆涙下る。遂に其の夜中津播磨屋大吉の船大黒丸に乗る。十九日、浪華に揚帆して兵庫を過ぐ。又揚帆して廿日牛嶋志和久嶋の辺に至りて泊

す。廿一日、揚帆するも西風船に向ひ難し。多加嶋に至りて泊す。多加嶋の山上に松林有り。之を船師に問はば金毘羅の旧跡を謂ふ、と云ふ。廿三日、揚帆するも風弱にして、三原の「六丁裏」辺嶋に至りて泊す。其の夜、暴風たりて其の処に泊するを得ず。即ち尾道に至りて泊す。廿四日滞留す。廿五日、揚帆するも西風行き難く、又三原の辺嶋に至りて泊す。廿六日、揚帆して美多良伊嶋に至りて泊す。廿七日廿八日廿九日滞留す。卅日、東風を得て速やかに加武呂嶋を過ぎ、大畑に至りて泊す。十二月朔日二日三日、滞留す。四日、揚帆して飯盛仁奈伊嶋辺久利嶋及び也嶋を過ぎ、上関に至りて泊す。五日揚帆し伊保々嶋に至る。玉女峯を去ること七里なり。又風弱にして行き難し。遂に西風起ちて室積に至りて泊す。六日滞留す。七日揚帆するも又西風起ちて室積に還りて泊す。八日、東風得て行くこと二時、加佐度嶋の南に至るも、西風又起ちて、多「七丁表」加麻津に至りて泊す。九日、東風を得て速やかに玉女峯を後ろに見、又風弱にして行き難し。一時又北風を得て不津辺の沖に至り、又風弱にして行き難し。日既に暮れ、和麻加波奈の辺に至る。即ち六鼓なり。楫して朝来、中津の涯に入る。

村上六祖玄水卓、謹んで記す。

【注釈】

「二丁表」

○君上…中津藩主・奥平昌暢（在位文政八・一八二五年～天保三・一八三二年）のこと。

○廿九日…中津藩文政一三（天保元年）の参勤は九月一九日が正しい（河野福夫「中津奥平侯の参勤交代（上）（下）」『中津史談』第2・3号、一九三九年所収など参照）。

○四鼓…四ツ時（午前一〇時ころ）という意味か。

○原岡秋圃…生没年未詳。『記註撮要』『家督役替』（『中津藩歴史と風土 第十五輯』一九九五年所収）文政一三年八月三日の条（同書二五八～二五九頁）に次のようにある。

隠居平藏生涯被下候三人扶持、

五ヶ年指上候二付、本道席二被

仰付候

最初御焼類之節、薬種料手前抱

御扶持不残差上候旨申達候所、

奇特二付、右之通二被仰付候

原 岡 秀 圃

○大江玄明（一七九八～一八七七）…中津藩医、大江雲沢の父。

『記註撮要』『家督役替』（同右所収）文政十三年寅正月の条に、「一、正月十一日 御近習医師被仰付、御参府御供被仰付候大江元明（二五五頁）」とある。ちなみに中津市には村上医家史料館だけでなく、大江医家史料館も存する。

○群士…家臣以下参勤の面々。

○濟々…数が多く立派なさま「多士濟々」。威儀の立派なさま。

○烈々…高大なさま、寒気のはげしいさま。ここでは武威のさかなさま。

○小犬丸…小犬丸の字名は現行橋市・豊前市・築上郡吉富町などにも遺存する。その内当時の中津藩領は吉富町のみである。なお現中津市にも「犬丸」という字が存する（『角川日本地名大辞典』以下地名に関しては同書を参照した）。

○八屋…近世期小倉藩領八屋村（友枝手永）、現豊前市の大字。

○椎田…近世期小倉藩領椎田村（椎田手永）、前述の八屋、松江（しょうえ）と共に宿駅が設けられた。現築上郡椎田町。

○小陣…小休止の意か。

○中陣…食事など小陣より長い休憩の意か。

○大橋…江戸期中津郡の村名（国作手永）。現行橋市の町名。

○刈田（刈田）…近世期は新津手永に属す。現京都郡刈田町。

○曾根…江戸期比企郡の村名（津田手永）。現北九州市小倉南区の大字。

○黒屋氏…黒屋家は代々中津藩家老職（七族五老）。当時（黒屋伊右衛門）は御物頭と御船奉行を兼務（『中津藩 歴史と風土 第十五輯』二五三―二五四頁）。

○下関…近世から近代初期にかけて「西の浪華」とよばれた。現山口県下関市。

「二丁裏」

○小納戸…中津藩職掌名（黒屋直房『中津藩史』五一頁）、用人支配。

○同僚…玄水と同様の近習医師（原岡・大江）のこと。

○御近侍士…いわゆる御近習役と称される側衆のことか。

○輜輿…輜は「かご」の意。

○宿医…当日の藩主担当医。いわゆる当直医。

「二丁表」

○三度の次第…第一声から第三声のことをさすか。

○比也宇志幾…「ひやうしき（標識）」のことか。

「二丁裏」

○船木…近世期長門国厚狭郡の村名。萩藩領。船木宰判に属す。交通の要所。現山陽小野田市厚狭付近か。

○宮市…近世期長門国佐波郡の町名。萩藩領。三田尻宰判に属す。現防府市の町名。

○花岡…近世期都農郡のうち。都農宰判の勘場がおかれていた。現下松市くだまつの字名。

○関戸…近世期岩国藩領。現岩国市の字名。

○広島の国君…文政一三年広島藩八代藩主・浅野齊賢なりたかのこと。

○四日市…近世期安芸国安北郡の村名。現広島市安佐北区付近か。

○三原…近世期広島藩領。現三原市。

○神辺…現広島県深安郡神辺町かんなべ。現福山市の北部。

「三丁表」

○川辺…近世期備中国岡田藩領。現倉敷市の大字。

○藤井…近世期備前国上道郡の村名。岡山藩領。現岡山市。

○有根…未詳。

○大蔵谷…近世期播磨国明石郡の村名。現明石市の大字。

○西宮…現兵庫県西宮市。

○信宿…二泊。再宿。

○石部…近世期近江国の宿場（東海道）。現滋賀県湖南市の字名。

○関…江戸期鈴鹿郡の宿名。現三重県亀山市の町名。

○桑名の君…文政六年から松平（久松）家が桑名藩当主となっているため、文政十三年当時は松平定信の長男・定永が藩主である。

○舩…小舟のこと。

○宮（駅）…熱田宿ともいう。熱田神宮の門前町。

○尾州の大主…文政一三年当時は一代（名古屋）藩主・徳川斉温。

○藤川…東海道の宿場名。現愛知県岡崎市。

○荒井…新居宿のことか。三河国吉田藩領。現静岡県浜名郡新居町。

〔三丁裏〕

○舞坂…舞沢、舞阪とも。浜名湖の東岸、敷知郡舞阪町。東海道の一宿。

○国君…浜松藩主であるならば、当時は水野忠邦の長男忠精。

○丞徒…多くの家臣。この場合参勤に従事した家臣。

○袋井…東海道袋井宿。

○天竜川…静岡・愛知・長野を流れる一級河川。長野県諏訪湖に源を発し浜松市東端で遠州灘に注ぐ。

○金谷…東海道金谷宿。現静岡県島田市内。大井川の西岸。

○島田…東海道嶋田宿。大井川の東岸。

○藤枝…東海道藤枝宿。

○岡部鞠子…現志太郡岡部町と静岡に丸子。ともに東海道の宿場。

〔四丁表〕

○阿部河…山梨県境安部峠に源を発し駿河湾に流入する一級河川。

○府中城…駿府城のことか。現静岡市。

○江尻…東海道江尻宿。現静岡県清水市。

○沖津…東海道興津宿。現静岡県清水市。

○由井蒲原…東海道由比宿と蒲原宿。現庵原郡由比町と同郡蒲原町。

○岩淵村…幕府庵原郡岩淵村。富士川沿岸。現静岡県富士市。

○富士河…静岡・長野・山梨にまたがる一級河川。

○吉原…東海道吉原宿。現静岡県富士市。

○原駅…東海道原宿。現静岡県沼津市。

○沼津城…幕府直轄。韮山代官領。

○三嶋…東海道三島宿。現静岡県三島市。

○小田原…東海道小田原宿。現神奈川県小田原市。

○佐加波河…酒匂川のこと。足柄山脈を水源とし、相模湾に注ぐ二級河川。

○平塚…東海道平塚宿。現神奈川県平塚市。

○馬入河…馬入川のこと。相模川が当村（相模国大住郡）に入ると馬入川となる。現神奈川県平塚市。

○戸塚…東海道戸塚宿。現横浜市戸塚区。

○川崎…東海道川崎宿。現川崎市川崎区。

〔四丁裏〕

○六合（郷）河…多摩川の別称。秩父山地から東京湾に注ぐ一級河川。

○尊弟勇吉君…藩主・昌暢の弟昌猷のことか。

○品川…東海道品川宿。現東京都品川区。

○久恒生…未詳。

○江屋…玄水が泊まる江戸の家屋。

〔五丁表〕

○桔梗門…桜田門の別称。江戸城の内側に作られた門の一つ。

○壕池…外堀のことか。

○鳧鳥…アヒルのこと。

○勵威…權威の尊大さという意か。

〔五丁裏〕

○奥津…興津に同じ。

○四日市…東海道四日市宿。現三重県四日市市。

○土山…近世期甲賀郡土山村。現滋賀県甲賀市の字。

○草津…江戸期膳所藩領栗太郡草津村。現滋賀県草津市。

○堂島玉江橋…堂島川にかかる橋。中津藩蔵屋敷の南側の橋名。

現大阪市北区。

○猪狩(飼)氏…文政十三年当時大坂留守居役の猪飼勝蔵のこと。

【記註撮要】「家督役替」〔中津藩 歴史と風土 第十五輯〕

一九九五年所収〕文政一三年二月五日条に「一、同日 大坂

留守居兼帯被 仰付候(二五六頁)」とあり、御奏者番・御物

頭などを兼帯していたことがわかる。

〔六丁表〕

○渭城…唐王維の詩に「渭城朝雨浥輕塵」とある。送別の詩。

○蘇李別離の詩…ここでは宋の蘇軾と李公擇を指すか。

○播磨屋大吉…中津藩御用商人。

○牛嶋志和久嶋…牛嶋は香川県丸亀市北方にある島。瀬戸内海のこの地域を塩飽諸島という。

○多加嶋(高島)…現香川県木田郡庵治町。鎌野海岸東方にある島。

○金毘羅…現徳島県鳴門市の金比羅か。

〔六丁裏〕

○尾道…現広島県尾道市。

○美多良伊嶋…現広島県呉市大崎下島に御手洗という地名がある。

○加武呂嶋…現山口県大島郡に「神室島」がある。

○大畑…現山口県玖珂郡大畠町付近か。

○飯盛仁奈伊嶋…不詳。

○辺久利嶋…山口県沖にある平群島のことか。

○也嶋…現山口県柳井市沖の八島のことか。

○上関…現山口県柳井市上関か。

○伊保々嶋…山口県沖の祝島のことか。

○玉女峯…不詳。

○室積…現山口県光市室積海岸か。

○加佐度嶋…山口県沖の笠戸島のことか。

〔七丁表〕

○多加麻津…高松のことか。

○不津辺…旧宇佐郡に「布津郡」とある。

○和麻加波奈…「わまがはな(和間ヶ鼻)」とすれば、現大分県宇佐市の「和間海浜公園」付近と推定される。また現中津市大

字田尻の海岸の字名も「和間」と称した。

- 1 山本博文『参勤交代』、講談社、東京、一九九八年、二八頁。
- 2 丸山雍成『日本近世交通史の研究』、吉川弘文館、東京、一九八九年、四九四～四九五頁。
- 3 前掲『参勤交代』、四五～四六頁。また前述の丸山雍成氏は前掲書において、参勤交代の形成・展開過程は、第一段階（慶長年間、將軍宣下前の家康が大坂城の秀頼のもとに参勤、など）、第二段階（元和・寛永初年代、大坂夏の陣による豊臣氏の滅亡に端を発する）、第三段階（寛永一〇年代以降、武家諸法度による規定、その後の補足的制度整備など）に区分することができるという（同書、五〇六頁）。
- 4 丸山雍成『参勤交代』（『国史大辞典』第六卷、吉川弘文館、東京、一九八五年、五三二～五三三頁）。
- 5 『中津史談』二号・三号、中津史談会、一九三九年、三月～八月。
- 6 河野福夫「中津奥平侯の参勤交代（上）」、二七頁。
- 7 同書の表は、享保二（一七一七）年の奥平家入城より最後の藩主昌服までを記しているが、本稿では、村上玄水に直接関係があると思われる昌高（五代）・昌暢（六代）・昌猷（七代）の時期のみ記載した。
- 8 陸路・海路における経路に関しては、図七、及びミヒエル論文図二参照。
- 9 河野福夫「中津奥平侯の参勤交代（下）」、一三頁。
- 10 河野福夫「中津奥平侯の参勤交代（下）」、一四頁。
- 11 中津藩政史料選集（二）『御参勤御供日記』、中津市立小幡記念図書館、中津、二〇〇三年、参照。
- 12 拙稿「江戸期中津藩村上家の軍学について」（ヴォルフガング・ミヒエル編『村上玄水資料』Ⅱ、村上医家史料館、中津、二〇〇四年所収）参照。
- 13 村上医家史料館の目録には、史料名として同名が記されている。これは（図四）の一行目より引用し史料名としたものである。なお、この書冊は縦二七、〇横×横一九、七横、縦帳、墨付き七丁である。
- 14 河野福夫「中津奥平侯の参勤交代（上）」、二七頁。
- 15 中津市立小幡記念図書館蔵。
- 16 中津市立小幡記念図書館蔵『採要集』（複写版）、一一頁。
- 17 なお読み下し等に関しては、細田富多『村上医家資料集』一、中津市歴史民俗資料館編、中津、二〇〇五年所収。

中津藩主奥平昌高と西洋人との交流について

ヴォルフガング・ミヒエル

はじめに

蘭学の発達の過程において、今日多くの文献で「蘭癖大名」と呼ばれる殿様が台頭した。彼らは資金力と人脈を活かし、オランダ東インド会社を通じて舶来品を集めたり、ときには蘭書や出島商館員との交流を通してヨーロッパの言語、文化、科学技術を学んだりしていた。このような活動を趣味として進めた人物もいれば、一見浪費とも見える行為により入手したモノと情報を領内の殖産興業のために活用した人物もいた。蘭癖大名の看板の下に列挙される人物としては、福知山藩主朽木昌綱くつきまさつなをはじめ、薩摩藩主島津重豪と斉彬なりあきら、福岡藩主黒田長博ながひろと斉清なりきよ、佐賀藩主鍋島直正なかつちか、佐倉藩主堀田正睦まさとし、熊本藩主細川重賢しげかた等が挙げられるが、その数は決して多くはない。

中津奥平藩の五代藩主昌高（一七八一―一八五五）は歴史の専門書や一般向けの各種出版物において、そうした蘭癖大名の一人として論じられているが、これまでの研究発表において彼の活動を裏付ける関連資料の提示には問題があり、また、その全貌も十分に見えていない。本論文は、日欧の文献を踏まえた上で昌高と西洋人との接触、交流を追究することを目的とする。その際、通

訳などを務めながら重要な役割を果たした神谷弘孝かみやひろたけの姿もあらためて見つめ直したい。新資料の中ではシーボルトの描写を補う商館長デ・スチュレルの江戸参府日記の関連記述及び神谷家の系図や明治期の住居地図が注目に値する。また、和訳により西洋人の見方の特徴が失われるおそれがあるため、それぞれの原文も併記することにした。

一、「蘭癖大名」という肩書

残念ながら、「蘭癖」という呼称がいつ頃から利用され始めたのかははっきりしていない。「蘭癖大名」のほか「蘭癖家」、「蘭癖収集家」、「蘭癖商人」などの用例もあり、「世間からは蘭癖と呼ばれた」、「蘭癖とあだ名された」の言い回しが見える。すでに同時代の人々が当該の殿様などをそう呼んだとする著者もいるが、江戸期の史料には上記のような言葉はなかなか検出できない。この言葉は明治以降に普及した言葉である可能性が高い。今日の国語辞典や歴史事典などにも「蘭癖」という見出し語は掲載されていない。「民間事典」は唯一の例外として「蘭癖大名」という項目を設け、比較的詳細に説明を掲げているが、「蘭癖」

の語源や出典については言及がない²⁾。

しかし、たとえ広く使われ定着したとしても、「蘭癖」の内容を検証せずに歴史用語として使えるものではない。悪癖、潔癖、酒癖、病癖など、正常でない偏りを表す「癖」という言葉は一定の否定的な要素と結びついており、「オランダかぶれ」、「西洋かぶれ」などの言葉を連想させかねない。嘉永三年、志筑忠雄訳の「鎖国論」を刊行した黒沢翁満は「刻異人恐怖伝」で蘭学者を次のように激しく批判している。

「人の恐懼るるやうなる事を、憚る所もなくいひもてはやすは、皆かの蘭学者流の癖にて、己が西洋の事に委曲きを誇り、且彼方を主張して人を嚇すひが心得なるを、奇を好むは世人の習なれば、閱讀ぎ語讀ぎて、何の辨へもなく、いと囁々しく唱ふめり³⁾」

翁満の議論は「蘭癖」の問題とは主旨が異なるが、「癖」の当時の意味合いが現在と同様に否定的なものだったことは明らかである。したがって、歴史的現象としてのいわゆる「蘭癖大名」を描写する際、より中立的な言葉を検討すべきと思われる。また、蘭学者であれ蘭方医であれ「蘭癖大名」であれ、彼らの価値体系と世界観の根底には日本の伝統があることを見過ごしてはならない。

二、奥平昌高と出島商館長ヘンドリック・ドゥーフ

奥平家の四代藩主昌男が天明六（一七八六）年に二四歳の若さで逝去したとき、跡継ぎとなる男児がいなかった。中津一〇万石のお家断絶危機を乗り切るため急遽、薩摩藩第二五代藩主島津重豪（一七四五～一八三三）の次男で六歳の富之進を二歳と称し、昌高の名で跡目を継がせた。受領名は大膳大夫。中津の経済的苦難は続き、在任中のあらゆる試みも期待通りの成果をもたらさなかった。しかし学問の奨励で、昌高は歴代藩主の中でも第一級の人物に成長した。

幼い頃に薩摩を離れたため、本草学、医学、蘭学で名を知られた父重豪の直接的影響を過剰に評価すべきではないが、昌高が実家を手本にしたことは十分に考えられる。昌高の最初の業績として多くの著者が藩校進脩館開設を挙げているが、同館が設立された寛政二（一七九〇）年にはまだ子供で、その貢献度は小さかったと思われる。

昌高の蘭学熱が正確にはいつ頃高まったのかははっきりしない。一八二六年にシーボルトが昌高は「三〇年前からオランダ人の友人だ」と述べているので⁵⁾、商館長ヘンメイ（Gijssert Hemmi、一七四七～一七九八）とすでに接触していた可能性も考えられるが、現存の資料を見る限り、一七九九年から計一七年間も日本に滞在していた商館長ヘンドリック・ドゥーフ（Hendrik Doeff、一七七七～一八三五）との交流が決定的な契機となったと思われる。一八〇六年、一八一〇年及び一八一四年のいずれかの江戸

参府の際に昌高はドゥーフからフレデリック・ヘンドリック (Frederik Hendrik) という蘭名を授かった。

Zeker Secretaris van den Landsheer van Nagats, tweeden zoon van den ouden Vorst van Satsoma, schoonvader des Keizers, had van mij den naam bekomen van Pieter van der Stolp; zijn meester, de gemelde Landsheer, hield niet op, ja dwong mij, om zoo te zeggen, er hem ook een 'te geven; ik gaf hem dan eindelijk den naam van Frederik Hendrik.

「中津の領主は薩摩の大名の次男で、皇帝の義父であるが、その秘書である藩士の一人は、私からピーテル・ファン・デル・ストルプの名を得た。彼の主君、上記の領主も、彼に名前を与えてほしいと、私に強要して已まなかったもので、私は遂に彼にフレデリック・ヘンドリックの名を与えた」。

こゝで言及される藩主の秘書は中津の辞書編纂に携わった神谷弘孝(源内)である。一八一九年にオランダへの帰国船が遭難し、資料をすべて失ったドゥーフは自分の記憶に頼らざるを得なかった。そのためか、昌高の「命名」の正確な年ははっきりしない。残念ながら、ドゥーフの業務日記にもそれに関する記述は残っていない。一八〇六年の江戸滞在中、昌高の実父島津重豪はドゥーフに様々な自然標本や珍しい鳥などの珍品を贈呈したとされているが、昌高の名は見当たらない。昌高が中津から江戸へ出発し

たのは、ドゥーフがすでに長崎へ戻っている文化三年五月(一八〇六年六月一七日〜七月一五日)だった。ドゥーフが最後に参府した文化一(一八一四)年にも二人が会った可能性はない。当時の昌高の江戸への出発はドゥーフがすでに出島へ戻った六月となった。出島商館長日記に見られるドゥーフの二度目の参府旅行は一八一〇年二月一八日〜一八一〇年六月二日となっている。昌高は文化五(一八〇八)年七月四日に江戸に到着してから文化八(一八一二)年まで癩癧のため江戸に滞在していたので、ドゥーフとの接見は十分に可能であった。

一九世紀に入り、蘭書からの翻訳が著しく増大し、本格的な蘭和辞典の必要性を感じる者も増えた。その一人だった昌高の活動は早くも実り、文化七(一八一〇)年、国内最初の日蘭対訳辞書が刊行された(図一)。

「Nieuw Verzameld Japans en hollandsch Woordenboek

Door den Vorst van het Landschap Nakats Minamoto Masataka.

gedrukt bij zijn dienaar Kamiya Filojosi. 1810.]

(新集日蘭辞書 中津の領主源昌高により)

その召使神谷弘孝により一八一〇年刊行)

この『新集日蘭辞書』の凡例で「姑コレヲ題シテ蘭語譯撰トイフ」と説明していることから、この辞書は『蘭語譯撰』と呼ばれるようになった。蘭文タイトルに見られる「Kamiya Filojosi」はピーテル・ファン・デル・ストルプとの蘭名を受けた藩士神谷

弘孝である。彼が幕府天文台に勤務する馬場貞由^{ただよし}の協力のもとで、天文から植物まで一九の分野にわたり七〇七二語を収録し、当時最も充実した日蘭対訳辞書を編纂した。貞由が記した「序言」によれば、殿様自身も単語収集を行ったという。

このような特殊な書物の市場及び刊行上の技術的な問題を考えると、発行地が江戸となったのは当然かも知れないが、当時の中津の古博多町にも書肆があった。関連史料は残っていないが、江戸期の刊行物の奥付けの「諸国発行書肆」の中に豊前の梅津寿平の名が含まれる数冊を発見できた。それらを見る限り、梅津寿平は寛延期頃から天保期頃にかけて江戸、大坂、京都な



図一 『蘭語訳撰』（中津市小幡記念図書館蔵）

どの書肆との協力関係を保っていた¹²。しかし、広義の蘭学関係の版本は一冊もなく、地元の書肆は東洋医学、易学、日本漢詩文を中心に扱っていたことがわかり¹³、殿様の蘭学熱に染まっていたのは御典医の一部と江戸詰の側近だけだった可能性も考えられる。

『蘭語訳撰』を刊行する考えが当時の蘭学者やオランダ人との付き合いから生まれたことは容易に想像できる。昌高と交流があった出島商館長ドゥーフも同様なことに力を注いでいた。オランダとその植民地ジャワ島は一七九五年から一八一五年にかけてフランスの支配下にあり、イギリスと戦争状態となったため、彼の滞日期間は長期化してしまった。貿易活動を行えないドゥーフは、フランス人フランソワ・ハルマの『蘭仏辞典』（第二版）¹⁴をもとに蘭和辞典の編纂を行っていた。幕府が文化一三（一八一六）年にその草稿の増補改版を求めたので、彼は阿蘭陀通詞の協力のもとで、翌年の帰国間際までに『阿蘭陀辞書和解』をほぼ完成させた。『ドゥーフ・ハルマ』あるいは『長崎ハルマ』とも呼ばれるこの辞書は写本の形で主だった蘭学塾などに広まっていた¹⁵。

養子として奥平家に迎えられたので、模範的な藩主になるため努力するだろうと考えがちであるが、驚いたことに、『蘭語訳撰』が出た翌年の文化八（一八二五）年に、昌高は四四才の若さで次男昌暢^{まさのぶ}に家督を譲ることになった。シーボルトは「一度オランダ人と個人的に知り合うため」の引退だったと述べているが¹⁶、昌高は以前にすでに商館長ドゥーフと交流があり、この

解釈は信じがたい。また、世の中に背を向けるための隠居でもなかったようだ。昌高は引退後も藩政に関与し、文化一四（一八一七）年三月には溜詰格に、さらに翌月には溜間詰本格に列し、また、侍従に叙せられた¹⁷⁾。

斎藤阿具は昌高とドゥーフとの関係を示す貴重な史料を紹介している。一八二六年の商館医シーボルトとの出会いは昌高の思ひ出を刺激したようである。彼は同年七月二七日（陰暦？）付の親友ドゥーフ宛ての書簡をオランダ語でしたため、かぎタバコ入れと一緒にヨーロッパへ送った。

Aan mijn waarde vriend H. Doeff,

ik heb jaarlijks alle aankomend Heeren na U ed. gevraagd en ik heb vernoomen dat U ed. altoos in volkomen gezondheid blijft. Hier beneffens bekomt U ed. een snuif doos, schoon dezelve een klein geschenk is. Vaar wel gelukkig en leef eeuwig.

Jedo den 27 Zitsignats [=七月] 1826

Uw ed[.] Vrind

F. Hendrik

Landsch Heer van Nakats

「私の親愛なる友H・ドゥーフへ

私は年々渡来する人々に貴君の御安否を尋ね、貴君がいづも御健在である由を承知いたしております。ここに粗品ではありますが煙草入を進呈いたしたく存じます。永ら

く御幸福と御健康でありますことをお祈り申し上げます。

一八二六年七月二七日 江戸にて 貴君の友人

中津領主F・ヘンドリック¹⁸⁾

出島商館の業務日記には関連の記述は見られないが、ドゥーフと昌高との交流は親密だったに違いない。ドゥーフの人柄、日本と日本人に対する開かれた姿勢、その知識と研究活動は昌高の蘭学熱に影響を与えたはずである。蘭学のパトロンとしての昌高公の姿はこの時期に初めて鮮明になる。江戸の蘭学界との接触も見られ、また西洋を理解するには充分な語学力が必要であるとの彼の判断も『蘭語訳撰』の刊行で立派に証明された。

三、奥平昌高と蘭館長ヤン・コック・ブロムホフ

ドゥーフの後任者ヤン・コック・ブロムホフ(Jan Cock Blomhoff、一七七九～一八五三)も中津藩主昌高と交流があった。一八一八年四月一二日商館長一行が江戸の本石町にあった長崎屋に到着して間もなく、すでに品川でオランダ人との接触を試みた数名の医師らが駆けつけオランダ語の名刺を渡した。

Dit gezelschap vertrokken zijnde, zo kregen eenige Japanse, of Keijzerlijke Doctors, welke ons in Sinagawa waren komen verwelkomen, en mits den Opper Banjoost niet goed vondt admisse te verleen, elk een kaartje afgaf in 't Hollands;

hunne namen als: Wilhelmus Botanicus keiz. Doctor van Japan gen.²¹ Kasragawa Foken. Pieter van der Stolp, dienaar van 't Landschap Nakats in 't Boezen, genaamd Kamija Gennai, dienaar van Landsheer Okudaira Daijin no Daiju. Frederik van Gulpen van Japan, koopman. Daerna kregen visite van de Landsheers en Keijzerlijke Doctor Ootskie Gintak. Alle welke vrij wel eenige woorden Hollands verstaan en spreken: ook lezen konden.²²

「この一行が立ち去つてのち、品川にわれわれを出迎えに來た若干の日本人すなわち皇帝の医師たちの訪問があつたが、上位検使が許可することを認めなかつたので、各人はオランダ語で書いた名刺を渡した。彼らの名は、ウイヘルムス・ボタニクスすなわち日本の皇帝の医師桂川甫賢、ビーテル・ファン・デル・ストルプすなわち豊前中津の領主奥平大膳太夫の家臣神谷源内、商人のフレデリック・ファン・グルベン・ファン・ヤパンである。そののち何人かの領主たちと皇帝の医師大槻玄沢の訪問を受けた。これらの人々はみなオランダ語をよく理解し、語り、また読むことができた。」²³

「奥平大膳大夫」の側近神谷弘孝が大槻玄沢や桂川甫賢²¹のような一流の蘭学者と行動をとにしたことは昌高の情報源の幅広さを物語っている。彼らの語学力が評価されたことも見過ごしてはならない。フレデリック・ファン・グルベンは当時の蘭学者と親

交し、たびたびオランダ人と接触していた伊勢屋七左衛門兵助という著名な菓子商人である。

文政元（一八一八）年、四年ぶりに江戸に滞在するオランダ人の宿を訪れる訪問客は後を絶たなかつたようだ。一八一八年四月一七日及び二六日、神谷弘孝もその一人だった。

Aten de Doctors Botanicus en Kimbij met de Landsheers die-naar van der Stolp 'savonds met ons.²²

「夕方、〔皇帝の〕医師のボタニクスと金兵衛²³が、〔中津の〕領主の家臣ファン・デル・ストルプとともにやつて来て、われわれとともに食事をした。」²⁴

Kwamen eenige dienaars van den Gouverneur: zomede Botanicus, van der Stolp en van Gulpen in geselschap van hunne vrouwen en kinderen.²⁵

「〔長崎〕奉行の家臣数人がきたが、さらにボタニクス、ファン・デル・ストルプ、およびファン・グルベンも、彼らの妻や子供を連れてやつてきた。」²⁶

その翌日、プロムホフは土井藩主の近侍鷹見泉石（一七八五―一八五八）にヤン・ヘンドリック・ダッペルという蘭名を与え、天文方高橋景保が持参したブトレマイオスの肖像画に幾つかの字句（法則か格言か）を書き入れた上で金メッキの小型コップを贈呈し、また、大槻玄沢と神谷源内には薬瓶を渡した。

Reeds lang had mij den dienaar (van den Landsheer van Doij ooi no Kami) genaamd Takami Zuino Zajmon, om een Hollandsche naam verzogt. Waarop ik hem noemde Jan Hendrik Dapper. Ook schreef ik op verzoek van den astronoomist Globius onder het portait van Ptolomeus eenige regels tot aandenken. [...] Ook gaf een present van vergulde kelkjes an Globius (Takanas) de Opper-sterrekijker, de Heer Gentak, opper Keijzerlijk Doctor, medicijn flesjes met stopjes, dito glaases aan de Heer van der Stolp, Dienaar van den Landsheer van Oktoe Daire Daijin no Daijboe in 't Landschap Boesin, resideerende te Nakatsoe.¹⁷

「鷹見十郎左衛門²⁸と名乗る(土井大炊頭²⁹という領主の)家臣はすでに長らく私にオランダ語の名をつけて欲しいと求めていた。そこで私は彼にヤン・ヘンドリック・ダッペルという名をつけた。また私は天文学者グロビウスの求めにより、記念にプトレマイオスの肖像の下に記念に二、三の字句を揮毫した。[中略]また私は首席天文方グロビウス(高橋)に金メッキを施した小型コップ数個、皇帝の首席医師玄沢氏には栓つきの小さな薬瓶数個、豊前国中津に住む領主奥平大膳太夫の家臣ファン・デル・ストルプ氏には同じ薬瓶数個の贈物を与えた。³⁰」

その二年後の文政三(一八二〇)年に、ブロムホフが昌高の料理人加藤彦兵衛(Katoo Ficobij)に「Lodewijk Smulgraag」の蘭

名を授けたと板沢武雄が述べているが、それを裏付ける史料としてあげた「ホフマン博士の著書」は確認できなかった³¹。

同年、参勤交代における下関の陣宿だった伊藤家で、奥平昌高はヘンドリック・ファン・デン・ベルグという蘭名を持つ宿主伊藤盛永のために蘭文詩を書いた。この一枚は今日まで伊藤家に伝わり保存されている。内容の深さはともかく、韻も踏んでいて、殿様のオランダ語力は印象的である。

Op het versoeck van den hospes van 't hollands logement in Simonoseki

Hendrik van den Berg is een van de menschen

Die 't bloeijen van het Hollands handel wenschen

Hij is, als wij, een van de liefhebbers van de Hollands waaren

Zoo moet hij hoopen dat de scheepen jaartijks naar Japan
vaaren!

Boenseij

3^{de} jaar Geschreven

door

den vorst en kasteel eigenaar

van Nakats in 't landschap

Boezen

Frederik Hendrik³²

「下関のオランダ宿主の頼みに応じて。ヘンドリック・ファン・デン・ベルグはオランダ交易の繁栄を望んでいる

人々の一人なり。彼は我らが如くオランダものの愛好家の一人なり。故に彼「オランダの」船が年々日本に渡来することを希望しなければならぬ。豊前国中津の領主にして城主なるフレデリック・ヘンドリック誌す。」

オランダ商館長の次の江戸参府は予定通りの文政五(一八二二)年に行われた。下関で瀬戸内海の船旅を準備するブロムホフは、同宿でこの蘭文詩に感激し、昌高に自分の喜びと思いを寄せる讃詩を残した。

Opdragt!

Aan zijne Excellentie, Fredrik Hendrik, vorst, en kasteel eigenaar van Nakatsu, in het landschap Boezen.

Door

Den ondergeteekende, op zijne doortogt als gezant na 't

Keizerlijke Hof.

Hoe trof mijn hart die schoone zuivere taal!

Als ik, mijn vriend! Uw land ten tweede maal

Betradi; geuit in digmaat, door Uw eigen hand geschreven.

Bewijst, hoe gij mijn vorst, in 't Hollands zijt bedreven.

Hoe gij vermaak schept in al 't geen mijn landaart is gewoon

Te dragen en te doen, toont aan Uw smaak en een gevoel zoo
schon!

Daar weinig voorbeelden, ergens van zijn te vinden.

Gaat, bid ik, hierin voort, met d' overige vrienden,

Dat niets die zugt, voor al wat Hollands is, in Uw verdooft,

Dit hoort, dit wenscht gestaag! Het Hollandsch Operthoofd

en

Ridder van de Orde van den

Nederlandschen Leeuw

J. Cock Blomhoff [ppm]

Simonosekij den 18^e Februarij 1822. ¹¹

「中津の領主フレデリック・ヘンドリック閣下に奉る。使節として宮廷へ旅行の途上にて下名より。

わが友よ、私は再び貴国に参った時

私の心は美しく純な言葉にどんなに感動したことでしょう

詩にうたい、自らの手で記して、殿よ どんなに貴下の

オランダ語がすばらしいかを示しています

私の国ではありふれたことが

どれほど貴下を楽しませ

この言葉には貴下のこころばえと感じる心があふれています

これにくらべられるものはどこにも見当たりません

私ねがいます 他の友と手をたずさえてこの道を歩み給

えと

オランダのしきたりをあくことなく求める心を失わない

熱情

それを乞い 絶えずそれを願うは

オランダ商館長 ヤン・コック・プロムホフ

オランダ獅子団の騎士

一八二二年一月一八日 下関にて³⁴」

一八二二年三月二六日江戸について間もなく、前回の江戸参府で親しくなった馬場貞由及び神谷弘孝が駆けつけた。

Kwam de hospes van Jedo zijn compliment maken als mede de Jedosche vrienden Abraham, en van der Stolp mij hier verwelkomen.³⁵

「江戸の宿の主人が挨拶にやってきました。同様にまた江戸の友人、アブラハムおよびファン・デル・ストルプが私をここに迎えた。」³⁶

昌高公は前年から痼癢のため滞府していたが、このとき商館長と会ったかどうかは明らかではない。プロムホフの日記は贈り物の交換に言及しているが、昌高の息子、夫人二名、及び医師を含む家臣三名に蘭名を授けたとしか記していない。

Gaf en kreeg verscheide presenten van diverse Hollandsche vrienden, daaronder de beide Landsheeren Fredrik Hendrik en Johannes Wilhelmus.

Verzocht zijnde door eerstgenoemde Landsheer om zijn zoon,

twee van zijne vrouwen, en drie dienaren, waaronder een

Doctor, namen te geven, zoo noemde dezelve

Zijn zoon - Maurits

2 vrouwen - Carolina Vrolijk

Charlotte Blom

Doctor - Jacobus Paracelsus

Dienaar - Gerit Pasop

Piketu - Pieter Hart,

Hetwelck thans alhier een rage word.³⁷

「われわれ」オランダ人の友人たちにさまざまな贈物を贈り、また受けたが、それらの人々のうちには、二人の領主フレデリック・ヘンドリックとヨハネス・ヴィルヘルムス³⁸がいた。

最初に名をあげた方の領主によって、彼の息子、彼の夫人達の二人、および医者一人を含む家臣三人に名前をつけて欲しいと求められたので、次のように名付けた。

彼の息子 マウリッツ

二人の夫人 カロリーナ・フローレイク

シャルロット・プロム

医者 ヤコブス・パラセルスス

家臣 ヘリット・パソップ

馬術指南 ビーテル・ハルト

こんなことが今や当地では大流行となっている。³⁹」

彼の選択した名を見ると、多少の遊び心が感じられる。大変陽気な人柄のためか、昌高の夫人おりえ(?)は Carolina Vrolijk と命名された⁴⁰。もう一人の夫人お鶴(?)は Charotta Blom となり、「長男」昌暢⁴²は Maurits の名前を与えられた。家臣 Gerrit Pasop の背景は不明だが、馬術指南 Pieter Hart は小林リゾウ衛門 (Cobajasi Risojinen) であり⁴³、Jacobus Paracelsus と命名された医者 Ooije は大江春塘^{しやんとく}と思われる。

一八二二年四月一四日の商館長日記は同様に、贈り物の交換を紹介している。

Kreeg en gaf onderschiede presenten van den Landsheer van Nagats Frederik Hendrik, en Johannes Wilhelmus, dito van Owari.⁴

「午前一一時にまた天文学者の一団がやって来た。[中略]中津の領主フレデリック・ヘンドリックおよび尾張[大山]の領主ヨハネス・ヴィルヘルムスに、さまざまな贈物を贈られたり贈ったりした。⁴⁵」

プロムホフと共に江戸へ来た商館員フィッセル (Johan Frederik van Overmeer Fisscher, 一七九九〜一八四八) が帰国後著した『日本風俗備考』には、夕方頃オランダ人の宿を訪れる大物 (grote Heeren) 及び一連の蘭学者に関する記述がある。そこに中津藩主の名はあげられていないが、昌高の側近の動きは確認できる。

Oook waren er verscheidene dienaren van den Landsheer van

Nagats, die even als hun Heer, eenen Hollandschen naam gevraagd hadden, en gaarne bij ons waren, al ware het slechts om onze gebruiken te leeren kennen.⁴⁶

「また、中津の領主の諸家臣も来訪し、主君と同様にオランダの名前を求めた。彼らは、ただひたすら我らの風俗を知得するため、好んで我々のところに居た。」

Wij ontvingen ook bezoeken van de Landsheeren van Matsmay en van Tamba, van den Secretaris de Keizers, Minagawa Sagami genaamd, van den Landsheer van Mito, broeder van den Keizer, en voorts een aantal Secretarissen van de Landsheeren van Nakats, Firakatta, Owari, Caga, enz. zoodat wij over eenzaamheid of verveling niet te klagen hadden.⁴⁷

「そのほかに我々は松前、丹波の領主や、ミナガワ・サガミという皇帝の秘書官、皇帝の弟である水戸の領主の訪問を受け、なお中津、ヒラカタ[平戸?]、尾張、加賀などの領主の秘書官も多数来訪したので、我々は孤独や退屈を訴える必要がなかった。」

この資料は昌高公の来訪には言及してないとしても、プロムホフと中津藩との交流を裏付けている。同年四月二一日、商館長一行が江戸の長崎屋を去ることになったが、市内の通りは紅毛人を見ようとする住民で大混乱に陥った。途中、薩摩藩の屋敷があったので、オランダ人たちはそこで彼らを待っていた昌高の実父重豪に別れを告げるために駕籠から降りた。

Digt bij het paleis van den Voorst van Sadsuma gingen wij uit de norimonds en wandelden hetzelfde voorbij, om de familie van dien achtigwaardigen grijsaard te groeten, welke zich, zoowel als de Landsheer, tot dat einde aan de raamen vertoonde;*

「薩摩領主の邸宅の近くで、我々は乗物を下り、この尊敬すべき老侯の家族に挨拶するために、歩いて通り過ぎた。みな領主と共に窓に姿を現わし、我々が通り過ぎるまで見送った。」

この日も翌日も昌高の姿は現れないが、昌高の息子たちが、大森村（現在は東京都大田区）に赴いている。オランダ語の挨拶「eerste maal gezien」から、彼らとブロムホフは初対面だったことがわかる。

Te 7 uur vervolgden onze reis, en rusten quart voor 9 in Onoer, waar ik de 2 zoonfjes van Landsheer van Nagats ontmoette, welke zich expres derwaards hadden begeben. De oudste, een jongeling van 14 jaren, welke ik op verzoek van zijn vader, Frederick Hendrik, Maurits genoemd heb, en de 2^e 10 jaren oud, met een groot gevolg; zittende zij in statie op de verhevene matten met 2 reien ambtenaren aan wederzijde. Ik maakte hun mijn compliment, hetwelk zij met de Hollandsche woorden: Eerste maal gezien, beantwoorden. Daarna moest ik met hun op de Hollandsche wijze op deszelfs matten, op stoeljes zitten -

gebruiken zij wat liqueur en banket, dat ik hun liet presenteeren.

Na een weinig vertoevens gingen weder voort, nogmaals afscheid nemende van de vrienden Abraham, van der Stolp, en Dapper, welke bij de zoons van den Landsheer waren en mij to de norimonds uigeleiden; gelijk zij mij gerecipeerd hadden [...]»

「七時にわれわれの旅行を続行し、そして九時一五分前に大森で休憩、その場で私は中津の領主の二人の息子に出会ったが、彼らはわざわざそこに来ていたのである。長男は、一四才の若者で、同人に私は、先に、彼の父フレデリック・ヘンドリックの要請によりマウリッツという名前をつけてあった。そして二男は一〇才であり、大勢の従者を引き連れていた。〔中略〕少しの間留まっていたあとで、われわれは再び旅を進めたが、もう一度友人たち、すなわち、アブラハムとファン・デル・ストルプとダッベルに別れを告げた。彼らは、領主の息子たちの近くにいて、彼らが「江戸入りのさい」私を出迎えたときと同じように、私をノリモンまで見送ってくれた。」

昌高の長男富之進はすでに文化六年に死去しており、この「長男」とは文化八年に奥平家の家督を継いだ次男昌暢、また「二男」は天保四年に七代藩主として就任した三男昌猷だった。二人の公子が引き上げて間もなく近くに待機していた馬場佐十郎(Abraham)、昌高の家臣神谷弘孝、古河藩の鷹見泉石が別れを告げた。

商館員フィッセルも上司ブロムホフと同様に藩主の息子たち及

び側近との出会いを紹介している。

Den 22^{en} April onze reis voortzettende, ontmoeten wij, een paar mijlen verder in *Omoe*, de twee zoons van den Landsheer van *Nagatz*, die zich herwaarts begeben hadden, om ons aan den binnenkant te ontmoeten, waartoe zij welligt in Jedo geen geschikte gelegenheit hadden gevonden. De oudste beantwoordde ons compliment zeer minzaam, daarbij de Hollandsche woorden uitende: "Eerstemaal gezien", hetwelk bij de Japaners in hunne taal een term is, dien zij meestal gebruiken, wanneer men elkander voor den eersten keer ontmoet. Genoemde jonge Prins had ook den Hollandschen bijnaam van *Maurits*, en scheen, even als zijn vader, veel met onze natie en gebruiken op te hebben. Zij hadden een aantal dienaren bij zich, die ons dikwijls in Jedo kwamen zien, en thans ook afscheid von ons namen.⁵²

「四月二十一日、旅を続けていると、数マイル先の大森にて、中津領主の二子と出会った。おそらく江戸では我々と内密に出会ふためのよい機会を得られなかったのだ、ここまで来られたのだ。年長の方が蘭語で「eerstemaal gezien」と言いながら、大変愛想よく我々の挨拶に答えた。これは日本人が初めて出会う際に通常使われる言葉である。この若い王子は *Maurits* というオランダの渾名を有し、父と同じく我々や我々の習慣に大変な

関心を寄せているようだ。江戸で度々我々を訪ねて来た召使い数人が彼らに随伴しており、今彼らも我々に別れを告げた。」

フィッセルが昌暢のオランダ語の挨拶「eerste maal gezien」に関する解説を付けているのが興味深い。オランダ人読者にとって多少分かりにくいためでもあるが、彼はこの言い回しを日本語の一種の直訳として理解していた。

文政六（一八二三）年七月一日桂川甫賢、鷹見泉石、神谷弘孝、伊勢屋七左衛門らがプロムホフの誕生祝の寄せ書きを送ったこともその親しさを裏付けている。⁵³

同じ一八二三年昌高の近習医大江春塘はローデウエイク・メイエルが編纂した「語彙宝函」(*Woordenschat*)⁵⁴の第一部を日蘭対訳辞書として刊行した。興味深いことに、書名などはすべてローマ字表記のものだった。

Nieuwe-gedrukt bastaardt woorden-boek. Door Ooye Suntoo.

Leefarts van den landsheer Nakats, t' Jedo. 1822.

（新しく刊行された外来語辞典。中津領主の侍医大江春塘により。江戸にて、一八八二年）

編纂の経緯に関する情報源としては、昌高が巻頭に寄せたオランダ語の序文しか残っていない。その中で昌高は時計を製造するために様々な道具が必要であるのと同様に、オランダの書物を読み、理解するには、種々の辞書、とりわけ「*Bastarde Woorden*」

（外来語）が必要であると強調している。オランダものの愛好家と自負していた昌高はまた、同様の考えを持つ数多くの「die-naeren」（召使）の中でも最も優れていた二人の人物の貢献を讃えている。一人は『蘭語訳撰』を刊行した神谷弘孝、もう一人は『バスタールド辞書』の刊行に多大な労力を注いだ大江春塘という医師である。また昌高が間違いの訂正で言及している「Satayosi」という人物は、幕府の天文方に仕え、翻訳者及び蘭学者として数々の業績をあげた馬場貞由（佐十郎、一七八七―一八二二）だった。彼は志筑忠雄からオランダ語を、ドゥーフからオランダ語とフランス語を、また後にロシア海軍士官ゴローニン（Vasilii Mikhailovich Golovnin, 一七七六―一八三二）からロシア語を学んだ秀才であった。大江春塘と藩主昌高は最高水準の蘭和辞書を目指した。

ブロムホフが商館長を務めた六年間（一八一七―一八二三）に江戸の蘭学者の活動はより鮮明に見えてくる。蘭名の授受は上記の例を遙かに超える頻度で行われており、「流行」という評価は過言ではない。また、江戸へ赴くブロムホフは訪れる蘭学者らに関する情報を前任者ドゥーフから入手しそのための準備をしていたようだ。商館日記の書き方はそれぞれの商館長の性格により詳細になったり、大雑把になったりしているので、昌高及び神谷弘孝の動きが以前より活発になったとは断言できないが、源内が当時の交流に大いに貢献したことは間違いないであろう。残念ながら、『バスタールド辞書』で歴史的な業績をあげた侍医大江春塘はオランダ側の資料にはほとんど現れない（図二）。その辞書の

底本だったメイエルスの『語彙宝函』をどのように入手したのか、また、内容的に決して平易ではない外来語についてオランダ人の助言を求めたかどうかなど、編纂作業に関する未解決の疑問も残っている。

四、商館長デ・スチュルレル及び 蘭館医シーボルトと昌高との交流

一八二三年一月二〇日からデ・スチュルレル（Johan Willem de Sturder 一七七六―一八五五）が三年にわたり出島商館長を務めるようになった。彼とともに着任した医師シーボルト（Philipp Franz von Siebold, 一七九六―一八六六）とその業績に関しては数々の研究があるが、ここでは中津藩との交流のみに着目することにする。

板沢武雄によれば、文政七（一八二四）年に、デ・スチュルレルが出島で家臣神谷弘孝の子息 Kioezoo（久蔵）に Kaas Kroon と命名した⁵⁵。ここから中津藩とオランダ人との交流が継続されていたことがわかる。興味深いことに中津藩の「嘉永三年改」により文政六年及び七年に昌高の典医大江春塘も御用で長崎へ赴いたことが確認できる⁵⁶。また、裏付けの史料は不明だが、典医村上玄水に関して同様のことを先行研究が主張している⁵⁷。間違いない昌高は文政七年三月三日に江戸に向かい、翌年五月に隠居している。しかし、この間に行われた家臣達の長崎での業務は一体どのようなものだったのだろうか⁵⁸。

文政九（一八二六）年の春にデ・スチュルレルとシーボルトらは江戸へ旅立ち、北部九州を横断したのち、下関の宿で瀬戸内海の船旅の準備に取りかかる。ここで、シーボルトは後に『NIPPON』に掲載する昌高の上記の蘭文詩及びプロムホフの讃詩を写した。⁹⁰

シーボルトシーボルトは昌高を「中津の王子」あるいは「中津の主君」と呼び「オランダ人の高貴な庇護者」として評価している⁹¹。四月七日に箱根から下山したところ、江戸の豪商の別荘でその持ち主とともに神谷弘孝に迎えられた。翌日の宿泊先では、薩摩及び中津の両藩主が川崎で出会う予定との報告を受けた。

[8. April. 1826] Wir kamen noch frühzeitig in Fusisawa an, wurden aber, weil die grössten und vornehmsten Gasthäuser bereits besetzt waren, fatalerweise in einem Bordell einlogiert. Hier hörten wir, dass wir übermorgen zu Kawasaki Besuche von vielen Freunden aus Jedo, unter andern von dem Prinzen von Satsuma und dem Fürsten von Nakatsu, bekommen sollten.⁹²

「われわれはまだ早い時刻に藤沢に着いたが、いちばん大きくて上等な宿がすでに満員だったので、運悪く一軒の娼家に泊まらされた。ここでわれわれは、明後日川崎で江戸からくるたくさんの方の訪問を受けることになっていると聞いた。訪問者のなかには薩摩の王子と中津侯がおられる由。」⁹³

しかし、川崎に到着したときにデ・スチュルレルは、昌高の側

近（神谷弘孝か）から中津藩主のオランダ語の名刺を受け取り、両公との出会いは一日延期された。

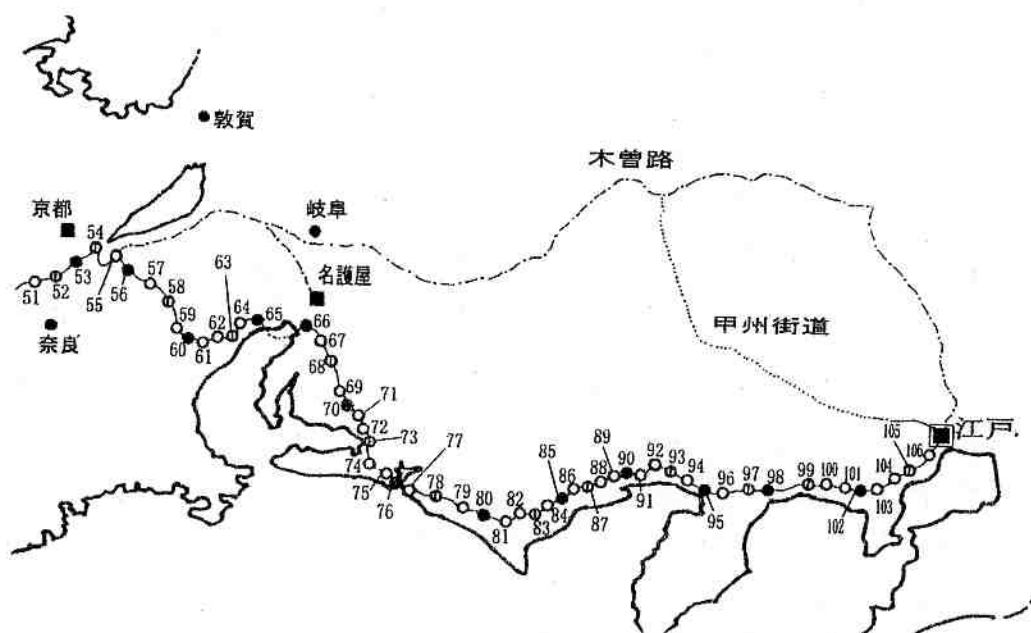
En kwamen heden te Kawazakki alwaar vele bezoeken kregen van inwoners van Jedo, die met ons in betrekking staan en tot hier waren gekomen om ons te verwelkomen en mij wierd tegen morgen de ontmoeting aangezegd van den ouden (: of gewezen :) Landsheer van Satsuma en hoogstdezelvs zoon, den voormaligen Prins (: of Landsheer :) van Nakats thans vrijheer der 4^{de} klasse, die mij door zijnen liftrawant een kaartje stuurde, onder den aangenomen holl. naam Frederik Hendrik met bijvoeging der voorn. titulatuur.⁹⁴

「今日は川崎に到着し、そこに我々と関係がある江戸の人々が数多く歓迎しに訪れて来た。また薩摩の旧領主とその息子である四級侯・中津の旧王子（あるいは領主）との明日の出会いが伝えられた。後者はその家臣を通じて上記の肩書き付きのフレデリック・ヘンドリックというオランダ名が書かれた名刺をくださった。」

四月一〇日（文政九年三月四日）、昌高は実父である薩摩藩主島津重豪とともにシーボルトと顔を合わせることになる。二人の強い好奇心とシーボルトの積極的な対応は印象的である。

[10. April 1826] Im Dorfe Omori, das den gleichen Namen mit

dem eben erwähnten trägt, waren von Jedo die Fürsten von Satsuma und Nakatsu angekommen, uns zu erwarten und so eine Gelegenheit zu finden uns kennen zu lernen, was ihnen bisher ihr Stand und andere Umstände versagt hatten. Diese hohen Gönner der Niederländer hatten sich in dem Gasthause, wo die Gesandtschaft gewöhnlich etwas zu ruhen pflegt, niedergelassen, und nach kurzem Verweilen in der Vorkammer hatten wir die Ehre, von ihnen empfangen zu werden. Beide Fürsten nebst einem jüngeren Prinzen von Satsuma empfingen uns mit ausgezeichneter Freundlichkeit. Nachdem wir auf japanische Weise uns verbeugt hatten, baten sie uns, auf Stühlen, die man unterdessen ins Zimmer gebracht hatte, Platz zu nehmen. Äusserst gesprächig war der 84jährige Greis, Fürst von Satsuma, den man, da er noch den vollen Gebrauch seiner Sinne und eine rüstige Körperstatur besass, auf höchstens 65 Jahre schätzen würde. Im Verlaufe des Gespräches gebrauchte er hier und da holländische Ausdrücke und fragte nach der Benennung verschiedener ihm auffallender Gegenstände. Nach Beschluss der Unterredung mit unserm Gesandten wandte sich derselbe, meinen Namen nennend, an mich mit den Worten, "dass er ein grosser Freund von Tieren und Naturprodukten sei, und gerne von mir die Weise, vierfüssige Tiere und Vögel auszubalgen und Insekten aufzubewahren, erlernen möchte", zu welchem Dienste ich mich mit Vergnügen



図二 奥平昌高の江戸参府、瀬戸内海地域の部分（中津藩政史料撰集二『(仮題) 御参勤御供日記』〔中津市立小幡記念図書館、中津、二〇〇三年、三〇～三一頁に基づいて作成〕。

51守口、52枚方、53伏見、54大津、55草津、56石部、57水口、58土山、59坂ノ下、60関、61龜山、62庄野、63石薬師、64四日市、65桑名、66宮、67鳴海、68池鯉鮒、69岡崎、70藤川、71赤坂、72御油、73吉田、74二川、75白須賀、76荒井、77舞坂、78浜松、79見附、80袋井、81掛川、82日坂、83金谷、84島田、85藤枝、86岡部、87鞠子、88府中、89江尻、90興津、91油井、92蒲原、93吉原、94原、95沼津、96三嶋、97箱根、98小田原、99大磯、100平塚、101藤沢、102戸塚、103程ヶ屋、104神奈川、105川崎、106品川

anbot. Hierauf liess er mich seine rechte Hand sehen, dir vor kurzem mit einem Rotlauf behaftet war. Eine noch offene Stelle war mit Mimiunsalbe bestrichen, über deren hier unzweckmässige Anwendung ich einige Aufklärung gab, ohne jedoch die eben gegenwärtigen Leibärzte zu verletzen; ich schrieb die nötigen Mittel vor und erbot mich, sie bei erster Gelegenheit zu übersenden. Eben sass ich auf japanische Weise vor dem freundlichen Greis, als der Fürst von Nakatsu mich bei der Hand nahm und deutlich folgende holländische Worte aussprach: "Kom by my Doktor Siebold, ik dank U voor de ontvangene brieven en geschenken".

Er knüpfte nun durch Vermittelung seines Dolmetschers [= 神谷弘孝] ein weitläufiges Gespräch an, fragte nach meinem Taschenchronometer, besah meine Epauletten und erkundigte sich nach deren Bedeutung, die ich politisch als Zeichen des Ranges angab. Absichtlich hatte ich, um Gelegenheit zu finden, meine Berechtigung zum Tragen des Degens diesen Herren zu erkennen zu geben, mein Degengehänge angelegt, und als er nun neugierig nach dessen Bedeutung fragte, erklärte ich, dass es mein Degengehänge sei, welches ich zur Erinnerung, dass ich allezeit im Dienste S. M. des Königs einen Degen tragen müsste, angelegt hätte. Es wurden inzwischen Konfitüren und Gebäcke diesen Grossen vorgesetzt, und unter wechselseitigem Gespräche erhielten wir die ehrenvolle Zusage, dass sie

uns bei unserer Anwesenheit in Jedo, jedoch nur inkognito, besuchen wollten, worauf wir uns empfahlen.³

「四月一日 今しがた述べたのと同じ名まえの大森村では薩摩と中津の両侯が江戸から来て待つておられ、われわれと知り合う機会を得られたが、これまでは大名の身分やその他の事情がそれを許さなかったのである。この身分の高いオランダ人の庇護者は、使節の一行が普通休息することになっていた宿屋におられ、われわれは控えの間でしばらく休んでから歓迎を受ける光榮に浴した。両侯は薩摩の若君と共に、たいそうな好意でわれわれを迎えて下さった。われわれが日本流にすわっていると、その間に運び込まれた椅子に掛けるようにすすめられた。薩摩侯は八四歳の老人でおられたが、たいへんに話がお好きで、耳も目もお完全に元気で強壯な体格をしておられたので、せいぜい六五歳ぐらいだろうと思う。対談中にはところどころでオランダの言葉を使い、侯の注目を集めたいろいろな品物の名をたずねられた。使節との話が終わると、こちらに向き直って私の名を呼び、自分は動物や自然の産物の大の愛好者で、四足の獣や鳥を剥製にしたり、昆虫を保存する方法を習いたいと言われたので、私は喜んで助力を申し出た。それから侯は私に最近丹毒にかかった右手を見せた。まだ一カ所口が開いていて、鉛丹膏が塗つてあった。私はちようど居合わせている侍医の面目を傷つけないようにして、それを使用す

るのはこの場合不適當であることを説明した。私は必要な薬を書き記して、最初の便で送ろうと申し出た。ちょうど私がこの親切な老侯の前に日本流にすわっていた時、中津侯は私の手をとって次のようなオランダ語ではつきりと言われた。「ドクトル・シーボルト、私の方へ来たまえ。手紙と贈物を下さつてありがとう」と。

それから彼は通詞を介して長々とした会話を始め、私の懐中クロノメーターのことをたずね、私の肩章をみてその意味を問いただした。政策上私は階級を示す徽章であると述べた。私はおりがあれば、剣を帯びる資格があることをこの人にほめかして、わざわざ剣帯を着けていた。すると彼は好奇心をもつてその意味をたずねたので、これは私の剣帯で、いつも皇帝陛下の軍職にあるうちは剣をさげねばならないことに留意して、この剣帯をしめている旨を、説明した。その間に砂糖菓子や焼菓子が大名がたの前に出され、交互に言葉を交わすうちに、われわれが江戸に滞在中、表向き身分を名のらずに訪ねたいというありがたい約束の言葉を賜わり、まもなくお別れした。³⁾

商館長デ・スチュルレルもこの出会いに関する印象を商館日記で述べている。興味深いことに、彼は茶屋の名前として「和中散」をあげているが、それは食あたり、暑気あたりに効くとされた漢方薬和中散を売る薬屋の意味のほずである。大森付近にあった『梅木堂』は東海道で「和中散」を販売する三軒の中で一番の大

店だったが、久三郎の代から、庭の梅木で有名になった茶屋も運営されていた。

Vertrokken om zes ure uit onze nachterberg, kwamen omtrent half acht in Omori, alwaar wij in het theehuis Wajoesang beide voorn. H:H:H:H: benevens een jongste zoon van voorrige Landsheer vonden, en bezochten, van welke wij op de beleefdsite en minzaamste wijze wierden ontvangen. En met wie wij ons eenigen tijd onderhielden, de oude prins thans reeds drie en acht jaren oud. Echter nog zeer welvarend, bood mij een statiens geschenk van gezoute gans en Jap: likeur aan en had de beleeftheid mij eigenhandig een tabaks zakje, aan te bieden, dat tot zijn eigen gebruik had gediend, met de vijlende toevoeving van den wensch, dat het mij tot een voorteecken van langleven mogt strekken. Z: H: had een ongemak aan de hand en raadpleegde den doctor deswegens. Ook de Prins van Nakats vroeg hem om raad wegens een ongemak aan den arm. Z: H: liet mij verzoeken om mij op morgen avond in Jedo te mogen bezoeken. Waarop ik antwoordde, dat ik Z: H: zeer dringend verzocht, mij die eer te willen bewijzen en wij namen afscheid van den prins.⁴⁾

「六時頃宿を出て、七時半に大森に着いた。そこで和中散という茶屋において、上記の両領主及び上記の領主の一番下の息子と出会った。われわれは彼らにこの上なく丁寧

に愛想よく歓迎された。そしてしばらく彼らと談話した。目下老王子はすでに八三才だが、まだ大変健康であり、私に日本のリキュール及び塩漬けの鶯鳥をプレゼントしてくれた。自分用のタバコの小袋をくれるほどの親切さだった。その際、彼はそれが長命のしるしになるよう、という願いを付け加えた。閣下は手の患いがあり、そのために医師の助言を求めた。中津の王子も腕の患いで助言を求めた。閣下が明日の夜、江戸でわれわれを訪問してよいかと尋ねたことに對し、私は是非その名誉にあずかりたいと返事した。それから二人の王子に別れを告げた。」

その都度メモをきちんと取らなかつたためか、或いは帰国後、それを十分に理解できなかったのか、シーボルトの記述における誤解、勘違いは決して珍しくない。昌高の感謝の言葉によれば、二人の顔合わせは以前から計画されていたことがわかる。商館長一行はその日に本石町三丁目の長崎屋に到着し五月一八日まで江戸に滞在することになった。同時に自分の江戸屋敷に戻った昌高はその翌日の一日に再び現れる。この面会についてもシーボルトは詳細に描写している。残念ながらここにも幾つかの勘違いや誤解が見られる。

[11. April] Bald nach unserer Ankunft wurde der Gesandte vom Oberbanjoosten, der uns auf der Reise begleitet hatte, mit zwei anderen Oberbanjoosten und einem Rentbeamten im Namen

des Gouverneurs von Nagasaki, welcher in Jedo residiert, bewillkommt. Dieselben wurden feierlich empfangen und mit Liqueuren und Konfitüren bewirtet. Dies ist sogenanntes Kapitel. Die Leibärzte des Sjögun und andere Vetheer der Niederländer, welche uns bis Singawa entgegengekommen waren, liessen sich melden, wurden aber hier vom Oberbanjoosten nicht zugelassen und konnten nur ihre Karten abgeben. Es waren Katsuragawa Hoken, welcher scherzweise Wilhelmus Botanikus genannt wird; ferner ein Offizier des Fürsten Nakatsu, genannt Pieter van der Stölp, sodann Kania Gennai, Offizier des Fürsten Okudaira Tairano Taiju und Frederik van Gulpen, ein Kaufmann, schliesslich der Arzt Otsuki Gentoku. Die meisten sprachen und verstanden holländisch. Auch erhielten wir den Besuch des in Jedo residierenden Dolmetschers Saisiro, welcher von seiner Frau begleitet war. Dem Gesandten wurde gemeldet, dass der Gouverneur und die Fremden-Kommissäre von der Ankunft der Gesandtschaft Kenntnis erhalten hätten und hierzu Glück wünschen liessen. Auch der Prinz von Nakatsu sagte sich für den Abend an, und wir richteten daher alles zu seinem Empfange auf europäische Weise her. Er hatte sich hauptsächlich aus dem Grunde, um die Holländer, deren Freund er seit 30 Jahren ist, einmal persönlich näher kennen zu lernen, in den Ruhestand versetzen lassen; denn anders kann ein Landesfürst mit uns in keine

nähere Beziehung treten. Wir brachten den Abend äusserst vergnügt in ganz ungeniertem Tone mit diesem Freunde zu. Der Leibtraband Peter van der Holp [ペーホルプ = Stölp], Herr van Gülden, kaiserlicher Zuckerbäcker, ein Günstling des Fürsten, und Keit, der Kammerdiener, spielten jeder auf das vortrefflichste seine Rolle, und ich konnte mich nicht enthalten, in französischer Sprache unserm Gesandten zuzuflüstern, dass dies das originellste Lustspiel sei, das ich je in meinem Leben gesehen. Man denke sich diese Japaner, allem Holländischen mit Leib und Seele zugethan, sich wechselseitig bald unter sich, bald mit uns in gebrochenem Holländisch unterhaltend, das kräftige Lachen des gemästeten Leibtrabanten, die zuvorkommenden, mit gespannter Aufmerksamkeit geführten Dialoge des ausgetrockneten, ganz kahl geschorenen, zahnlosen van Gülden mit dem durch Neugierde zur Freundlichkeit gestimmten Ernste des Fürsten in eine interessante Gruppe verschmolzen, uns selbst in steifem, einer hundertjährigen Mode entlehnten Kostüm zur Seite sitzend, indes der Kammerdiener, ein äusserst geschickter und in der holländischen Sprache sehr gewandter Mann, über seinen Herrn den Mentor spielte - musste nicht diese ganze Scenerie eine höchst komische Wirkung ausüben? Hierauf besuchte der Fürst uns auch in unserem Zimmer, welches wir durch Instrumente, Bücher u. dgl. gleichsam als ein Museum der europäischen Wissenschaften zum Empfänge

dieses Gönners eingerichtet hatten.

Vorzüglich war es mein Pianoforte, das dem Prinzen äusserst gefiel, sowie auch Chronometer, Mikroskope und andere Instrumente. Durchgehends war der Prinz mit allem bereits bekannt und überraschte uns durch Vorzeigen verschiedener Uhren, unter welchen eine Uhr uns erfreute, deren Zifferblatt nach dem Dezimalsystem angelegt und mit Metallkompensation versehen war und dazu noch ein Thermometer u. dgl. enthielt. Er liess die vorgesetzten Speisen und Getränke sich trefflich munden und verliess uns erst spät in der Nacht.⁵

「四月一日 到着の直後、旅行中われわれに同行した上席番所衆は他のふたりの番所衆および勘定方を伴い、来訪、江戸在勤長崎奉行の名において使節に歓迎の意を表した。われわれはこの人たちを丁寧に迎え入れ、リキュールや砂糖づけの果物を出してもてなした。これはいわゆる慣例である。將軍の侍医やわれわれを品川まで出迎えてくれたオランダ人を崇拝する連中は、面会を求めたが番所衆はそれを許さず、ただ名刺を差し出しただけであった。戯れにウィルヘルムス・ボタニクスと呼ばれる桂川甫賢、さらに中津侯の家臣でピーテル・ファン・デル・ストルプという人、つぎは奥平大膳大夫の家臣で神谷源内⁶、菓子商人のフレデリック・ファン・グルペン、最後に医師大槻玄沢であった。大部分の人はオランダ語を話したり聞きわたりした。また江戸駐在の才四郎⁶は妻を同伴し

て訪ねてきた。町奉行と外国人接待係は使節一行の到着の通知を受け、これに対し祝意を表する旨が、使節に報告された。中津侯も晩には来られるという連絡があった。

それゆえ万事ヨーロッパ流に侯をお迎えする準備をととのえた。彼は三〇年来の友であるオランダ人と一度親しく知り合いになるために、隠居していた。そうしなければ、大名がわれわれと親しい関係を結ぶことはできないからである。われわれは夜の時間をこの上なく楽しく、全くくつろいだ態度でこのオランダ人の愛好者と過ごした。側近ピーテル・ファン・デル・ホルプ「ママ」、幕府の御用菓子屋で、中津侯お気に入りのファン・グルペン、侍臣カイト（Kaito）⁷⁰。各人は非常にうまくめいめいの役を演じたので、私はこらえていることができず、フランス語で、これは私が今まで見たことのない独創的な喜劇だと使節に耳うちした。読者はこれらの日本人をご想像いただきたい。すべてオランダ風なものに身も心もうちこみ、あるいは交互に、あるいはわれわれ相手に破格なオランダ語で話しあい、例の肥った腰巾着の高笑い、きれいに剃った頭、歯のぬけたかすれた声のファン・グルペンの、愛想はよいが緊張して操る対話、こういうものが好奇心から打ち解けた気持ちになった侯のまじめさと溶け合つて興味深い一団となり、百年前の流行から採つたような間の抜けた服装をしてわれわれの側に腰掛けていた。一方では、お付きで、オランダ語が非常にうまく、たいへ

ん如才のない男が、殿の良い指導者をつとめたけれども——この場面は終始とてもおかしな効果を發揮せずにはいなかった。それからこの愛好者をお迎えするために、いわばヨーロッパの学術の博物館のように、いろいろな器械類や書籍などを陳列しておいたわれわれの部屋に來られた。とくに侯の氣に入られたのは私の小型ピアノであったが、また時計、顕微鏡、その他の器具にも注目された。侯はたいいていすべてのものをすでにご承知で、いろいろな自分の時計を出してわれわれを驚かせたが、その中のひとつ、文字板が十進法で書いてあり、金属製の調節装置をそなえ、そのうえ寒暖計などもついていたのがあつて、われわれを喜ばせた。侯は差し上げた飲食物をおいしそうに口にされ、夜更けてからやつと帰途についた。」

商館長デ・スチュルレルもこの四月一日の夜を詳細に描写している。シーボルトは日本人の振るまいを「喜劇」として受け止めていたが、デ・スチュルレルは、そのようなことを一切感じさせず、むしろ両方の礼儀正しさを強調している。

‘S avonds, omstreeks half acht ure, kwam de prins von Nakats met een klein gevolg (: aan de binnenkant :) om bezoeken, hij gaf zijn genoegen te kennen over de inrigting onzer woning, die hoezeer gebrekkig eenigzins in den Europeeschen smaak was, gemeubeld. Hij verzocht eenige onzer medebragte

goederen, te zien, waarvan de meeste hem zeer schenen te bevalen. Hij hoorde den doctor klavier spelen en bezigtigde deszelfs sterrekundige en natuurkundige instrumenten. En daar de prins zijn verlangen te kennen gaf, om hollandsche spijs te eten en de wijze te zien hoe mij aan de tafel eten, liet ik de tafel dekken, en zoo sierlijk inrigten als de omstandigheden toelieten. Ik verzocht den prins mij daaraan te doen met ons te zouperen hetgeen hij aannam. Hij zette zich met ons aan de tafel, en at van een en andere spijsen welke hem, scheen te bevalen. Hij vertrok om elf ure zeer voldoen over het onthaal. Mij zijnen dankbetuigende voor de goede receptie tevens verzoekende, dat twee zijner bijvrouwen onze woning mogten komen bezichtigen. Ik antwoorde hem dat het mij bijzonder aangenaam zou wezen, die dames te mogen ontvangen en alle die beleefdheden te betoonen die de omstandigheden mij zouden vergunnen.

Ook is mij heden hoop gegeven dat de oude Landsheer van Satsuma, ons in het kort met een bezoek zal vereeren.⁷²

「夜七時半頃、中津の王子一行数名(内々で)の訪問を受けた。彼は、欠点はあるがある程度ヨーロッパ風の我々の住まいの家具を気に入ってくれた。彼は我々が持参した品々の幾つかをご覧になりたいと望み、その大抵は大變に気に入ったようだった。また彼は医師のピアノを聞き、彼の天文学及び自然科学關係の道具を見学した。そして

王子はオランダ料理を食し、我々の食事の習慣をご覧になりたいという願いを示唆したので、私は設備及び状況が許す限り食卓を整えさせ、王子にそこで一緒に食事するよう誘った。王子はそれを受け入れ、我々とともに食卓に座り、様々な料理を味見し、気に入られたようだ。このもてなしに大いに満足し、彼は一一時に帰っていった。すばらしいもてなしに対する礼を述べながら、彼の妾の二人が我々の住まいを見学してもよいかと尋ねた。私は、この貴婦人たちを歓迎することは私にとつて特に嬉しいことであると返事をし、その状況に合わせてあらゆる礼儀を尽くした。また今日は、薩摩の老領主が近いうちに我々を訪問になるとの連絡が入った。」

シーボルトは上記の一日のことには言及せず、翌一二日の訪問を概観しながら、踊りに関する昌高の「比較文化論」への驚きも記している。

[12. April 1826] Am Abend kommt der Fürst Nakatsu ganz inkognito zu uns und bleibt bis nach Mitternacht. Wir boten alles auf, ihn zu unterhalten, und unter Musik, Gesang und Tanz belustigten wir uns recht herzlich. Einzig in seiner Art war sein Urteil über den europäischen Tanz, den er mit folgenden Worten mit dem japanischen verglich: "Die Holländer", sagte er, "tanzen wirklich mit den Füßen, die Japaner dagegen mit

den Händen”²³

「夜、中津の領主が内々でこられ、一二時すぎまでおられた。われわれは彼を楽しませるためにあらゆる努力をし、音楽や歌や踊りをして楽しい一時を過ごした。ヨーロッパの踊りに関する彼の評価は大変ユニークなものだった。日本の踊りと比較して次の言葉を述べた、「オランダ人は実に足で踊るが、日本人はそれに対し手で踊る。」²⁴」

当日の商館長日記は、デ・スチュルレルが主役だったとの印象を与える。

‘S avonds kwam de prins van Nakats, onverwachts mij een bezoek geven en bedanken voor de goede receptie van gister, onderhield zich eenigen tijd met mijg bood mij een geschenk van Jap: prenten aan, en nam afscheid van mij, en bezocht bij het uitgaan den doctor en den W: scriba, daar hij eerstgen: hoorde klavier spelen.’²⁵

「夜、昨日の持てなしのお礼を言うために突然中津の王子が来られた。彼はしばらく私と談話し、贈りものとして日本の絵をくださった。それから別れを告げ、帰るときに医師と書記[= Heinrich Bürger]を訪れ、前者がピアノを弾くのを聞いた。」

こうして交流するうち、シーボルトは少しずつ重豪らに対する

理解を深め、昌高を含む彼の一族の人柄、礼儀正しさ、上品さを高く評価するようになった。記述にはところどころ抑え切れない皮肉さが見られるとはいえ、シーボルトが深い感銘を覚えたことは間違いない。

[15. April 1826] Abends feierlicher Besuch vom Landesherrn von Nakatsu und Satzuma, bekommen hübsche Geschenke. Die Fürsten bringen den grössten Teil des Abends bei uns zu, sich mit Musik, Gesang, Büchern, Instrumenten u. dgl. unterhaltend. Der alte Fürst ersucht mich, dass ich ihn unter meine Schüler in der Natur- und Heilwissenschaft aufnehmen und ihm eine kurzgefasste Behandlungsweise der gefährlichsten japanischen Krankheiten bearbeiten möchte. Er bringt einen Vogel mit, den ich sogleich, seinem Wunsche entsprechend, ausbalge und aufsetze, was dem Greise viel Vergnügen bereite. Ich biete den Fürsten ein ansehnliches Geschenk an, welches sie mit Dank annehmen. Der alte Fürst giebt mir hierauf seinen eigenen Fächer, den er einst vom Mikado zum Geschenke erhalten. Die beiden Fürsten hatten mich schon früher konsultiert und befanden sich gegenwärtig besser. Die Beirathen des alten Herrn, unter welchen sich die Mutter der Gemahlin des Sjöguns befand, waren auch mitgekommen, und wir bieten unsere Überreste europäischer Galanterie auf, sie gut zu unterhalten. Ich hatte die Ehre, von einer der vornehmsten dieser

Frauen konsultiert zu werden wegen einer Verhärtung an der rechten Brust, wobei man Anstand nahm, sie entböst untersuchen zu lassen. Doch ich erklärte, dass ich als Arzt wohl die Genehmigung beanspruchen müsste, die Untersuchung auf europäische Weise vorzunehmen. Es war ein lebenswürdiger Familienzirkel japanischer Grossen, der uns diese Klasse der Bevölkerung im günstigsten Lichte darstellte. Sittsamkeit, Anstand und Würde, Herzengüte, Aufrichtigkeit, eine rationelle Bildung ohne die geringsten Spuren von Stolz sprachen sich in dem greisen rüstigen Fürsten, in den Kindern und Frauen gleichmässig aus — kurz Charakterzüge, die alle Achtung eines gebildeten Europäers verdienen.⁹⁶

「夜、中津および薩摩の両領主の正式の訪問をうけ、雅びな贈物をいただいた。このふたりの大名は音楽・詩歌・書籍・機械類などの話をしながら、夜の大半をわれわれのところでもすごされた。薩摩の老侯は、私が侯を自然科学ならびに医学の門人のうちに加え、侯のために非常に危険な日本の病氣についての簡約な治療方法を編纂するよう切望された。(薩摩)侯は一羽の鳥を持って来られたが、私はお望みにこたえてただちに剥製してお見せすると、たいへん満足のご様子であった。私は両侯に立派な贈物を差し上げたが、おふたりとも感謝しておさめられた。老侯は以前に帝から下賜されたご自分の扇子をくださった。

両侯はすでにずっと前に私の診察をうけられたことが

あるが、現在お元気である。老侯の側室がたもいっしょにみえていたが、その中には將軍の御台所の母がおられた。おみやげにヨーロッパの装身具が残っていたので差し上げた。これらの夫人のうち最も身分の高いお方を診察する光榮に浴した。右胸部の硬化のためで、人々は胸部をあらわにして診せるのをためらった。しかし私は、医師としておそらくヨーロッパの方法で診察を行う同意を求めねばならないむねを説明した。全住民のうちの大名という階級をわれわれによく示しているのは、この人たちの愛すべき家族たちであった。端正・礼儀作法と上品、心からの親切・誠実・誇りの影さえみせぬつましやかな教養などはお丈夫な老侯にも、子供たちや夫人たちにも現れていた。要するにこれらすべては、教養あるヨーロッパ人の尊敬に値する特性である。」⁹⁷

長時間にわたったこの訪問は商館日記にも詳細に記録されている。デ・スチュレルは再び客の勉強熱心さ及び礼儀正しさを繰り返し描写している。

Onstreeks zeven ure des avonds kwam de oude Landsheer van Satsuma, met drie zijner zonen (: den gewezen Landsheeren van Nakats en van Koermee, en een jongere zoon oud ontfrent 13 jaren, een klein zoon, wiens vader de tegenwoordige Landsheer van Satsuma is :) en zes vrouwen, waar onder twee

bijvrouwen van den ouden Landsheer en eene van den gew:

L^{de}: van Koermee, eene der twee eerstigen: was Ofkinokata de moeder der tegenwoordige Keizerzin (: echter vrouw des Keizers :) aan mij en de beide andere Heeren, wierden in tegenwoordigheid en uit naam van den ouden Landsheer en zijnen tweede zoon met vele staatsie eenig geschenken aangeboden, terwijl eerstigen: ons buiten dien eenige kleinigheden eigen handig aanbod. daar ik toen de Prins van Nakats voor eergister bij mij kwam denzelven eene dubbelde lorgnet (: of bril:) had aangeboden, verzocht de oude Landsheer mij om een bril, dien ik hem aanbod, waarna ook de zoo even genoemde Moeder der Keizerin mij een diergeijk verzoek deed waaraan ik dadelijk voldeed.

De oude Landsheer en zijn gezelschap bezagen onze woning die wij eenigzins naar de Europese wijze hadden ingerigt, kleederen, meubelen enz. hoorden vervolgens den Doctor klavier spelen, bezigtigden zijne sterrekundige en overige instrumenten[,] boeken enz. Ik had op verlangen van den ouden Vorst de tafel doen dekken, en liet het eten opbrengen, de oude vorst en de vier andere Prinsen zetten zich met ons aan tafel an soupeerden, ik merkte bij deze gelegenheid dat onze tafelgebruiken en ook onze spijzen den Prinsen wel bevielen, zij trachten zelfs daarbij onze manieren aan te nemen.

De Vorst hat het verlangen geuit om van D^e v. Siebold hat

opzetten van vogelen te leeren en had tot dat einde een dooden vogel meegebracht, na de Tafel wierd door den D^e aan zijn verlangens voldaan.

De Dames bleven altijd bij het overige gezelschap, zij waren zeer vriendelijk wellevend en in het minst niet terug houdend. Zij zaten wel niet met ons aan tafel, daar de gebruiken alhier die niet gedogen, doch zij gebruikten het een en ander van het souper.

Om middernacht vertrok de Vorst en zijn gezelschap, hunnen dank betuigende voor het genoten onthaal en de Dames geven te kennen dat zij gaarne nog eens het verzoek wenschen te mogen herhalen.⁷⁸

「夜七時頃、薩摩の老領主とその息子三名(久留米の旧領主、中津の旧領主、及びおよそ二三歳の若い息子、父親と同様に目下薩摩の領主である小さい息子)及び六名の婦人(その中に老領主の妾の二人、久留米の旧領主の妾一人、前者の二人のうち一人は現在の皇后(皇帝の正妻)の母親(お富の方⁷⁹)が来られた。私及びその他二人の紳士に、威風堂々たる様子で老領主とその次男の名において贈り物をくださり、前者は自らそれ以外の幾つかの小さな品を我々に手渡した。一昨日私の所に来られた中津の王子に柄付き眼鏡を差し上げたので、老領主も眼鏡を所望した。それを彼に贈ったところ、上記の皇后の母親も同様のものを希望し、私は即座にそれを叶えた。

老領主一行はある程度ヨーロッパ風の我々の住まい及び服装、家具などを見学してから、博士のピアノを聞いた。天文学などの道具や書籍などを見たりしていた。老領主の要求で私は食卓を整えさせて料理を出し、老領主及びその他四名の王子は我々とともに食卓に座られ食事をした。その際王子達は我々のテーブルマナーも料理も大変気に入る、ご自身も我々のテーブルマナーを身につけようとしていたことに私は気が付いた。

〔薩摩の〕領主は鳥の標本の作製方法を、シーボルト博士に学びたいとの願いを表明し、そのために死んだ鳥を持参していた。食事の後、シーボルト博士はその要求に応じた。女性達は常にその他の人々と一緒にいて大変親切で礼儀正しく全く物怖じしなかった。ここでそのような習慣がないので、食卓には一緒に座らず、夕食に別のテーブルを利用した。

老侯一行は我々のもてなしに礼を述べ、女性達ももう一度お願いしたいと表明しながら、深夜頃に帰っていった。」

四月一九日の訪問については商館長デ・スチュルレルしか言及していない。今回は昌高は桂川甫賢とともに夕食を取った。

[19.4.1826] 'S avonds kwam de Vrijheer van Nakats en soupeerde bij mij met de Keizerlijke Doctors Botanicus.⁸⁰

「夜、中津侯が来られ私のところで皇帝の医師ボタニクス

と一緒に夕食を取った。」

四月二三日の夜に関するシーボルトの記述はないが、商館長デ・スチュルレルは昌高一行の訪問と贈り物の交換を描写している。

De Vrijheer van Nakats kwam om 7 ure des avonds bij mij met twee zijner zonen (: een 9 en de andere 13 jaren oud :) twee zijner vrouwen en vijf harer dienstmeiden, de Prins bood mij een zeer fraai hondje aan en twee bloemheester. Ook de jonge prinsen en de vrouwen deden mij geschenken van eenige kleingheden. Dat ik beantwoordde met aan den prins: vier Sise gordijnen met daartoe behoorende vergulde knoppen, aan del jonge prinsen een rare kiekasje, ieder een lapje goudstof en een kijekje en aan de dames en dienstmeiden, zijde gebloemde doeken, ringetjes, en spelden met steentjes enz. De prins en zijn gezelschap bragten den avond bij mij door en soupeerden met ons, om middernacht vertrok dezelve.⁸¹

「夜七時頃に中津侯は、息子二人（九歳と二三歳）及び二人の妾と五名の女中と一緒に私の所に来られた。王子は大変かわいらしい犬、及び二つの花灌木をくださった。若い王子達と妾達からも幾つかの小さな贈り物をいただいた。私はお返しに侯に対し、金メッキの釦付きチンツ製のベルトを四つ贈り、若い王子達に珍しい覗き箱及び

金唐皮と小型望遠鏡を一つずつ進呈し、また、貴婦人達と女中には花模様の中巾、小さな指輪、寶石付きの留め針などを贈った。王子一行は夜を私のところで過ごし食事と一緒に取り、深夜頃帰っていった。」

四月二五日の医師たちと桂川甫賢及び薩摩藩主の夫人たちの訪問にはデ・スチュレルは興味がなかったようだ。⁸²翌日及び五月七日の昌高による訪問に関する情報はシーボルトしか伝えていない。

[27. April 1826] Vaccinieren wieder zwei Kinder. Abends Besuch vom Fürsten von Nakatsu.⁸³

「再び二人の子供に種痘した。夜に中津の領主が訪れた。」
[7. Mai 1826] Abends Besuche vom Landesherrn Nakatsu. Geschenk von Gerätschaften zur Falkenjagd. Besuch vom Globius, Takahasi Sakusajemon, der mir herrliche Karten über Jedo und Sachalin vorzeigte; die Strasse Sangar heisst Tsugar. Die Strasse zwischen Sachalin und der Ausmündung des Amur-Flusses heisst Mamjanoseto. Bekomme das Versprechen, durch ihn alle geographischen Arbeiten über diesen Archipel zu erhalten, desgleichen das Journal eines Japaners Mania Rinzo über seine Reise nach Santang und eine Beschreibung von Sachalin. Viele Astronomen kommen heute offiziell zum Besuche.⁸⁴

「五月七日 夜、中津侯来訪。贈物として鷹狩の道具をうける。天文学者グロビウスこと、高橋作左衛門が蝦夷・樺太のすばらしい地図を私に見せた。サンガル海峡を津軽海峡と呼んでいる。樺太とアムール河の河口の間は間宮の瀬戸という。私は彼を通じ、この群島についての地理学的著作、すなわち日本人、間宮林蔵の山丹旅行に関する日記・樺太の記述をもらう約束をとりかわす。天文方の多くの人たちが今日公式に訪問する。」⁸⁵

五月八日の来客についてはデ・スチュレルしか述べていないが、シーボルトが日付を間違えていて、七日の記述がそれを指している可能性もある。

Later kwam de Vrijheer (: voormalige L. H. :) van Nakats, die eenige tijd om staatkundigen reden op het vertrek van den K. Astronomist geworden had, alzoo deze buiten kant bij mij was, mij bezoeken, de Prins had weinig gevolg bij zich, zijnde binnen kants gekomen, Z: H: deed mij een geschenk van twee stukken zijden stof en een zeer fraajen aardewerken grooten kandelar in den Jap. smaak, die L: H: imigelijk voor mij geliefde hij mij te kennen te geven, in Owari voor mij had doen vervaardigen. Waartegen ik den Vorst een compleet tafel servies in het klein van aardewerk aanbod. Hetwelk hij met veel genoegen onder dankbetuiging aannam.

De vorst bleef souperen en toen ik vernam dat de K: Astronomist nog bij den Dr was, liet ik denzelfden bij ons aan tafel verzoeken en hij kwam met den Dr - zeer voldaan schijnende over de attentie die ik hem had bewezen, hij vertrok omstreekt elf uren en de Prins om bij middernacht.⁸⁶

「その後政治学の話で皇帝の天文学者の帰るのを待っていた中津侯(旧領主)が数名のみの同伴者とともに私の所に來られた。閣下から、絹を二枚と大変きれいな日本風の陶器製蠟燭立てをいただいた。後者は尾張で私のために製造させたものであると、閣下が教えてくださった。それに對し、私は小さな陶器製食器セットを渡し、彼は大いに満足し札を言いながら受け取った。

領主は夕食のために残り、皇帝の天文学者がまた医師の所にいると聞いた時、彼も一緒に食事するように誘った。彼は医師と一緒に來て、私が示した氣遣いに大いに満足したようだった。彼は一一時頃、そして王子は一二時頃歸つていった。」

五月九日から一四日にかけてシーボルトは友人及び知人の來客が非常に多かったとしか記していないが、デ・スチュルレルは五月一〇日の昌高の訪問に触れている。商館長一行の出発は間近であつたので、互いに様々な贈り物を交換した。

⁸⁷ S avonds bezocht ons de Vrijheer van Nakats, met zijn zoon

(: 13 jr oud ;) en twee vrouwen, met hare dienstmeiden en bragt mij tot tegengescenken voor het den 8. dē Z: H: aangeboden een zeer fraai verlakt kabinetje en eene complete Japanse zomer kleeding die Z: H: voor mij had doen maken en mij daarbij de attentie bewezen, om mijn wapen er op te doen verwen, de Jonge Prins gaf mij tien zeer fraai verlakte eetensbakjes, en de vrouwen boden mij ook een tegengescenken voor het aan dezelve vroeger ver eerde aan - ik gaf der laatsten zijden doeken spelden en ringetjes met steentjes, aan den jongen Prins een cachet en horlogie sleutel met steentjes, waartegen hij mij den Santok (: brieven tasch ;) aanbod, die hij gebruikte. de Prins soupeerde bij mij. ik bood hem een plect en kristallen olie en azijn zegje aan en twee porceleine bloem vazen.⁸⁸

「夜は中津侯、その息子(二三歳)及び二人の妾とその女中が私の所を訪れ、今月八日の閣下への贈り物に對する返礼として、大変美しい漆の小筆筒及び私のために作った日本風の夏の着物(帷子)をくださった。後者は私を氣遣い、私の家紋を入れて作ってくれたものだった。若き王子は大変きれいな漆塗りの小さな茶碗を、妾達も以前贈つたものに對する返礼の品をくださった。私は後者に絹布、留め針、小さい寶石付きの小さな指輪を、若き王子に印と寶石付きの時計用鍵を贈り、それに対し彼は自分が使つていた三徳⁸⁸をくださった。王子は私の所で夕食を取つた。私は彼に油と酢の水晶製のセット及び磁

器の花瓶を二個差し上げた。」

五月一日、商館長一行は長崎へ旅立った。高齢の島津重豪は品川で別れを告げ、奥平昌高は初顔合わせの場だった大森まで足を運び商館長一行を見送る。

Wir zogen über die berühmte Nippobasi-Brücke, ferner über die Kiobasi-Brücke, durch die Strassen vom Sibakutsi-Viertel und durch Kanasuki und die dem Meere zunächst liegenden Stadtteile Takanawa und Sinagawa. In letzterem bewirtete uns der 82 Jahre alte Fürst von Satsuma, ein noch rüstiger, munterer, gesprächiger Herr. Sein Sohn war ein Adoptivsohn, dessen wirklicher Vater einer der Reichsräte war. Der alte Fürst sprach auch einige Worte Holländisch und erzählte, dass er den früheren Oppertooft Tirsingh gut gekannt habe. [...] Im Dorfe Omori verabschiedet sich von uns der Prinz von Nagatsu, der zu Pferde vorausgeritten war, um uns noch zu begrüßen.

「われわれは有名な日本橋・京橋を渡って進み、芝口・金杉、海のすぐ近くにある高輪・品川の町を通って行った。品川では八二歳になった薩摩の老侯（島津重豪）がわれわれをもてなして下さった。侯はまだまだ強壮・快活で話好きな方であった。〔中略〕老侯は少しばかりオランダ語を話し、一七八〇年代に来日した商館長ティチングをよく知っていたという話をされた。大森の村では、馬

で先に来ておられた中津の老侯（奥平昌高）がわれわれと別れを惜しまれた。」

商館長デ・スチュレルは大森での様子をシーボルトより詳細に描写している。

Vertrokken om den middag en vonden te Omori (: groot bosch :) den ouden L. H. van Satsuma, die mij daar verzocht had, met den Vrijheer van Nakats en deszelfs anderen zoon den Prins Sakonsama, die ons op het minzaamst ontvingen en eenige geschenken aanboden, de eerstgenoemde Prins verzocht mij een zeer fraajen Likieusch rood verlakt eten bak met gemailleerde bordje waarin eenige Japansche versnaperingen voorgediend waren, als ook eene groote kruik Likieusche Arak te behouden, de oude Prins was bijzonder vriendelijk minzaam en opgeruimd, zoo dat hij eigenhandig ons zakki inschonk — Z. H. sprak eenige woorden hollandsch zeer duidelijk en verstaanbaar. — Wij namen afscheid van den Vorst en gingen naar Obotoké mai, daar ik namelijk den Vrijheer van Nakats, die een zeer goed ruiter is, het verlangen had te kennen gegeven om het te paard te zien, had de Prins de beleefdheid, met vijf of zes zijner dienaars ons te paard voorbij te rijden. Z. H. wachte ons te Obotoké mai op en onthaalde ons daarin een vertoeftuiss, ons tevens eenige aardig stroowerk aldaar gemaakt in geschenk

aanbiedende en mij bovendien eene kas met zeer fraaie zakki-
bakjes. — Wij namen afscheid van Z. H: en kwamen om-
sreeks half acht uren te Kawasaki.⁵⁶

「昼頃出発し、大森（大きな森）において薩摩の老領主（彼がこの出会いを希望した）や中津侯及びその次男左近様と出会った。彼らは大変親切に我々を歓迎し、幾つかの贈り物をくださった。前者の王子（薩摩の老領主）の贈り物は、美しい琉球風の赤い漆で塗られた食品用の小さなカゴで、中に日本の美味しい食べ物が入った七宝焼の皿と琉球の酒の大きな瓶が入っていた。老王子は特に大変親切で愛想がよく上機嫌で、自ら我々に酒を注いでくださった。また閣下はオランダ語を大変明瞭に分かりやすく話した。我々は領主に別れを告げ、大仏前へ行った。私は以前、乗馬の大変上手な中津侯の乗馬姿を見たというお願いをしておいたので、候は五、六人の召使とともに馬に乗り、我々を追い越した。閣下は大仏前で我々を待ち、その茶屋で我々をもてなし、その際地元で作られたかわいらしい菓製品をくださった。さらに私は大変きれいな杯の箱をいただいた。我々は閣下に別れを告げ、七時半頃川崎に着いた。」

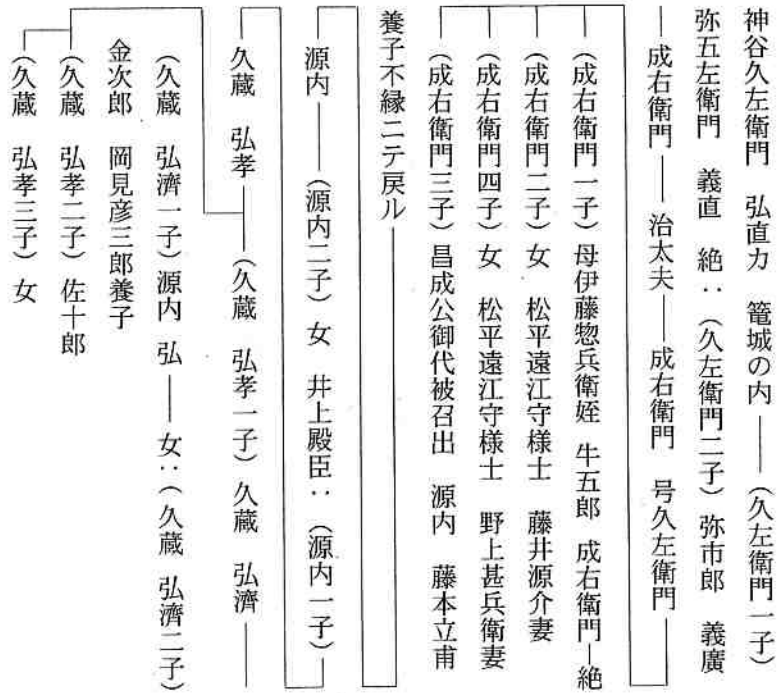
文政九（一八二六）年は昌高とヨーロッパ人との直接交流の最も活発な年だった。特に四月には数日置きに昌高が長崎屋に現れ、商館長一行と一緒に夕食を取った。息子たちや夫人たちを連れて

行き、家族ぐるみの交流ということもあれば、蘭学者とともに訪れる場合もあった。音楽、歌、書籍、道具、薬、標本、家具類、西洋の礼儀作法などオランダ人との異文化交流の内容は充実したものであった。また、その高齡にもかかわらず、知的好奇心旺盛な実父重豪の姿も実に立派である。自然標本を贈ったり、日本の最も危険な病気の治療法に関する資料を求めるなど、シーボルトの本草学・医学の弟子になりたいという意欲で息子昌高を凌ぐような場面さえあった。

五、仲介役を務めた藩士神谷弘孝（源内）について

昌高と西洋人との交流は、神谷弘孝を抜きにしては十分に描写できない。源内の生涯に関する資料はとても乏しく、生年月日さえ明らかではない。先行研究によれば彼は豊前の人で、名は弘孝^{ひろたか}、通称源内、号を二洲と称する中津藩士だった⁵⁷。再調査を試みたときに、「奥平藩御家中系図」（享保七年）に神谷成右衛門の家系を見つけられたが、一七二三年に書かれたこの家系図と昌高公時代の神谷家との関係は確認できなかった⁵⁸。その後、中津市歴史民俗資料館の保科眞氏より神谷弘孝の家系図を示す写本をご教示いただいた（図三）。

図三 神谷家系図⁹⁵



この略譜は主な家系を示しているが、平成一八年初頭に中津村上医家史料館を訪れた神谷正夫氏にご提供いただいたさらなる二種の系図により、上記の史料の確認と補充が可能になった。史料の一つは宝暦三年一月一日に「神谷源内」がまとめた「神谷氏略譜」で、上記の「奥平藩御家中系図」に見られる神谷成右衛門

の系図と基本的に一致しており、両系図は互いに補い合い様々な詳細な記述を含有している。もう一つの史料は享和二(一八〇二)年に始まり天保一五(一八四四)年に終わる幕末期や明治初期頃の抜粋である。ところどころに見られる抹消、訂正及び附箋は、急いで作成されたことを示しているが、中津藩に仕える神谷源内弘孝に関する数多くの事項を伝えている(図四)。

図四 神谷家の系図に見られる神谷弘好に関する記述(西暦への換算は筆者による)⁹⁶

神谷栄次郎	久蔵	源内	鳴右衛門
	弘孝		
母右同			
養母	阿部豊後守様家来、	神屋弥八姉	
昌高公御代			
〔一八〇二〕	享和二壬戌年十月七日、	大手御勤番中、	表御小姓
	御雇被仰付、	六人扶持被仰付下	南主榮一
〔一八〇二〕	同三癸亥年月日、	表御小姓御雇、	首尾能被成御座
候			
	同年十月二十八日、	剣術出精二付、	御上下拝領
	被仰付候		
〔一八〇四〕	文化元甲子年八月七日、	表御小姓御雇被仰付、	六
	人扶持被仰付下候		

同日、仮御近習被仰付下候

〔二八〇七〕同丁卯年五月廿八日、御近習被召出、御宛行初

拾五石六人扶持被下候

〔二八〇八〕同戊辰年十二月二十五日、兼て貞実之趣、其上

武芸出精二付、御上下頂戴被仰付候

〔二八〇九〕同己巳十二月十九日、御手道具預仮御役、被仰

付候

〔二八一三〕同十四年六月二十五日、御小納戸御役、御手道

具預兼帶、被仰付候

〔二八一四〕同十一甲戌年九月朔日、来亥四月、於日光山東照

宮、二百五拾回御忌御法事、萬願御執行之節、

日光長坂口御勤番、被蒙仰二付、御供被仰付候

同年十二月五日、家督無相違被仰付候

同年月日不相分、劍術出精二付、御上下頂戴被

仰付候

〔二八一六〕同十三丙子年閏八月三日、御徒頭御役、御小納戸・

御手道具兼帶、被仰付候

〔二八一七〕同十四丁丑年八月九日、御側御取次御役、御徒士

頭・御小納戸・御手道具兼帶被仰付候

同年九月十五日、御徒頭首尾能被成御座候

〔二八一八〕文政元戊寅年五月十八日 昌高公、小屋江御内々

被為入候

同年十二月十八日

昌高公、松平宮内大輔

上野小幡主⁹⁷ 御同道三而、小屋江御内々御被為入候

〔二八一九〕同二己卯年正月十一日、御帰城御供立帰被仰付、

御道中御小納戸相勤申様、被仰付候

同年五月日 昌高公、成瀬隼人正様⁹⁸ 御同

道三而、小屋江御内々被為入候

同年十二月、来度御着府御迎被仰付候、御道中

御小納戸相勤候様、被仰付候

〔二八二二〕同四辛巳年四月朔日、御役分之御用向、格別出精

相勤候二付、銀五枚頂戴被仰付候

同年八月、奉願候通、次男鎌吉義、公儀小普請

渡辺阿波守様御組、馬場佐十郎養子、被仰付候

〔二八二三〕同五壬午年八月十八日 若殿様昌暢公御三男、勇

吉様昌猷公小屋江御内々被為入候

同年十月二日、昌高公、上之御子様方御同伴二

而小屋江御内々被為入候

同月三日 昌高公、毛利甲斐守様長門府中城主⁹⁹、

本多伊予守様伊勢守様¹⁰⁰、柳沢伊勢守様越後黒川主¹⁰¹、

御同道二而御内々被為入候

〔二八二三〕同六癸未年正月十一日、当度御帰城御供□□被仰

付、御道中御小納戸相勤候様、被仰付候

同年五月十三日、御物頭席被仰付候、勤方は迄

之通

四月二十六日

昌高公、松平佐渡守様出雲広

瀬主¹⁰²、松平主税様¹⁰³、御同道三而御内々被為入候

同月二十七日 昌高公、嶋津左近様¹⁰⁴ 御

同道三而、小屋江御内々被為入候

同年八月四日 昌高公、松平栄翁様昌高公

御実父嶋津左近様、松平主税様、小屋江御内々被為入候

〔一八二四〕文政七年十二月十五日、御用人御役御側御取次、

兼帶被仰付候

〔一八二五〕文政八四年三月廿八日、娘死去三付、為御悔御使

被成候、若殿様々、御伝言之御意被成下候

〔一八二五〕文政八四年五月六日 奥附御役兼帶被仰付候

同年十月四日 三郎様、御養子御用懸被

仰付候

昌暢公御代

〔一八二八〕文政十三年十一月廿八日、於御前御用人御役、

被仰付候

〔一八二八〕文政十一年五月十一日、奥附御役中□三郎様、

御養子御用懸出精二相勤三付、金貳百疋被下候

〔一八二九〕文政十二年六月十七日 御前様栄姫様御事

御産之節、御墓目之御役¹⁰⁵、被仰付候

同年十二月朔日、来度御帰城御用懸、被仰付候

〔一八三〇〕天保元寅年十二月廿五日、御普請御用懸出精二

相勤候三付、御小袖袴頂戴、被仰付候

〔一八三一〕天保二卯年正月十一日、当度御帰城御用懸、被

仰付候

同年十一月十一日、娘婚姻三付、御怡之使被成候、

御隠居様々、御伝言之御意被下成候

昌猷公御代

〔一八三三〕天保四巳年二月十五日、当度御初入部御用懸、被

仰付候

同年同月廿八日 昌猷公、御家督被為

濟被為御祝義、御手自御継上下、御小袖頂戴被

仰付候

同年四月卅日、御初入部御用懸、御差繰を以被

成御座候

天保四巳年五月八日 機姫様御婚姻御用懸、

被仰付候

同年同月同日 御家督御用多之處、出

精相勤候三付、銀七枚頂戴被仰付候

同年六月五日、悴源内婚姻相整候三付、為御悴御

使被成下、御隠居様々、御伝言之御意被下成候

同年十二月四日、養母死去三付、為御悔御使被成

下、御隠居様々、御伝言之御意被下成候

〔一八三四〕天保五年午六月十二日、御用人御役、願之通被成

御免候、奥向無案内御内證、御機嫌伺被仰付候

〔一八三五〕天保六未年二月廿八日、御用人御役中、鈴姫様

御婚礼御用懸、出精相勤三付、御小袖袴・銀三枚

頂戴、被下成候

同年五月廿八日、御奏者番席を以、御休憩奥附

御役、御賄頭兼帶、被仰付候

同年十二月朔日、来申年御休憩、御年男被仰付候、右^二付御鬘斗目巻領、御長袴巻具頂戴、被仰付候

〔一八三七〕 天保八酉年十二月朔日、来亥年御休憩、御歳男被仰付候

〔一八三八〕 天保九戌年正月十五日 昌猷公、御重年^二付御休憩、御歳男被仰付候

右同断^二付金式百疋頂戴、被仰付候

同年八月三日、御奏者番席を以、御物頭御役・奥附御賄頭兼帯被仰付候

〔一八三九〕 天保十亥年七月廿一日、御物頭御役、奥附御賄頭兼帯御役病氣^三願之通、首尾好被成御免候

〔一八四一〕 天保十二丑年九月廿一日、病氣^二願之通、隠居被仰付、倅源内正家督無相違、被仰付候

妻 岡見弥兵衛古廉妹

弘化三丙午年七月廿九日卒、五十七歳

法名、蘭室妙秀信女、東海寺登塔中

清光院ニ葬ル

弘孝の「職歴」は享和二（一八〇二）年に始まっている。当時十数才のはずだった彼は、まず小性として藩に仕え、若者らしく武芸、とりわけ剣術に励んでいた。その後、小納戸、手道具預、徒頭、側取次、徒士頭などを務めながら家来として順調に出世し

ていった。しかし蘭学との関わりはまったく示されていない。彼が大いに貢献した『蘭語譯撰』の出版年には何の記述もなく、オランダ人との数々の接触にも言及していない。それに対し昌高公と一連の大名同士との交流を示す記述は興味深い。文政元年から文政六年にかけて見られる「内々に入らせられた小屋」とはどのようなところだったのだろうか。

出島商館長ドゥーフに蘭名を与えられてから源内は欧文資料にピーテル・ファン・デル・ストルプ (Pieter van der Stulp) として現れる。西洋人の残した様々な記述に、彼は「皇帝の医師」、「皇帝の天文官」たちと同様、役職のほかに名前も記されており、ときには贈り物も受け取っていることから、ヨーロッパ人に大変重要視されたことは間違いない。

〔一八一八年四月二十六日 薩摩の「老」領主に一〇枚の小さい絵を、同じくファン・デル・ストルプ氏にも一枚贈った。¹⁰⁶〕

『萬目録』にはプロムホフ宛の土産 (present) のために桂川甫賢が書いたオランダ語文が残っている。署名の三名は桂川甫賢、神谷源内及び菓子商人の伊勢屋七左衛門兵助である¹⁰⁷。同じ史料に一連の活字印刷の「蘭語名刺」も含まれており、ここにも源内の名が見られる。

PIETER VAN DER STOLP

Dienaar van

Landschap Nakatsu

in 't BOEZEN.

(ピーテル・ファン・デル・ストルプ、豊前の中津地方の家臣)

源内の自筆と思われるものもある。

Japansch naam

Kamija Gennay

Dienaar van

Okudayra Dayzenodaybu

(日本名神谷源内、奥平大膳大夫の家臣)

108

前者の活字は一八一〇年に刊行された『蘭語訳撰』の字体と一致している。

『蘭語訳撰』の前書きに、藩の重臣である神谷弘孝 (Kamija Filojosi) は、阿蘭陀通詞馬場佐十郎が習い覚えた単語をすべて書き留めたとある。上記の神谷正夫氏の系図 (図四) によれば、源内の次男鎌吉義は文政四 (一八二二) 年に馬場佐十郎の養子となった。二人の関係は大変親密だったに違いない。その他の江戸の蘭学者らとの関係を示す別の記述はすでに上記に紹介してある。それらを総合すると、源内は桂川甫賢、大槻玄沢、宇田川玄真、高橋景保、馬場佐十郎、鷹見泉石、犬山藩士辻村仁兵衛、伊勢屋七左衛門らと交流があった。

すでに述べたように、文政七 (一八二四) 年に、デ・スチュレルは出島で源内の子 Kioeroo に Klaas Kroon と命名したようである¹⁰⁰。上記の家系図 (図四) によればこの神谷鎌次郎久蔵は文化七 (一八一〇) 年一月二日に生まれ、文政六 (一八二三) 年から藩に仕えるようになった。

嘉永三 (一八五〇) 年に松代藩の佐久間象山は深川藩邸で砲学の教授を始め、翌年頻繁に藩地と江戸を往復、江戸木挽町に塾を開いて砲術を教授し、各藩からの依頼で大砲の製造や演習を行った。「及門録」を調べると、嘉永三年の門下人の半分以上は「奥平大膳大夫御家来」で、その中に神谷源内も含まれていた¹⁰¹。これは文化七年生まれの長男鎌次郎 (久蔵) である。神谷正夫氏の系図に関連の記述が残っている。

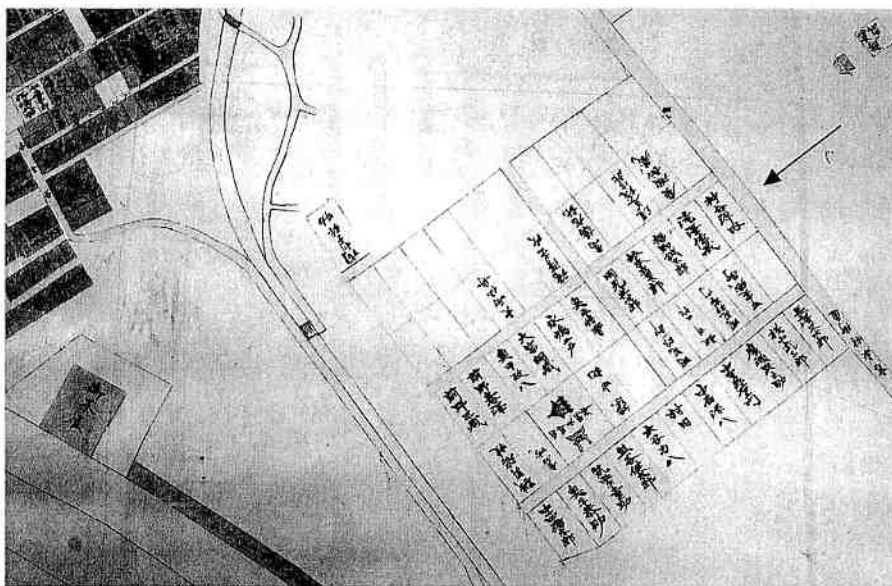
「嘉永三」年八月廿三日、松代御藩佐久間修理江、砲術稽古入門、被仰付候」

翌年、彼の稽古振りは高く評価されている。

「同年二月廿五日、砲術稽古出精之旨、達御歴御満足、思召候二付、金三百疋頂戴、被仰付候」

嘉永五年には、象山に依頼した大砲二門が中津に到着した¹⁰²。異国船の脅威に対しては中津藩もその責任を十分に果たし、洋才を学び、和魂を捨てずに国を守るという姿勢だった。

幕末になると中津藩が江戸の家臣を中津へ戻し、高畑、下の新地及び金谷の森の屋敷を与える。神谷源内という名は高畑屋敷の図に確認できる(図五)。



図五 明治期中津図に見られる神谷源内の住居地(中津市築一人氏蔵)。

久藏は『扇城遺聞』掲載の江戸定府の引つ越しに関する文久三(一八六二)年十一月一五日の史料にも登場する。

里姫様御下り之節江戸表より御引越之御方左之方々町宿被仰付候

神谷久藏様 上下五人

篠原甚平様 同上

西原盛庵様 同上

長島岩右衛門様 上下六人

山崎渚様 同上

越川仙藏様 同上

右給人衆之分は御一人前中間一人宛之見込にて手當を置候様御沙汰に相成候間中間分相増置候¹¹²

辛島詢士が所蔵していた「嘉永六年中津藩医御役日記」に神谷源内の名が見られたと本人が報告している¹¹³。また、生田重倫は「神谷源内」という見出しの下に家系について述べ、その中で「神谷潤亭は名は不学一思庵と号し医を以て業とす蘭学に通し」と新たな情報を述べている¹¹⁴。ただし、この潤亭が源内と同一人物であるかは不明である。しかし、医療活動などに光を当てる記述は見当たらず、上記の欧文資料に、父弘孝は常に昌高の「dienaar」、「lijfhebber」、「secretaris」、「Dolmetscher」(召使、執事、家臣、秘書、通訳)としてしか登場していない。このような活動は一連の系図史料でも裏付けられている。

シーボルトによれば、彼は多少太り気味の体格で、その笑い声は大きかった¹⁵⁾。

源内と親しく付き合つた馬場左十郎は『蘭語訳撰』の序言で源内の編纂上の貢献について述べている。

De waereld is van ouds af in vier deelen verdeelt, namelijk: Europa, Azia, Afrika en Amerika, vervuld ieder deel met inwoonders, maar elk zijn van onderscheidentelijk natuur, aart, spraak enz. als men de natuur en de aart van de Europeesen met die der Azianers vergelijkt zoo zoude men kunnen zeggen, de Europeesen zijn als steen, en de Azianers als hout, want de steen is zwaar, zinkt en blijft stil, het hout is ligt, en drijft, dus de Europeesen door haare stil en bedarend natuur kunnen veel wonderlijke konsten ontdekken, maar de Azianers kunnen het zelden; om deze reden heeft de vorst van Nakats reeds ondernoomen om de hollands taal te leeren, om met het leezen van Europeese boeken de nuttige en verstandige konsten te vinden, en daarmede zijne veelvuldige onderdaanen tot verstandig en bekwaam te maken.

de ondergetekende van voorleeden jaar op Keijzers order aan 't hof in Jedo zijnde, op zekeren tijd door gemeld vorst verzogt zijn, om op een gemakkelijke wijze de hollands taal te leeren, daartoe een middel uit te vinden. hoe wel ik door veel keijzers zaken geen tijd heb, ben ik eger over de leenzugtigheid van den

vorst zeer vergenoegt, en heb alle de woorden die ik van buiten geleerd, door zijn edele dienaar Kamia Filiojosi laaten afschrijven en daarna heeft den vorst zelfs verzameld, het welk [= het welk] dit deel behelst zoo als men het hier zal ontwaaren.

geschreeven door zijn hoogheids altoos berijdt willige dienaar
Baba Sadayosi

keijzeijlijk translateur van hollands taal te nangasakij
te Jedo A^o 1810 of 't nengo Boenkwa 6^{de} Jaar.

「この世界はずっと昔からヨーロッパ、アジア、アフリカ、アメリカという四つの部分に分けられている。どの部分にも人が住んでいるが、異なる性質、気質や言語などを持っている。ヨーロッパ人の性質と気質をアジア人のそれと比較すると、ヨーロッパ人は石のようで、アジア人は木に例えられる。石は重くて水に沈んで静かにしている。木は軽くて浮くものである。このためヨーロッパ人は静かで落ち着いた性質のお陰で、大変不思議な技術を発見することができるが、アジア人はこのようなことがめつたにできない。このことから中津候は、ヨーロッパの書物を通して有用で聡明な技術を見出し、それをもって自らの様々な領民に分別を持たせ有能にするために、すでにオランダ語の勉強を始めたのである。

署名者は昨年以來皇帝の命により江戸の宮廷にいるが、ある時、上記の候にオランダ語を容易に学べるような手段を見つけるよう依頼された。私は皇帝の用で時間がな

いが、候の向学心を大変嬉しく思い、自分が習い覚えた単語をすべて、候の重臣である神谷弘孝に書き取らせた。その後、ここで認めるべきことだが、候はご自身でそれを集編し、この分を含むものにした。

一八一〇年すなわち文化六年¹¹⁶ 江戸にて常に進んで奉仕する候の僕、長崎における皇帝のオランダ語通詞

馬場貞由 謹書

天保(十二一八四一)年、弘孝は病気のため隠居し、文政六年から藩に仕える長男鎌次郎(久蔵)は家督となった。

源内は相当なオランダ語力の持ち主として『蘭語訳撰』の編纂に貢献したのみならず、江戸の蘭学者やオランダ人と交流しながら藩主昌高と歴代の商館長との接触の場を準備し、その円滑な運びに気を配る、極めて優秀な中津藩士だった。

六、シーボルト事件以降の昌高公の動き

一八二八年の秋にシーボルトが国外へ持ち出そうとした荷物の中に、幕府天文方の高橋景保から入手した日本略図や蝦夷地図、葵の紋服などがあることが発覚し、いわゆるシーボルト事件が起こった¹¹⁷。その後の不信感と疑念に満ちた雰囲気の中でオランダ人との交流は当分の間難しかったであろう。また、シーボルトと密接に交流していた神谷源内も容疑者の一人と見なされたこと

は容易に想像できる。出島商館日記には昌高関連の記述は二度と現れない。ペリーが浦賀に来航した嘉永六(一八五三)年には、昌高は貿易の許可を提唱したといわれているが、それを裏付ける史料はいまだ示されていない¹¹⁸。昌高は安政二(一八五五)年、七四歳で没し、「龍徳院殿無方道應大居士」の法名で品川の清光院に葬られた¹¹⁹。

おわりに

上記の断片的な記述から、奥平昌高は単に舶来品に魅了された人物ではなかったことがわかる。オランダ人との贈り物の交換に関する記述はあるが、それらの量や内容は彼の身分としてはごく普通と言つてよく、注目を集めるほどではない。彼は鉄砲州中屋敷に「模擬洋館」を建て、ガラス障子越しに江戸湾の風光を賞でいたと指摘されているが¹²⁰、豪華な品や珍品を追求するような姿勢は現存の資料からはうかがえない。

父島津重豪のように自然標本の作製と収集に力を注ぐこともなかったようだ。二人ともたびたび一緒にオランダ人と接触し、互いの考えもよく知っていたが、父の「血を受け継いだ」としても博物学の充実を目指す標本収集家としての昌高の姿は確認できない。一連の出島商館長や医師たちと交流する中で、様々な道具、器械、書籍、医薬品などを目にする機会もあったが、昌高がこのようなものを藩の財政改善に活かそうとする様子は資料からは読み取れない。昌高の蘭学は殖産政策とは無縁だった。

領内において殿様の蘭学が及ぼした影響は限定的なものと思われる。それによる新しい物産品や産業の隆盛などはなかった。大江春塘、村上玄水、辛島正庵、神谷源内、その他数名の昌高とは同世代の藩士たちは蘭学関係のすばらしい功績をあげたが、地元での蘭学がそれらの秀才たちを超えさらに広まった形跡は今のところ確認できない。昌高の蘭学が成熟し実ったのはどちらかと言えば江戸においてだった。

昌高の知的好奇心と知識欲は群を抜いていた。身分の差も気にせず頻繁に日本橋本石町のオランダ宿を訪れることにより、それなりの収穫があったはずである。オランダ人の持ち物、食品、服装、音楽、歌、学問、礼儀作法などに関する情報を積極的に吸収し自分の従来の枠を出て異文化へ接近しようとする姿はドゥーフ、プロムホフ、デ・スチュルレル、シーボルトらにも深い印象を与えた。

そうはいっても昌高とオランダ人との接触を過大視すべきではない。彼の江戸滞在時期と商館長一行の参府が重なった年はさほど多くはなかった。ヨーロッパに関する多くの情報はオランダ人よりも、むしろ一流の蘭学者と交流のあった神谷源内らから得ていたのであろう。殿様の蘭学は、優秀で人脈も豊富な側近を抜きには考えられない。昌高らの場合においても、蘭学はオランダ人によってもたらされたというより、むしろ日本人の知識欲と好奇心の賜物であり、日本人の意欲と積極性により発展していったものである。

昌高はオランダ語の文献がある程度解読できたと思われるが、

オランダ人との直接交流の中で異文化理解の難しさや異文化交流における言葉の重要性を身をもって体験したに違いない。中津辞書として蘭学史に名を残した『蘭語訳撰』及び『バスタールド辞書』はこの体験が支えた見識の産物と言える。また、この二つの辞書は彼の視野の広さと、藩という枠を超えた国全体に対する使命感と責任感を物語っている。そのような意味合いで、奥平昌高は蘭学の発達及び日本の近代化に大いに貢献した歴史的人物である。

1 武内博編著『日本洋学人名事典』、柏書房、東京、一九九四年。このような学術的な事典の奥平昌高（九七頁）の項にも、その説明に「蘭癖」という呼称が用いられている。

2 鹿野政直、鶴見俊輔、中山茂編『民間学事典』、三省堂、東京、一九九七年、一四九―一五〇頁。

3 黒沢翁満『刻異人恐怖伝』（『異人恐怖伝』第三巻）、嘉永三年（一八五〇）、一二丁。

4 父親の島津重豪は蘭学に強い関心を寄せ、長崎のオランダ商館を訪れたり、歴代の商館長、ティチング、ドゥーフ、プロムホフと文通したことで知られている。藩校造士館、演武館及び天文館を開き、医師の養成にも力を注ぎ、数ヶ所に薬草園を設けた。詳細につき、芳即正著『島津重豪』新装版、東京、吉川弘文館、一九八八年参照。

5 Philipp Franz von Siebold: Nippon. Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen Neben- und Schutzländern Jesso mit den südlichen Kurilen, Sachalin, Korea und den Ljuikiu-Inseln. (Herausgegeben von seinen Söhnen). 2. Aufl. Würzburg/Leipzig: Leo Woerl, 1897, Bd. I, p. 183.

- 6 ドウーフは寛政一一(一七九九)年に書記として来日したが、一旦バタビアに帰ったのち、再び出島で勤務し、享和三(一八〇三)年商館長に就任した。この時期はオランダがバタビア共和国(一七九五―一八一五)として事実上フランスの属国となり、イギリスと敵対関係にあった。
- 7 Doeff, Hendrik: *Herinneringen uit Japan. Haarlem: De erven François Bohn, 1833. pp. 147-148.* ヘンドリック・ドウーフ著、永積洋子訳『日本回想録』雄松堂、東京、二〇〇三年、一一三頁。訳文は筆者が適宜手を入れたものである。
- 8 Nationaal Archief (NA), *Nederlandse Factorij Japan (NFJ) 206, dageregister, 1.5.1806, 10.5.1806.*
- 9 ドウーフの旅行期間は一八〇六年三月四日―一八〇六年六月二八日。
- 10 ドウーフの旅行期間は一八一四年二月二八日―一八一四年六月六日。
- 11 馬場貞由(一七八七―一八二二)。通称は佐十郎、名は貞由、号は穀里。オランダ語、フランス語、英語、ロシア語を学んだ語学の天才。一八〇八年幕府天文方に召し出され、シヨメルの百科事典の翻訳に寄与した。一八二〇年に脱稿した『通火秘訣』は日本初の牛痘法の書である。
- 12 須原茂兵衛(江戸)、岡田三郎右衛門(大坂)、中川勘助(大坂)、勝村治右衛門(京都)など。
- 13 本郷正豊『鍼灸重寶記』寛延二年刊。新井白蛾『古易察病傳』寛政一〇年序。遠山澹、竹内鵬、嶺田雋、橋須楚編輯『玉池吟社詩』天保辛丑年刊。張景婉『紅蘭小集』天保辛丑年刊。梁緯『星巖集』天保辛丑年刊。
- 14 François Hahn: *Woordenboek der Nederluische en Fransche taalen. Tweede Druk. Amsterdam: De Wetsens & Smith, 1729.*
- 15 詳細につき、松田清著『洋学の書誌的研究』臨川書店、京都、一九九八年、四六八―四七〇頁参照。
- 16 Er hatte sich hauptsächlich aus dem Grunde, um die Holländer, deren Freund er seit 30 Jahren ist, einmal persönlich näher kennen zu lernen, in den Ruhestand versetzen lassen. Siebold: *Nippon, I, p. 183.*
- 17 黒屋直房『中津藩史』、碧雲荘、東京、一九四〇年、三五一頁。
- 18 斎藤阿具『ゾーフと日本』、廣文館、東京、一九三二年、二二四―二二六頁。斎藤によれば、この書簡はオランダのドウーフ家が所蔵している。
- 19 訳文は筆者が適宜手を入れたものである。
- 20 NA, NFJ 231, *Dageregister 12.4.1818.*
- 21 日蘭学会編『長崎オランダ商館日記』七、雄松堂、東京、一九九六年、七九―八〇頁。訳文は筆者が適宜手を入れたものである。
- 22 商館長フロムホフも商館員フィッセルも「Kastagawa」とつづっているが、甫賢の名刺には「Kastagawa Hoken」となっている。今泉源吉『蘭学の家 桂川の人々』続巻、一二五頁参照。
- 23 NA, NFJ 231, *Dageregister, 17.4.1818.*
- 24 小通詞今村金兵衛。
- 25 日蘭学会編『長崎オランダ商館日記』七、八四頁。
- 26 NA, NFJ 231, *Dageregister, 26.4.1818.*
- 27 日蘭学会編『長崎オランダ商館日記』七、一〇四頁。
- 28 NA, NFJ 231, *Dageregister 27.4.1818.*
- 29 鷹見十郎左衛門。名は忠常、号は泉石。
- 30 土井大炊頭利位、下総国古河。
- 31 蘭学会編『長崎オランダ商館日記』七、一〇四―一〇五頁。訳文は筆者が適宜手を入れたものである。
- 32 板沢武雄『日蘭文化交渉史の研究』、吉川弘文館、東京、一九八六年第四刷、七六頁。同書の別の記述を見ると、その人物はオランダ殖民省の通訳官ヨーハン・ヨーセフ・ホフマン(Johann Joseph Hoffmann, 1805-1878)と判明するが、同胞シーボルトと親交していたホフマンの著書の大半は『日本文法』『日本文典』などの語学関係のものである。
- 33 下関市伊藤家所蔵。下関市立長府博物館編『東アジアのなかの下関―近世下関の対外交渉―』、下関市立長府博物館、一九九六年、五八頁参照。
- 34 下関市伊藤家所蔵。下関市立長府博物館編『東アジアのなかの下関―近世下関の対外交渉―』五八頁及びSiebold: *Nippon, I, pp. 127-128*参照。
- 35 この文を気に入ったシーボルトはドイツ語訳を作った。Wie traf mein Herz die schöne reine Sprache / Als ich, mein Freund, Dein Land zum zweitenmal / Betrat. In Vers gefasst, von Deiner Hand geschrieben, / Zeigt sie, wie Du, mein Fürst, in Hollands Sprach' erfahren / Wie Dir Vergnügen bring, wie man bei mir zu Lande / Gewöhnlich trägt und thut; sie zeigt Geschmack und

- ein Gefühl so schön! / Dass seines gleichen kaum wo anders mag bestehn. /
Fahr, bit'ich, hierin fort, mit allen sonst'gen Freunden! / Dies hofft, dies
wünscht stets das holländ' sche Oberhaupt /.
- 34 ジーボルト著、斎藤信訳『江戸参府紀行』、平凡社、東京、一九六七年、
一一一頁。訳文は筆者が適宜手を入れたものである。
- 35 NA, NFI 235, Dagregister 26.3.1822.
日蘭学会編『長崎オランダ商館日記』九、雄松堂、東京、一九九八年、
三二七頁。訳文は筆者が適宜手を入れたものである。
- 37 NA, NFI 235, Dagregister 9.4.1822.
第七代犬山城主成瀬正寿。
- 38 日蘭学会編『長崎オランダ商館日記』一〇、雄松堂、東京、一九九九年、
一五〇一六頁。
- 40 形容詞の *vollig* は楽しげな、の意。
名詞の *blom* は花を意味する。
- 41 実際は昌暢は次男で長男は富之進であるが、富之進は文化六（一八〇
九）年に早世しており、オランダ人はその事実を知らず次男昌暢を長
男と認識したのであろう。
- 43 この人物は特定できなかった。
- 44 NA, NFI 235, Dagregister 14.4.1822.
日蘭学会編『長崎オランダ商館日記』一〇、二〇一〇二二頁。訳文は筆
者が適宜手を入れたものである。
- 45 Overmeer Fischer, J.F. van: Bijdrage tot de Kennis van het Japanse Rijk.
Amsterdam: J. Müller, 1833, p. 306.
- 46 Overmeer Fischer, Bijdrage tot de Kennis van het Japanse Rijk, p. 308.
- 47 Overmeer Fischer, Bijdrage tot de Kennis van het Japanse Rijk, p. 317.
- 48 NA, NFI 235, Dagregister 22.4.1822.
日蘭学会編『長崎オランダ商館日記』一〇、二六〇二七頁。訳文は筆
者が適宜手を入れたものである。
- 50 日蘭学会編『長崎オランダ商館日記』一〇、二七頁。
- 51 Overmeer Fischer, Bijdrage tot de Kennis van het Japanse Rijk, p. 317.
オランダ国立公文書館 (Nationaal Archief, 's-Gravenhage) 所蔵 Blomhoff
- Collection (VOC, Koloniaal Aanwinsten, Versh 1907 XXXVI, 55).
Lodewijk Meijer: Woordenschat. Amsterdam: Hendrik Boom, 1688. (初版は
Amsterdam, 1669)
- 54 板沢武雄『日蘭文化交渉史の研究』、七七頁。その蘭名に關して、板沢
は「ホフマン博士の著書に蒐集せられたもの」としか説明していない。
56 「御家中系図 嘉永三年改」(複写、中津市立小幡記念図書館蔵、請求記
号五八〇・一八・四四) による。
- 57 今永正樹「医亦從自然也 村上医家事歴志」、村上記念病院、村上医家
史料館、中津、一九八二年、一〇九頁。
- 58 本誌の吉田洋一論文図七参照。
- 59 伊藤家の原文を見ると、省略や書き直しを恐れないシーボルトの大胆
さを見過(せ)なくなる。昌高の詩の最初の二行の主語を王子 (Prins)
に昇格した昌高に変更した上で、そのみを紹介しながら、作品の短
さと適切さを讃えている。Siebold: Nippon, I, p. 128.
- 60 「Prinz von Nakatsu」(Siebold: Nippon, I, p. 127), 「Landesherr von
Nakatsu」(Siebold: Nippon, I, p. 127), 「hoher Gönner der Holländer」
(Siebold: Nippon, I, p. 179).
- 61 Siebold: Nippon, I, p. 180.
ジーボルト著、斎藤信訳『江戸参府紀行』、一八四頁。訳文は筆者が適
宜手を入れたものである。
- 62 NA, NFI 239, Dagregister 9.4.1826.
Siebold: Nippon, I, pp. 180-181.
- 63 Siebold: Nippon, I, pp. 180-181.
Siebold: Nippon, I, pp. 180-181. シーボルト著、斎藤信訳『江戸参府紀行』、
一八五〇一八六頁。訳文は筆者が適宜手を入れたものである。
- 65 NA, NFI 239, Dagregister 10.4.1826.
Siebold: Nippon, I, pp. 182-183.
- 66 ビーテル・ファン・デル・ストルプと神谷源内は同一人物である。
この人物について、呉秀三も斎藤信も吉雄忠次郎であるとしている。
- 67 呉秀三「シーボルト江戸参府紀行」、四五七頁。ジーボルト著、斎藤信
訳『江戸参府紀行』、一八九頁。
- 70 解明不可能な名称である。

- 71 ジーボルト著、斎藤信訳『江戸参府紀行』、一八九〇頁。訳文は筆者が適宜手を入れたものである。
- 72 NA, NFI 239, Dagregister 11.4.1826, Siebold: Nippon, I, p. 184.
- 73 ジーボルト著、斎藤信訳『江戸参府紀行』、一九一頁。訳文は筆者が適宜手を入れたものである。
- 74 NA, NFI 239, Dagregister 12.4.1826, Siebold: Nippon, I, pp. 185-186.
- 75 ジーボルト著、斎藤信訳『江戸参府紀行』一九三、一九四頁。訳文は筆者が適宜手を入れたものである。
- 76 NA, NFI 239, Dagregister 15.4.1826, Siebold: Nippon, I, p. 188.
- 77 薩摩藩第二五代藩主・島津重豪の二女茂姫（後の廣大院）は一代将軍家齊の正室となった。
- 78 NA, NFI 239, Dagregister 19.4.1826, Siebold: Nippon, I, p. 188.
- 79 NA, NFI 239, Dagregister 23.4.1826, Siebold: Nippon, I, p. 206.
- 80 ジーボルト著、斎藤信訳『江戸参府紀行』、二一八頁。訳文は筆者が適宜手を入れたものである。
- 81 NA, NFI 239, Dagregister 8.5.1826, Siebold: Nippon, I, p. 207.
- 82 NA, NFI 239, Dagregister 10.5.1826, Siebold: Nippon, I, p. 207.
- 83 ティナング (Isaac Titsingh, 一七四五―一八一二) は二回出島商館長を勤めた（一七八〇年一月二四日―一七八一年一月三日及び一七八一年一月二四日―一七八三年一月二六日）。
- 84 ジーボルト著、斎藤信訳『江戸参府紀行』、一九六七年。訳文は筆者が適宜手を入れたものである。
- 85 NA, NFI 239, Dagregister 18.5.1826.

- 93 日蘭学会編『洋学史事典』雄松堂出版、東京、一九八四年、一八四―一八五頁。辛島詢士「中津辞書の穿鑿」『ビブリア』（天理図書館報）第四四号、一九七九年、一九―二五頁。
- 94 「奥平藩御家中系図」（中津市立小幡記念図書館蔵、請求記号二一九・五、〇五四）
- 95 「（仮称）三州作手城籠城同国長篠 中津六十四藩士系図」（中津市立小幡記念図書館蔵、請求記号一・一八）。史料名は同館所蔵「荒尾明道家所蔵史料目録」を参照。
- 96 資料の提供及び解説につき、本徳昭光氏及び保科眞氏に心よりお礼を申し上げます。
- 97 上野小幡の三代藩主松平宮内少輔忠恵（一七八四―一八六二）。成瀬隼人正。尾張犬山藩の第七代当主成瀬正壽（一七八二―一八三八）。隼人正は官位。天文観測で著名な鉄砲鍛冶国友一貫斎（一七七八―一八四〇）は文政三年頃、江戸の成瀬宅で見たオランダ製の反射望遠鏡を手本に同型の望遠鏡を製作した。
- 98 長門府中藩第十一代藩主毛利甲斐守元義（一七八五―一八四二）。伊勢神戸藩第五代藩主本多忠升（一七九一―一八五九）。越後黒川藩第六代藩主柳沢伊勢守光被（一七八四―一八三六）。出雲広瀬藩第八代藩主松平直寛（一七八三―一八五〇）。文政九年老中となった松平康任の実弟の分家旗本寄合席・松平主税と思われる。
- 100 薩摩藩の第八代藩主島津重豪。
- 101 貴人の出産や病気の時に、妖魔を退散させ邪気を払うためにひきめを射る役の人。
- 102 日蘭学会編『長崎オランダ商館日記』七、一〇四頁。
- 103 『萬目録』、四八頁。今泉源吉「蘭学の家 桂川の人々」続巻、篠崎書林、東京、一九六八年、一二二―一二三頁参照。
- 104 『萬目録』の蘭文名刺より。今泉源吉「蘭学の家 桂川の人々」続巻、一二六頁参照。
- 105 板沢武雄「日蘭文化交渉史の研究」、吉川弘文館、東京、一九八六年第四刷、七七頁。

- 110 信濃教育会編『象山全集』巻五、信濃毎日新聞、南県町、一九三五年、七六二～七六七頁。
- 111 信濃教育会編『象山全集』巻五、七六二～七六七頁。
- 112 赤松文二郎『扇城遺聞 全』、中津市立小幡記念図書館、一九三二年、二二一～二二二頁。
- 113 辛島詢士「中津辞書の穿鑿」、二四頁。
- 114 生田重倫編集『奥平藩臣略譜集録』謄写版、「出版地不明」上巻、一九七三年、一三五～一三六頁。生田は奥平藩臣について綿密に記しているが、その情報源については示していない。
- 115 Siebold: Nippon, I. p. 183.
- 116 文化六年は一八〇九年にあたるので、馬場佐十郎は西暦を間違えたことになる。
- 117 『藩史大事典』第七巻（九州編）、雄山閣、東京、一九八八年、三五五頁。
- 118 黒屋直房『中津藩史』、碧雲荘、東京、一九四〇年、三五六～三五七頁。
- 119 黒屋直房『中津藩史』、三五二頁。
- 120 現在中央区明石町。「解体新書」の訳業も、また福沢塾の開校もここで行われた。大分県教育会編纂『大分県人物志』、歴史図書館、東京、一九七六年（一九二八年刊本の復刻版）、七四頁。

青木周蔵の中津滞在期と富永家所蔵史料を中心に

大島 明秀

はじめに

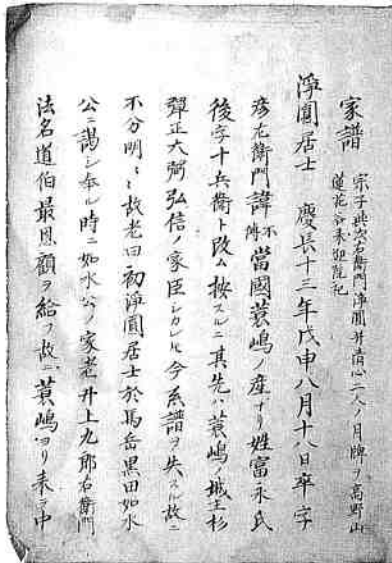
明治三二（一八八九）年、明治三二（一八九八）年の二度にわたって外相を務めるなど、日本の近代化に貢献した青木周蔵に関する研究は、『青木周蔵自伝』¹を校注した坂根義久の一連の研究²と、伝記小説という手法で青木周蔵を描いた水沢周³によって、その大半がなされてきたといっても過言ではないだろう⁴。

これらの先行研究が重視しているのは、主に外交官あるいは外務大臣を務めた時期で、つまり青木周蔵の政治家としての側面であり、その点については綿密に論考が重ねられてきているが、一方で青木周蔵の少年期にその学問的素養をはぐくんだ中津滞在期については、史料的な問題のためか『青木周蔵自伝』に記された以上は現在まで明らかにされてこなかった。

本稿の目的は、中津市で銃砲火薬店を営んでいる富永亮一氏が調査許可下さった富永家宛て青木周蔵書簡三通⁵、ならびに富永家の「記録」（図一、図二）⁶、加えて富永家の親戚筋にあたる古門富太誌「中津酢屋富永家のこと」⁷、同「富永家のこと」⁸といった新出史料を用いて、これまで不詳であった青木周蔵の中津滞在期をより鮮明にすることである。



図一 富永家の代々の家譜や出来事を代々記した写本「記録」の表紙（中津市富永亮一氏蔵）。



図二 「記録」、一丁表（富永亮一氏蔵）。

一、青木周蔵の経歴

弘化元（一八四四）年一月一日、長門国厚狭郡小埴生村の医師、三浦玄仲と妻友子の間に長男が生まれた。幼名は団七、後の青木周蔵である。団七は一一歳の頃に玄明と改め、一四歳で宇部村の村学校「晩生堂」に入学、その三年後の万延元（一八六〇）年、密かに漁船に乗じて中津へと向かった。

一九歳で故郷山口に戻った三浦玄明は、二〇歳の春より藩校明倫館好生堂に通い、翌年青木家の養子となって青木周蔵と改名することになった。慶応三（一八六七）年に長州藩より長崎留学を命ぜられ、翌年には医学就業のためにプロシア、現在のドイツに留学した。帰国後、木戸孝允（一八三三～一八七七）の推薦によって外務一等書記官心得となり、オーストリア、オランダ等の公使を経て、明治二二（一八八九）年に第一次山県有朋（一八三八～一九二二）内閣で外相を務め、再度ドイツ公使、ベルギー公使兼任などを経て、イギリスとの条約改正交渉を行い、一八九八（明治三二）年には再び外相となる。また、二度目の外相を辞任してから駐アメリカ公使として活躍するなど、大正三（一九一四）年に七〇歳で亡くなるまで、世界を股に掛けて日本の発展に尽力した¹⁰。

また、私生活では明治一〇（一八七七）年にドイツ貴族の娘、エリザベート・フォン・ラーデ（*Elisabeth von Lade*、一八四八～一九三二）と結婚した。これによって青木はヨーロッパの貴族社会の大きな信頼を得、活躍の場を広げた。しかしながら、これよ

り先に青木周蔵は慶応元（一八六五）年に青木研蔵の養子となつて研蔵の娘テルと婚姻関係にあったが、明治七（一八七四）年に離婚話がもちあがり、それとともに青木家の養子問題を引き起こすことになった。その際、同郷萩出身の木戸孝允の助言もあり、青木は青木家の養子のままテルと離縁する形を採った。エリザベートとの間にはハナ（一八七九～一九五三）という娘が産まれ、ハナはドイツの伯爵と結婚した¹¹。

このように外相あるいは外交官として活躍した青木周蔵の、若き日にその素養をはぐくんだ中津滞在期は一体どのようなものであったのだろうか。

一、「青木周蔵自伝」に見る中津滞在期

青木周蔵¹²の中津滞在期を伝えるものとして自伝がある。前述した坂根義久校注『青木周蔵自伝』は全二七回からなるが、青木の中津在藩時の様子を伝えるのは、「第一回 長州在藩時代」である。この中で青木が学問を志し、それが中津へ向かう契機となったことについて触れている。

予の実父は、所謂蘭方医にして、翻訳書に依り少しく泰西文明の學術を解せしが故に、解剖学、生理学及び物理学等に就て、時々、予に教示する所あり。予の年、満十六歳に達せし時は、漢学の知識、四書の素読を為し得るまでに進みしと共に、一方に於て、此等泰西學術の一端に触るるに至りたるを

以て、将来修学の方針に就ては、恰も五里霧中の感なきにあらざりしも、幸に身体比較的強健なりしが為め、僻地に踟蹰して、医を学ぶが如きは何となく物足らぬ感ありたり。且、勿論、確たる方向を定め得たるには非れども、何とかして国家に益する学問、即ち、政治に関係ある学問を修め、漸次政治に参与すべき位置を得んとする感念、模糊として腦中に生ぜり。然るに、之に必要な学問は、程度低き宇部の学校にては修むること能はず。左りとて、藩学に入ること能はざる身分なれば、如何にして此の目的を達すべきか、左思右考の末、遂に笈を他国に負ひ、階級制度に関係少なき地を撰び、修学せんと決心し、齡十七歳に至り、豊前中津に赴けり¹³

自伝によれば、青木の父は蘭方医でヨーロッパの学問の素養があり、その関係で解剖学、生理学および物理学について教示されるところがあつた。一六歳まで青木は四書の素読ができるようになるまで漢学の知識を身に付け、その一方では父の影響からヨーロッパの学問にも触れる機会があつた。しかしこの時まだ進路については定まっていなかった。その後医学ではものたりず「国家に益する学問、即ち、政治に関係ある学問」を修めようと思ひ至つたが、郷里宇部の村学「晩生堂」は学問の程度が低く、また、青木は藩校に入学できる身分でもなかった。そこで一七歳の時「階級制度に関係少なき地を撰び、修学せんと決心し」て中津に向かつたという。

予の此の行、豊後日田に至り、広瀬淡窓の塾に入らんとする志なきにあらざりしも、未だ此の方向を確立したるに非ず。唯、中津は予の郷里の対岸に在るが故に、兎も角も此の地に渡航せしが、予は中津に至り、巨大なる一城郭を見るに及び、忽ち日田行の不可なるを悟るに至れり。中津は堤封十万、奥平大膳大夫の城下なれば、生来未だ曾て城郭を見たることなき予は、竊に謂へらく、広瀬淡窓は処士にして、日田の地たる亦、城下に非ず。此の如き地に僻在し、此の如き人に就て学ぶは、医となり、或は僧となる者の為めには適當なるべきも、隱者的の学問を修むるは我将来の目的に非ず。之に反し中津に於ては、奥平家の藩校も設置あるべく、又、他所の学者もあるべし。若し藩校に入ることを得べくんば、此に止まりて奥平家の藩士と交はらば、便宜多からんと信じたり¹⁴

青木周蔵が当初目指していたのは中津ではなく「豊後日田の広瀬淡窓の塾」であつた。中津は郷里宇部の対岸にあつたから渡つたのであつた。しかし、一旦中津の地に足を踏み入れた途端、そのあまりの城郭の大きさに圧倒された。青木は、日田が城下町でないこと、中津は奥平氏の城下町で藩校（進脩館）もあり、中津のみならず他所からやつて来る学者も多いであろうことから、「若し藩校に入ることを得べくんば、此に止まりて奥平家の藩士と交はらば、便宜多からん」と考え、当初の日田行をやめ、中津に滞在することを決めたという。

水沢周はこの青木の言に異を唱えている。中津へ行くことを決

意した四年も前に広瀬淡窓が亡くなり「咸宜園」の主宰が旭窓に代わったことを根拠として、日田の地がそれほど強く青木を吸引したとは考えにくく、むしろ幼年時代から抱いていた、海の彼方の国への漠然とした憧れこそが正直な気持ちではないかと指摘している¹⁵。

左れば、今日より追想すれば、実に抱腹に堪へざる事なれども、先づ城下の入り口にある番所に至り、突如番卒に向ひて、先づ自己の氏名を告げたる後、「自分は此の地に於て、修学せんが爲めに來たる者なり。敢て問ふ、城下著名の学者は何人なるや。」と質したるに、番卒曰く、「何人か学者なるや、我等之を知らず。又、学塾は二、三を数ふるも、何れが果して優れるや、是亦、予等の解せざる所なり。」と。予は此等、番卒の長は必ず一個の藩士なるべく、之に面会せば要領を得るならんと思惟し、乃ち番卒を通じて面会を求めたるに、暫くありて、福永某（或は福田某）出でて面接せり。仍て、予は前言を反覆して質問したるに、「朱子学派にしては某、徂徠学派にしては手島仁太郎あり。」と答へたり。依て、直に手島氏を訪ひ、「予は医家に生れたれども、單に医学を修むるを以て満足する能はず。将来、他の學術を修めんと欲する者なり。貴塾に於て教ゆるものは、抑々如何なる學問なりや。」と、盲者蛇を恐れず的に質問したるに、手島氏は懇に徂徠学派の大綱を示し、「最も力を四書五經に致す。」と、言へり。予は其の最も力を四書五經に用ゆるは、正鵠を得たる修学の

方法なりと信じ、且、手島先生の懇諭に悦服し、直に束脩を納めて入門せり。是れ實に万延元年三月なり¹⁶。

中津に降り立つた青木周藏が初めてとつた行動は実に突飛なものだった。城下の入り口にある番所で自分の名前を告げ、突然「自分は此の地に於て、修学せんが爲に來りたる者なり。敢て問ふ、城下著名の学者は何人なるや」と問いかけたのである。結果として徂徠学派の手島仁太郎（物齋）¹⁷のことを認識した。青木は直に手島を訪ね徂徠学とは何かと質問したところ、手島は「最も力を四書五經に致す」と回答した。青木は当時「最も力を四書五經に用ゆるは、正鵠を得たる修学の方法」と信じていた上に、手島の「懇諭に悦服」したことから、手島に直に束脩を納め、その私塾「誠求堂」¹⁸に入門した。實に万延元（一八六〇）年三月のことであつた。

「誠求堂」に入塾してから文久元（一八六二）年の六、七月頃まで、青木はここで勉学に勤しむ日々を送るとともに、手島仁太郎の弟で福沢諭吉の親戚にあたる橋本忠次郎と運命の出会いを果たすことになる。關係箇所の記事は以下のとおりである。長くなるが全文を掲げる。

再後、予は文久元年六、七月頃まで、手島塾に在りて刻苦勉強せしに由り、意外にも早く已に高弟の班に列せんとするの際、不幸にして手島氏は突如長逝せり。同氏は藩学の教授たると同時に、私塾を開きて四、五十人の塾生を寄宿せしめ、

別に多数の通学生を教育せしを以て、当時、俄に塾を閉づること能ざるを以て、其の実弟橋本忠次郎氏、該塾を継承することなりしが、其後、經書の講究を漸次疎となり、盛に歴史を講ずるに至れり、蓋し橋本氏の意、「学問は活学問ならざる可らず。従て經書講究の如き、勿論必要なるも、其は大概の程度に止め、古今内外の治乱興亡の蹟を知るべき歴史の講究に力を注がざるべからず。」と云ふに在り。又、先師手島氏は經學者なりしも、能く詩を講じ、自身、亦、雅懷を詩賦に寄すること深く、重に唐、宋の詩を講じ、初学の解し易き近世人の詩の如きは棄てて顧みざりしに反し、橋本氏は、主として初學者の解し易き詩賦を講じ、又、盛に作文を奨励する等、先師の意向とは全く正反對なりし。此時、予は尚ほ十八歳の弱年にして、充分両者教授の長短を判別するに能はず、半信半疑の間にありしも、橋本氏の所説は意氣活潑に富めるを以て、予は遂に之に帰依するに至れり。又、同年の事なりと思ふ。江戸より中津に着したる某氏の書翰中、前年、江戸に起りし一大疑獄の詳況を報じ、且、当年志士の一人として処刑せられたる頼三樹三郎の、「排雲欲手掃妖氛、失脚墮來江戸城、云々。」と、詠ぜし、彼の有名なる七律一首をも添附し來りたるが、橋本氏は、一日特に予を招きて之を示し、「此の詩の作者たる頼三樹三郎は、実に學識に富める有爲の士なり。此の如き名士を殺戮したるは、真に徳川氏滅亡の前兆なり。」と云へり。此の一事、痛く予を感動せしめ、世勢如何に成り行くべきやと、天下國家の將來に關し始めて幾多

の疑惑を抱かしむるに至れり。同年或は其の翌年のことなりき。橋本氏は偶然、予に語りて曰く、「予の親戚に福沢諭吉なる者あり。今回、幕府より北米合衆國に派遣せらるる使節に隨ひ、同國に赴くこととなりたるを以て、告別の爲め、現に中津に在住する其の母に一書を贈り、添ふるに金百兩及び自己の写真を以てしたり。」と云ふ。予は未だ曾て写真なるものを見たることあらざれば、「今より福沢の宅を訪ひ、彼の書翰と共に請ふて一見せんと欲す。足下同行せずや。」と。予は、喜んで隨行を請ひ、相伴ふて福沢氏の宅に至りたるに、福沢氏の母は諭吉氏の書翰を橋本氏に示し、写真は予にも一見せしめたり。是れ、予も亦た、写真を見たる嚙矢なりとす。席上、橋本氏と福沢老母との談話を仄聞するに、福沢氏は曩に亡命して江戸に至り、頃日拔擢登用せられ、「重大なる使命を帯びて米國に赴く使節に隨行を命ぜられたれば、任務を全ふして帰朝せんことを期す。」と報じ來れるものの如く、之を聞ける予は、胸中自ら一種の感慨なき能はず。其の後、知人に就て福沢氏從來の経歴を質問せるに、彼は中津藩老、奥平老岐氏に隨從して、長崎に派遣されたる留学生なりしが、事故に依り帰國の途中、脱走して大阪に至り、緒方洪庵の門に入りて蘭學を修め、終に塾頭となり、後、更に江戸に遊學して英書を修めたることを知り得たり。此の時、予は、福沢氏こそ我が學ぶべき人なり。福沢氏の爲せし修學の方針に倣ひて努力せば、必ず目的を達すべしと信じたり。而して、中津城下には蘭方医にして蘭學に通ずる者あるべきを以て、我

が目的を達せんとせば、先づ交を医家に結ぶこと必要ならんと思惟したるが、此の事、固より橋本氏に秘して行ふべきにあらざるを以て、予は一日、氏に対し、「歴史の研究は依然怠らざるべきも、而かも蘭学修行の事、亦、自分の素志にして、今より福沢氏の方針に倣ひ、蘭学を修めんとする希望なるに由て、知名の医家に紹介せられんことを乞ふ。」と懇願せしに、氏は典医其の他の大家と相交はること深からざりしが故に自ら紹介の勞を取らざりしも、藩中、蘭学に通ずる者の氏名を告げたるを以て、予は一々、之を歴訪せり。其の人々は大江久、神尾雄策、藤本玄岱諸氏にして、就中、大江氏は漢学の素養に富み、併せて多少蘭書を学び、文典の如き略ぼ之を解し得るを以て、予に之を教授すべく、又、所要の書籍をも貸与すべしとのことなりしを以て、予は直に大江氏に就て蘭学の講習を始めたるも、氏の蘭学の知識たる頗る浅薄なりしを以て、予の学業も亦、進むこと能はざりき。以上三人の外、尚ほ蘭方医ありて、自宅或は藩校に於て蘭書の翻訳書たる『氣海観瀾』『医範提綱』等に依り、蘭国の學術、特に主として物理学及び医学の階梯を講習せしに由り、予も亦、講習生の伍伴に入り泰西學術に關し少しく知識を増進したると同時に、漢学を以てしては到底将来の活世界に処する能はざるを悟り、今後は一意専心、蘭学を研究すべき決心を為すに至れり¹⁹。

「誠求堂」は寄宿塾生四、五十人を数える規模の私塾であつた。

青木は手島の下で勉学に励んだ。文久元年（一八六一）に手島塾の高弟の班の中のひとりとなり、上等二級会頭、塾長代理になつた。しかし、その年に残念ながら手島仁太郎が急逝し、実弟の橋本忠次郎が塾を継いだ。

橋本忠次郎は青木に或る出会いをもたらした。橋本は福沢諭吉の親戚であり、或る日福沢から母親に届いた書簡に同封されていた写真というものを見せてもらひに行くので、青木も同行しないかと誘つた。そこで橋本と福沢老母との談話から福沢諭吉の活躍を聞いた青木は興奮し、「福沢氏こそ我が学すべき人なり。福沢氏の為せし修学の方針に倣ひて努力せば、必ず目的を達すべし」との確信を得た。そこで橋本忠次郎に「歴史の研究は依然怠らざるべきも、而かも蘭学修行の事、亦、自分の素志にして、今より福沢氏の方針に倣ひ、蘭学を修めんとする希望なる由て、知名の医家に紹介せられんことを乞ふ。」と蘭学者の紹介を頼み、紹介を受けた大江久、神尾雄策、藤本玄岱等を訪問した。中でも或る蘭方医は自宅や藩校で『氣海観瀾』²⁰・『医範提綱』²¹等を用い、「蘭国の學術、特に主として物理学及び医学の階梯を講習」していた。青木はこの蘭方医の講習生の一人となり、世界で活躍していくためには漢学ではなく蘭学が必要であることを悟り、以後蘭学のみ

に打ちこんだ。

斯る状況の中に、予の齡十九歳の末となりしが、世は尊攘の議論益々熾盛となり、殊に長藩に於ては幕府の因循なる態度に反し、関門通過の外国船舶を砲撃する準備を為す等、漸次

人心を聳動する形勢となり。之が為め、長人は深く幕府及び其の譜代各藩の忌む所となり、従て中津藩に於ても、長人たる予と、同藩士との交際は親密を欠く情況あるに至りたれば、予は終に中津を辞して郷里に帰れり²²

青木周蔵は中津で一九歳を迎えた。この頃尊王攘夷運動の気運が高まり、特に長州では幕府の外国に対する態度に反発し、独自に外国船を砲撃する準備をしていた。そのため長州は、幕府や譜代各藩の忌諱に触れるところとなり、青木もまた中津藩士との交際が薄れる事態となり、その後郷里に帰った。結局青木が中津に滞在した期間は、万延元（一八六〇）年三月から文久三（一八六三）年のおよそ四年間であった²³。

三、青木周蔵と中津藩の学者

自伝には青木周蔵が中津滞任時に接触した学者が六人登場する。儒学者手島仁太郎、福沢諭吉の親戚である橋本忠次郎、漢学者（蘭学者）大江久、神尾雄策、藤本玄岱、そして名前は記されていないが蘭方医で「自宅或は藩校に於て蘭書の翻訳書たる『気海観瀾』『医範提綱』等に依り、蘭国の學術、特に主として物理学及び医学の階梯」を教授し、青木が進んで講習生となった人物である。彼等について少しく述べる。

（ア）手島仁太郎

手島仁太郎は別名を柯、号を物斎という。物斎については「御家中系図 嘉永三年改」²⁴中にその経歴が見え、『豊前人物志』でその記述が用いられ物斎が紹介されている。以下、両史料に基づいて手島の経歴を概観する。

物斎は文政五（一八二二）年十一月に「幼年之處學問出」²⁵という理由で、「御褒美銀貳両」を拝領した。ここから物斎が若年から才能を発揮していたことが窺える。同一〇年一〇月七日「學館句投」²⁶を、同一二年五月一日「學館塾生」²⁷を勤めるよう仰せを受けた。

天保五（一八三四）年二月七日に「心懸宣」²⁸きことから無給ではあるが召し出され、「勤方御用所御取次」²⁹を命ぜられ、同六年七月二八日には「御用所仮御役學館取切」³⁰、八月には「表御用書」³¹を、さらに同七年五月二四日には「御仕法替二付御用人衆御用書學館御用書兼」³²で勤めるよう申し付けられた。この年二月二八日「御扶持方貳人扶持内壹人扶持名目」³³を仰せ付けられた。

天保八（一八三七）年五月一八日「學館御用書取切」³⁴を命じられた。そして同年二月二五日「無給二付當暮計金貳百匹」³⁵を拝領した。同一三年四月四日「格式御供小姓學館引立」を仰せ付けられ、「學館御用書取切」³⁶を罷免された。しかし、弘化四（一八四七）年二月一五日「家督無相違勤方」³⁷を、これまでの通り勤めるよう命を受けた。同年同月十八日「御儒者見習書物料暮々銀二枚」³⁸を拝領した。

弘化四年九月一七日「御詩會御相手并不時講御聽被遊候節罷

出³⁹」るよう仰せ付けられた事項を最後に、「御家中系図 嘉永三年改」中に物斎の記述はなくなる。物斎はこれより少し後に隠居し、私塾「誠求堂」に専念したであろうことが推察されるが、最後の記述が示す弘化四年九月一七日より文久二（一八六二）年八月に五一歳で没するまでの約十四年間については全くの不明である⁴⁰。

（イ）橋本忠次郎

橋本忠次郎は別名を晶、号を鹽巖といい、前に挙げた青木周蔵の自伝から手島仁太郎の弟で同時に福沢諭吉の親戚であったことが分かり、「御家中系図 嘉永三年改」によつて橋本濱右衛門久健の養子になったことも確認できる⁴¹。橋本忠次郎については『下毛郡誌 全』⁴²にまとまった言及がある。

橋本鹽巖は手島物斎の弟なり、鹽巖は其の號後以て通稱とす、出で、橋本氏を嗣義ぎ其の姓を冒す早く兄物斎と共に山川東林に従ひ學び、又熊府に遊ぶ、既にして業就り中津に歸り、進脩館の教授に任ぜらる、廢藩後鹽巖自ら誠求堂を再興す、從遊の門人甚だ多し、明治五年一月片端中學校成る、鹽巖乃ち白石常人大久保麗山の二儒と共に入つて教授となる、同八年十一月更に養成校の教授となり、又市學校の授業をも兼務せり、其の間塾生をも教養すること終始一日の如し、同十五年五月十五日病んで家に歿す、享年六十七、鹽巖長身赭顏頗る威容あり、性最も謹嚴剛直なり、常に詩賦文章を以て末枝となし、専ら窮經譜史を尚び、實用を以て主となす、故に塾

規には詩會を毎月初四、十四、二十四の三日に、文會を初九、十九、二十九の三日に限りたり、鹽巖漢書を耽讀し竟に數卷を抄寫し、大に人を驚かしたる事ありと云ふ、其の著書には鹽巖書牘鹽巖雜文及鹽巖後集あり⁴³。

（ウ）大江久

自伝に登場する漢学の素養があり蘭学も習っている大江久という人物について、坂根は「中津バスタード」⁴⁴の編者である大江春塘（一七八七―一八四四）だと指摘している⁴⁵。確かに大江春塘の名は久であるが、青木の大江久と接触した時期は、少なくとも万延元（一八六〇）年から文久三（一八六三）年の間であり、大江春塘の没年（一八四四）と合致せず事実上ありえない。

ここでは二つの可能性が考えられる。まず一つは青木周蔵の偽作あるいは記憶違いで、もう一つは春塘ではない大江久がいた可能性である。青木の中津滞在期に健在であり、漢学と蘭学を修めていた大江姓の著名な学者としては、中津藩医大江玄明（一七九九―一八七七）、同じく同じく中津藩医を勤め後に中津医学校長ともなった大江雲澤（一八二二―一八九九）などが考えられるが、玄明、雲澤ともに名は久ではない。現時点で青木という大江久が実在の人物かどうか、あるいは実在していたならば誰なのかを特定することはできない。

（エ）神尾雄策

神尾雄策については、『下毛郡誌 全』、『中津歴史』⁴⁶ および

『扇城遺聞 郡誌後材全』⁴⁷に僅かに触れている記述がある。

神尾藤本等諸醫は皆京都の小石玄瑞門下より出たれども、歸藩するに及んでは盡く春塘玄水二人の指導を受けた⁴⁸。

村上氏「『玄水』ハ「」大ニ蘭方ノ秘訣ヲ極メ而シテ後寛政ノ初年藩聽ニ乞テ重罪ノ屍ヲ得自門下數拾人ヲ率ヒテ刑場長濱ニ到リ之ヲ解剖シテ畫工ニ其狀ヲ畫カシメ因テ之ニ臟腑脉絡ノ説ヲ次シテ一書トシ名ケテ解剖圖説ト云万里帆足翁ノ序文アリ蓋當時人身解剖ヲナセルモノ九州是ヲ以テ始トスベシ當初兵學ヲ窮ムルノ故ヲ以テ實ニ當市烟火術ノ開祖ナリト云爾來藤本箭山神尾雄策久松法菴等相踵テ蘭方ヲ採用シ遂ニ維新ノ後ニ及ビテハ多クハ洋方ノオミトナリシガ是ニ至リ醫學病院ノ開クルヤ當市ノ醫事上ニ一新時期ヲ興シ來レル者也⁴⁹。

藤本箭山は「」文久元年二月村上玄秀、原岡平泉、西千枝、神尾雄策等と相議して醫學館を上勢溜に開き⁵⁰。

この記述から分かるのは、神尾雄策が京都の医師小石玄瑞（一七八四～一八四九）門下で学び、中津に帰藩して村上玄水⁵¹（一七八一～一八四三）や大江春塘に師事した医者で、中津医学館創設に尽力した一人であったことである。

その他の史料にも神尾の名が見える。川寫真人の指摘によれば、

松山均氏所藏の『惣町大帳』という記録に、嘉永二（一八四九）年三月に藩医辛島正庵（一七七九～一八五七）を筆頭に、西周哲、横井玄伯、神尾雄朔、藤野啓庵（東海）、藤本玄泰、小幡竜洲、松川清庵、原岡平泉、久松方庵等の十名の中津藩の医師が長崎に痘苗を入手しに行ったことや、さらに同年二月には、神尾雄朔と藤野啓庵が藩主奥平昌服に種痘を請願し、それによって藩のおふれで種痘が無料で実施されたことが確認できる⁵²。ここから神尾雄策は中津における種痘の導入に尽力した一人であったことが明らかになった。

（オ）藤本玄岱

藤本玄岱は箭山ともいい、神尾雄策について引いた記述にも登場した。今一度述べると、藤本玄岱は嘉永二年三月に長崎に痘苗を入手しに行った十名の医師のうちの一人であり、同年二月の神尾雄朔と藤野啓庵による請願書の中で、久松方庵とともに実際自分の子に痘苗を試した町医者であった⁵³。また、先に引用した『扇城遺聞 郡誌後材全』にも藤本玄岱についての記述が見える。

神尾藤本等諸醫は皆京都の小石玄瑞門下より出たれども、歸藩するに及んでは盡く春塘玄水二人の指導を受けた⁵⁴。

藤本箭山は玄岱と稱す、少壯の頃帆足萬里の門に學ぶ、文才英發、人之を呼んで冬嶺の孤松と爲す。後大阪に遊び醫を緒方洪庵に學ぶ、數年業成て中津に歸るや、醫方努めて洋式に

從へり、文久元年二月村上玄秀、原岡平泉、西千枝、神尾雄策等と相議して醫學館を上勢溜に開き舊來漢方の醫藥を改良せんと欲し、先づ一著手として一般に牛痘の功驗を知らしめ、又解剖を行ふ等の事あり、蓋し藩聽の許可を受けざりし廉にて遺責を蒙り、閉門を命ぜらるると云ふ箭山又詩書に巧みに、其の書の如きは往々頼山陽の筆致に酷似せるものあり、箭山の二子壽吉夙に帝國大學に學び、工科大學第一回の卒業生たり、壽吉最も好古學に精通し、帝室離宮を始め、大廈の造營其の手に成れるもの多し、然れども不幸にして早世す、箭山は明治十一年歿す、享年六十三なり⁵⁵

藤本玄岱は少壯の頃帆足万里に學び、その後上京して小石玄瑞門下を出て帰郷し、玄水・春塘に學び、神尾雄策らとともに中津における種痘の導入に奔走し、さらにその後中津医学館創設に貢獻した人物であつた。その他漢方薬の改良、牛痘の効目の宣伝、解剖の遂行なども行った。明治一一（一八七八）年に享年六三歳で死去した。

（カ）蘭方医（無名）

この蘭方医の名はなぜか自伝には記されていないが、前に挙げたように「自宅或は藩校に於て蘭書の翻訳書たる『氣海觀瀾』『医範提綱』等に依り、蘭国の學術、特に主として物理学及び医学の階梯」を教授し、青木が進んで講習生となつた人物である。自伝から三つの情報が分かる。まず一つはこの人物がいわゆる

蘭方医であつたこと。次に藩校で教授していたこと。最後に物理学的文献である『氣海觀瀾』および解剖学的文献である『医範提綱』等の文献を理解し講釈するなど、基本的な西洋物理学および医学に通じていたことである。

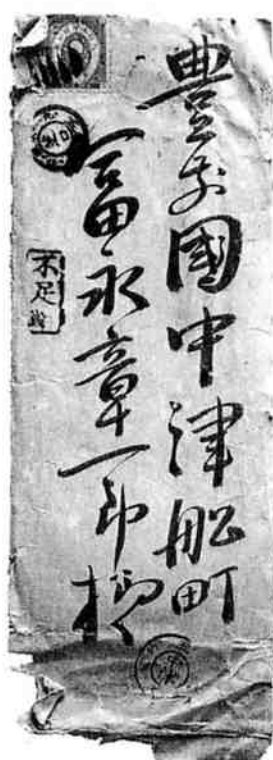
これらの可能性を満たす人物としては、中津藩医であつた村上家や大江家の人物が考えられ、時代的には村上家八代目春海や大江家五代目雲澤が可能性として挙げられよう。村上医家史料館には「氣海觀瀾」⁵⁶・「医範提綱」⁵⁷ともに現存し、その他七代目玄水自筆の天文・物理・医学関係の写本や帆足万里史料も豊富に存在していることから、八代目の春海が医学のみならず西洋物理学を学修していたことは想像に固くない⁵⁸。一方、大江家には「医範提綱」⁵⁹およびその他の医学史料が認められるものの、「氣海觀瀾」などの天文・物理学関係の史料は確認できない。すなわち青木が学んだ蘭方医は村上春海である可能性が高い。しかしながら、村上春海と断定する史料は現在のところ不在であり、現時点ではあくまで推測の域を出ない。

四、富永家所蔵史料に見る青木周蔵の中津滞在期

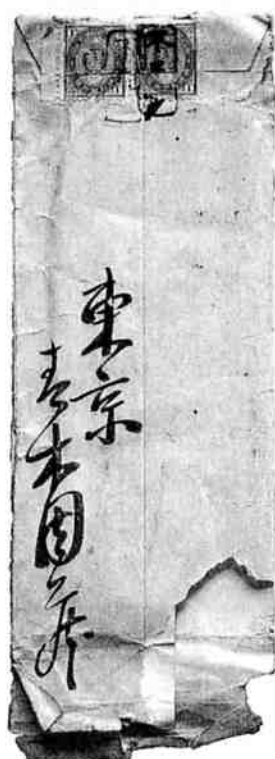
『青木周蔵自伝』には「誠求堂」を出てから中津の蘭学者を歴訪し、長州に帰るまでの間、青木が中津のどこに拠点を置きどのような行動をしていたのかについては触れられていない。

中津市在住の富永亮一氏は、富永家に宛てた青木周蔵書簡三通を所蔵している（図三・図九）。この史料の出現により、氏の祖

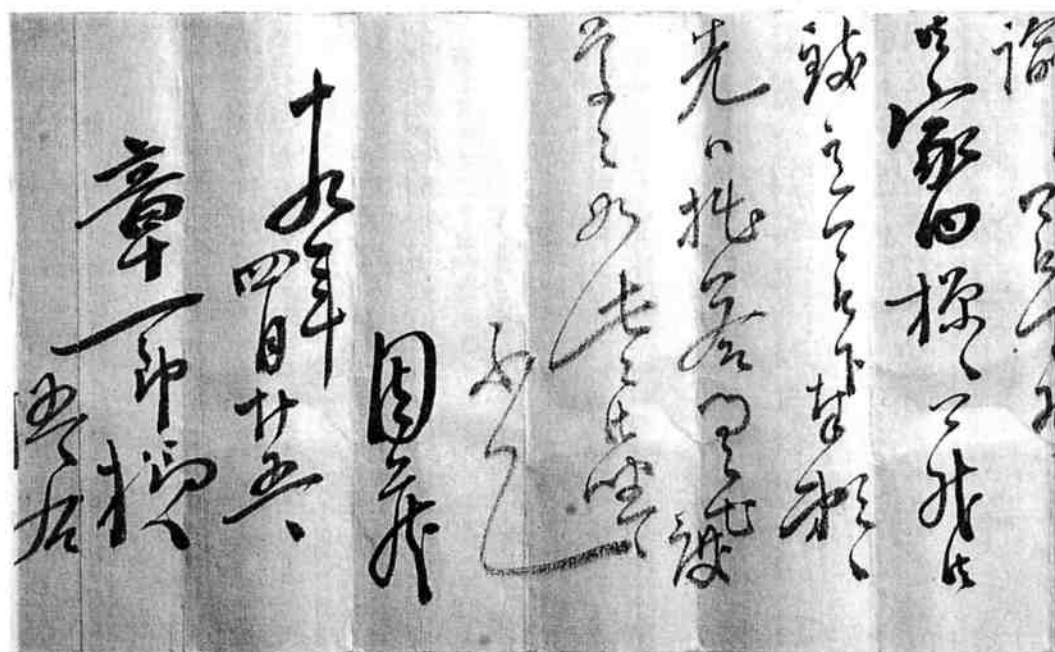
先と青木が関係を持っていたことが判明した。富永亮一氏は現在銃砲火薬店を営んでいるが、江戸時代に薬、火薬などを扱った豪商富永家の第十八代目でもある。



図三 明治十九年四月二十五日付、富永章一郎宛て
青木周蔵書簡封筒裏（富永亮一氏蔵）。



図四 同書簡封筒裏（富永亮一氏蔵）。



図五 同書簡（富永亮一氏蔵）。

一通目の書簡は、明治一九（一八八六）年四月二五日に青木から富永家第十四代目章一郎（別名酢屋彦三郎）に宛てられたものである。当時、青木周蔵はドイツ公使を経て外務次官の役職についていた時期である。内容は同年四月一三日に富永章一郎から青木に送られてきた手紙の返事であり、内容は、富永章一郎の息子である睦郎の上京を、不都合から遠慮願いたいというものである。（以下、三通の書簡は読みやすいように筆者が改行、読点をほどこし、日時の古いものから順に並べ番号を付す。）

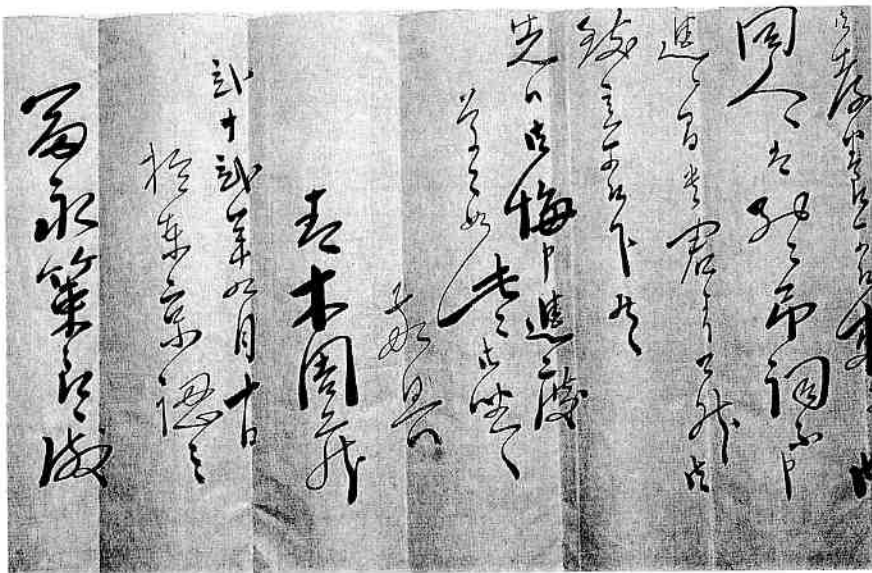
① 明治一九年四月二五日 富永章一郎宛て

本月十三日の貴書、兩三日前接手無恙御帰郷相成候との賀々、尤船中より少々眼痛ニ而、御困却被成候由災止此事ニ御座候、誠ニ先達而御上京之節ハ、為何風情も無之都合たり志ニ付、百里外ニ尋問セシ甲斐も無之と、嘸々御後悔被成候、半氣之毒に奉存候、横須賀へ御出之節ハ、伊藤・坪井兩氏共不存ニ而、何故御不如意之事而已有之候由、萬々氣之毒ニ奉存候、併ン鎌倉地方へ御遊覧之際ニハ、萬端御都合克敷珍貨宝器等御一見相成候由賀候、令息睦郎子身上之義ハ萬々相含居候得共、目今之情勢ニ而ハ強而東京江呼寄候義、却而不都合ニ可有之候間、差当り縣地ニ而骨折候様御説論可被下候、御家内様へ可然御敬意可被下奉頼候、先ハ拙答差出度草々如此御座候

十九年四月二十五日 章一郎様 梧右

不一
周蔵

封筒に金銭不足の印が捺されているのは愛嬌である。
二通目は、明治二二（一八八九）年九月一〇日に青木から富永家第十五代目策郎に宛てた書簡で、青木が十一月に外相代理、十二月に外務大臣になる直前のものである。策郎の父章一郎が亡くなったことへのお悔やみの手紙である。



図六 明治二十二年九月十日付、富永策郎宛て
青木周蔵書簡（富永亮一氏蔵）。

②明治三二年九月一〇日 富永策郎宛て

尚々老父母より可然御悔可申進旨、呉々も申付候間、可然御
含可被下候、本月五日之哀訃昨日到来、御親父様御義久敷肺
部之疾ニ御罹り居被成候処、御保養不相叶終ニ黄泉へ御旅行
被成候との御事、誠ニ驚愕いたし申候、最初御病氣ニ而有之
候事も夢ニ承知不致候ニ付、御見舞状も不差進萬々遺憾ニ存
申候、母上様其他皆々様共賑々御愁傷之義と遠方より洞察罷
在申候、此上ハ母上之御身ニ御病氣不相起候様、何卒々々
御孝養可相成候、御同人へは初二弔詞不申進候間、貴君より
可然御致意可被下候、先ハ御悔申進度草々如此御座候

敬具

青木周蔵

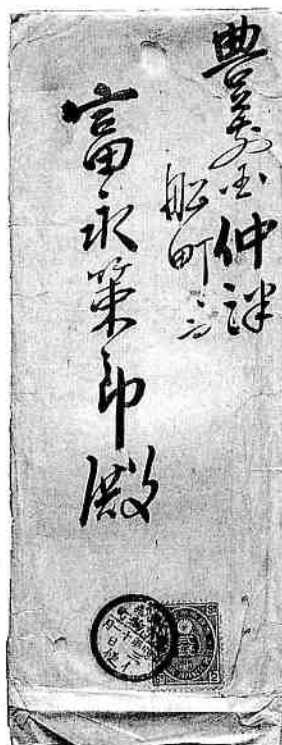
式十式年九月十日

於東京認之

富永策郎殿

三通目は富永策郎に宛てた明治二四（一八九一）年一月二日
付の書簡である。五月に外相を辞任した年に送られたもので、内
容は、富永策郎の息子逸次の大学校進学を相談したことに対し、
青木は、大学校進学には高等中学校を修了した経歴が必要なこと
を説明し、それには時間と金銭が大いに必要であるから現実的に
難しいであろうことを述べ、結論として逸次の大学校進学を断念

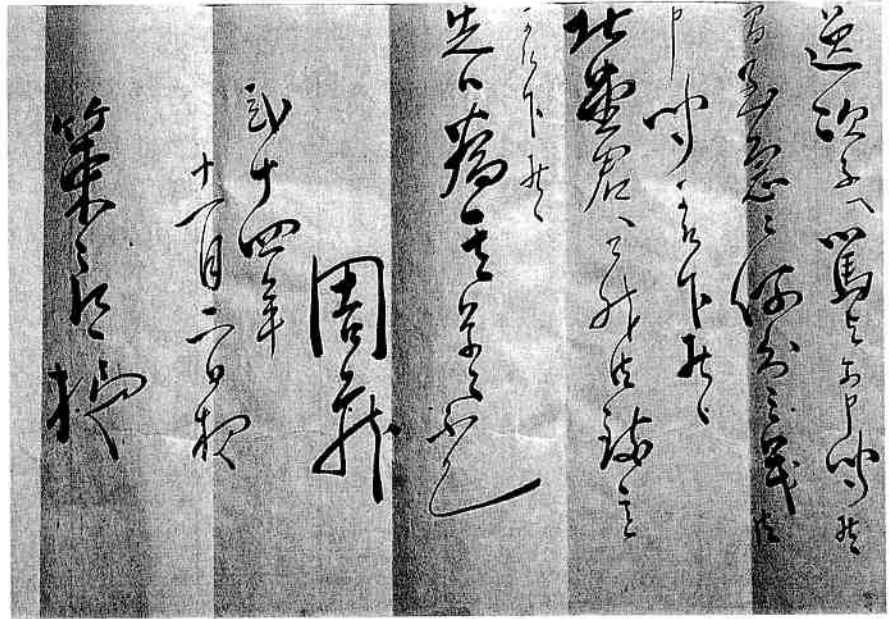
し専門的な一科目を身に付けさせ、一日も早く自立させる道を勧
めたものである。



図七 明治二十四年十一月二日付、富永策郎宛て
青木周蔵書簡封筒裏（富永亮一氏蔵）。



図八 同書簡封筒裏（富永亮一氏蔵）。



図九 同書簡 (富永亮一氏蔵)。

③明治二四年二月二日 富永策郎宛て

逸次子出京之節、御投与之書帖并二十月廿五日附之細書共正
二領取、時下秋冷弥増候得共、貴君并北堂君其外様御益御多

祥之由、重量新賀ニ御座候、陳逸次子之可修学科之義、再度
までも縷々御申越相成、一応承知いたし候共、到底大学校ニ
於而、規定通之専門の諸学科を修るニは、先高等中学之試考
を経たる者ニ無之ては不相成候処、逸次子是不幸ニも高等中
学之試験を経たる人ニ無之候放、所謂高等なる専門学ニ從事
するわけニハ参兼申候、且来論之趣ニては数年間ヲ期シ、十
分なる学資も御仕送難被成故ニ推奉いたし候間、所謂早道の
ニ容易なる一学科を修メさせ、一日も速ニ自分之腕前ニ而糊
口シ得る人と相成候様勸諭罷在申候、要するニ府下ニ滞在す
る中等之学生ハ、毎年百乃至百式十円之学資を必需する振合
ニ御座候間、逸次子ヲシテ今より中学ニ入り遂ニ大学門ニ進
ミ終ニ規定之試験ヲも経過セシムル事ニいたし候得者、七八
ヶ年之内ニ学資金壹千円ハ御仕送無之ては不相叶候、之ニ反
シ前段ニ述置候通り、早道学問ニ而一科目を修メシメ候得は、
式年餘間ニ式百餘円之金子有之候而事足可申候、貴君ニ於而
は、前述之事情あるニも係らず別ニ御考可有之故、否サレハ
右早道学問ニ一契する云々、逸次子へ篤与可申聞候間、至急
ニ何分之義御申聞可被下候、北堂君へ可然御致意可被下候先
ハ為其

草々不一

周蔵

式十四年十一月二日夜 策郎様

これら三通の書簡から、青木が何らかの形で富永家、特に第十四代目章一郎と深い関係にあることが判明したものの、具体的にどのような関係であったのかは定かではない。

青木周蔵と富永家の関係をさらに探る史料として、富永亮一氏はその他数種の写本類を所蔵しておられ、中でも富永家の代々にまつわる出来事、商売記録などが記された「記録」という一次史料、さらに富永家第十六代目佐近の従兄弟にあたる古門富太が、明治二八（一八九五）年に記した「中津酢屋富永家のこと。」および「富永家のこと。」が該当資料として挙げられる（図一〇、一一）。

まず、「記録」であるが、本文献は一〇〇丁にもなる重厚な写本であるが、残念ながらこの中に青木周蔵（三浦玄明）の名は確認できなかった。

次に、明治二八年「中津酢屋富永家のこと。」および「富永家のこと。」の二写本であるが、本文献は章一郎より後世の古門富太が誌したもので一次史料ではないが、青木周蔵と章一郎の関係について新情報が提示されている。

まず、章一郎およびその息子策郎についてであるが、その生没年は「富永家のこと。」に次のように記されている。

富永章一郎は左近の祖父で天保五年に生れ明治二十五年六十歳位？で歿しております左近の父策郎は嘉永五年生れ八十五歳で昭和十二年一月八日歿しております⁶⁾



図一〇 古門富太誌「中津酢屋富永家のこと。」表紙（富永亮一氏蔵）。



図一一 同書巻末（富永亮一氏蔵）。

これによれば、章一郎は天保五（一八三四）年に出生、明治二五（一八九二）年五八歳にして没したとされ、また、息子策郎は一八五二年に生まれ、一九三七年八五歳で死去したと述べられている。章一郎の没年月日については異論がある。嶋通夫は明治二三（一八九〇）年五月に死去したという⁶²。しかしながら、筆者は古門富太説および嶋通夫説に疑問を禁じえない。

というのは、章一郎は生前儒学や洋学に優れており、死に臨み進んで献体を申し出た人物で、その遺体がコレラ流行の気運にあった明治二三（一八八九）年九月六日午前七時中津にて行われた解剖に用いられたことから、中津の医学史上にその名を遺している⁶³。ここから章一郎がその前日に亡くなったことが推察されるためである。筆者の説をさらに裏付ける史料として、前に揚げた青木周蔵書簡②に「本月『明治二三年九月』五日之哀訃」とあり、これによって章一郎の没年月日は明治二二年九月五日と確定できる。

さて、章一郎および策郎と青木の関係は「富永家のこと。」に次のように記されている。

章一郎の世話になつた人に青木周蔵と言ふ人が明治頃になりまして、後に出世して外務大臣（当時外務卿）になりました、章一郎も息子の策郎翁も上京して其出世振りを見もし、又青木から大変な優遇を受けたと言ふ話があります、筆者古門富太（仁里）の兄林太郎が上京、東京高等商業学校在学中学資が足りないところに、叔父に当る富永策郎から青木の事を聞

き知り、早速林太郎は青木を訪ねて事情を語り、何年間か何分の学資を恵んでもらつたと言ふ話を最近ある筋から承知しました、さるにても青木のような人を章一郎が何の縁故で一時恩を養つてあつたか、最近の事情も知り度いもので、章一郎と言ふ人の人柄もしのばれるしだいであります⁶⁴。

また、同じ古門富太が誌した「中津酢屋富永家のこと。」の一節「章一郎と青木周蔵」にも同様の話が見える。

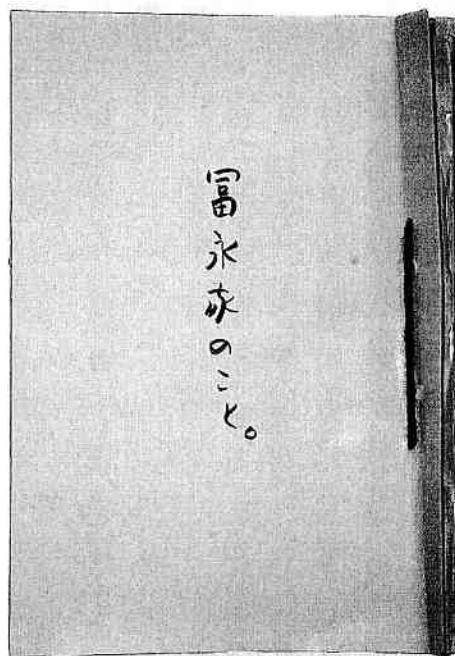
章一郎の家に書生をして居た青木周蔵といふ人が、明治の初め頃出世して子爵外務大臣にまでなりました。後に章一郎は上京して東京見物をなし、厚いもてなしを得ております。

筆者の兄古門林太郎は章一郎の徳によつて、何らかの学資の援助を青木周蔵から得たらしい話もありますが、確かでないから略します⁶⁵。

これらの二史料に見えることは、青木周蔵は中津に滞在していた或る時期、富永章一郎の家で書生をしていたこと、章一郎が上京した際には青木が手厚いもてなしをしたこと、筆者の兄古門林太郎が青木に学資を援助してもらつたかもしれない、ということである。ただし、古門富太の史料は人から聞いた話、すなわち伝聞によるもので一次史料でないことには留意せねばならず、また、記述自体も章一郎の没年月日を誤るなど、その信憑性にはやや疑問が残る。しかしながら、青木の中津滞在期のうち「誠求堂」を



図一三 同書巻末（富永亮一氏蔵）。



図一四 古門富太誌「富永家のこと」
表紙（富永亮一氏蔵）。

出てからの残りの空白期間を推察するものとして、古門富太の二写本は示唆に富んだ有益な新出史料といえよう。

おわりに

現在まで青木周蔵の研究は、ドイツ公使、外務大臣など政治家として活躍した面に重点が注がれてきた。しかしながら、その素養をはぐくんだ中津滞在期については、『青木周蔵自伝』に記されたこと以外は全くの不明とされてきた。

こういった研究状況にあつて、中津市在住の富永亮一氏所蔵の富永家宛て青木周蔵書簡三通、富永家の「記録」、富永家第十六代目佐近の従兄弟である古門富太が記した「中津酢屋富永家のこと。」および「富永家のこと。」といった新出史料によって、手島物斎の私塾「誠求堂」を出てからの空白期間に、青木は少なくとも富永家に寄宿していた時期が存在していたことが明らかになり、加えて富永家の書生をしていた可能性が浮上した。今後は、青木周蔵が富永家に寄宿しながらどのように活動したのか、どのような人と接触したのかについて、さらに追究していく。

坂根義久校注『青木周蔵自伝』、平凡社、東京、一九七〇年。

坂根義久には、『青木周蔵の憲法案案について』（『国学院雑誌』第六六巻五号、一九六五年所収）、『青木周蔵論』（『日本外交史研究 外交指導者論』（『国際政治』第三三三号）、一九六七年所収）、『青木周蔵論 対英条約改正交渉と外交政略』（『季刊国際政治』第三三三号、一九六七年所収）、『青木周蔵の帝国大日本区界六道政規草案 一』（『国史学』第七七号、一九六八年所収）、『青木周蔵の在藩時代』（『国学院大学大学院紀要』第七号、一九六九年所収）、『青木周蔵の帝国大日本区界六道政規草案 二』（『国史学』第七七八号、一九六九年所収）、『青木周蔵の外相就任事情 第一次山県内閣の場合』（『国学院雑誌』第八〇巻五号、一九七九年所収）、『青木周蔵公使の対英条約改正交渉 下巻』（『日本史学論集 坂本太郎博士頌寿記念』、吉川弘文館、一九八三年所収）、ならびに『明治外交と青木周蔵』、刀水書房、東京、一九八五年といった一連の研究で、青木周蔵の生涯や外交政策とその背景などについて長年にわたって詳細な論考を加えている。

水沢周には、『青木周蔵 明治外交の創造』青年篇・壮年篇、日本エディタースクール、東京、一九八八―一九八九年、および『青木周蔵 日本をプロシヤにしたかった男』上・中・下巻、中央公論社、東京、一九九七年といった著作があるが、いずれも歴史小説である。

坂根義久および水沢周以外の研究としては、加藤吉弥「鵠外と青木周蔵」（『比較文学研究』第一八号、一九七一年所収）、石川澄雄「シユタイン改革と日本」（『駒沢史学』第四七号、一九九四年所収）、堀口良一「長州出身者の反キリスト教論 木戸孝允・青木周蔵・島地黙雷の場合」（『帝塚山大学教養学部紀要』第四六号、一九九六年所収）、柳教烈「明治憲法制定期における華族土着論 青木周蔵の土着論を中心に」（『ヒストリア』第一五三三号、一九九六年所収）、市丸祥子「明治期の日独交流におけるドイツプロテスタント宣教 普及福音新教伝道会について」（『西日本ドイツ文学』第一五号、二〇〇三年所収）、大石一男「青木外相期の条約改正交渉 方針形成と国際環境」（『史林』第八七巻四号、二〇〇四年所収）などがある。

書簡を時代順に並べると、①「明治一九年四月二五日付富永章一郎宛

て書簡」（二七、七×一四八、四纏、三枚続、楮紙）、②「明治二二年九月一〇日付富永策郎宛て書簡」（一八、九×九三、三纏、二枚続、楮紙）、③「明治二四年一月二日付富永策郎宛て書簡」（二七、八×一五九、五纏、四枚続、楮紙）の三通である。

④「記録」（三三、〇×二四、四纏、四ツ目綴、写本、一〇〇丁、安政六年）、表紙に「安政六年己未九月吉日興復之」とあり。

⑤古門富太誌「中津酢屋富永家のこと。」（二一、一×一四、九纏、四ツ目綴、写本、二〇×二〇マス原稿用紙、三九丁、明治二八年二月吉日、貼紙あり）。

⑥古門富太誌「富永家のこと。」（二一、一×一四、九纏、二ツ目綴、写本、二〇×二〇マス原稿用紙、一〇丁、明治二八年二月吉日、貼紙およびメモ二種の挟み込みあり）。

⑦前掲「明治外交と青木周蔵」、二一五頁。

⑧前掲「明治外交と青木周蔵」参照。

⑨テルは本来青木研蔵の兄周粥の娘であり、研蔵の養女であった。結局青木家は梅三郎という養子をもらい、テルは青木がエリザベートと再婚したとほぼ同じ頃、山口県士族の井関忠一と再婚した。前掲「青木周蔵 明治外交の創造 青年篇」、二二一頁。

⑩前に述べたように中津藩滞在時の青木周蔵の名は、養子に入る以前の三浦玄明であったが、本稿では便宜上、以下呼び名を青木周蔵で統一する。

⑪前掲「青木周蔵自伝」、四頁。

⑫前掲「青木周蔵自伝」、四五頁。

⑬前掲「青木周蔵 明治外交の創造 青年篇」、二七―二八頁。

⑭前掲「青木周蔵自伝」、六九頁。

⑮手島をはじめとした自伝中に登場する人物については後章参照。

⑯「大分県教育百年史」によると、鷹匠町にあり生徒数は八十人ほどで、天保年間（一八三〇―一八四四）に設立され安政初（一八五四）年に廃止されたとあり、青木周蔵の自伝と記述が合致しない。大分県教育委員会編集事務局編「大分県教育百年史」第三巻、大分県教育委員会、一九七六年、三五頁。しかしながら「下毛郡誌 全」に、文久元年

- （一八六一）に手島仁太郎がなくなった後、文久年間に弟の橋本忠次郎が「誠求堂」を継ぎ、それからは従学者が増え入門者千人ほどであったとする指摘がある。大分県下毛郡教育会編「下毛郡誌 全」復刻版、名著出版、東京、一九七二年、五〇六頁。「大分県教育百年史」には橋本忠次郎が継いでからのことは記載されておらず、これらを総合して考慮すると、青木周蔵の自伝の記述は誤りではないと考えられる。
- 前掲「青木周蔵自伝」、六九頁。
- 20 青地林宗「気海観瀾」、文政一〇（一八二七）年刊。桂川甫賢序。物理学書の刊本としては日本最初といわれる。
- 21 宇田川玄真（榛齋）「医範提綱」、文化二（一八〇五）年刊。解剖学的文献であるが、その内容は生理学、病理学にまで及ぶ。
- 22 前掲「青木周蔵自伝」、九頁。
- 23 前掲「明治外交と青木周蔵」、七、八頁。
- 24 「御家中系図 嘉永三年改」（複写、中津市立小幡記念図書館蔵、請求記号五八〇・一八・四四）、一九、四七頁。
- 25 前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四四頁。
- 26 前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四四頁。
- 27 前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四四頁。
- 28 前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四四頁。
- 29 前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四四頁。
- 30 前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四五頁。
- 31 前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四五頁。
- 32 前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四五頁。
- 33 前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四五頁。
- 34 前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四五、四六頁。
- 35 前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四六頁。
- 36 前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四六頁。
- 37 前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四六頁。
- 38 前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四六、四七頁。
- 39 前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四七頁。
- 40 山崎有信編「豊前人物志」（復刻版）、美夜古文化懇話会、一九七三年、

- 三八三、三八四頁。
- 41 前掲「御家中系図 嘉永三年改」、四七頁。
- 42 前掲「下毛郡誌 全」、六六五頁。
- 43 前掲「下毛郡誌 全」、六六五頁。
- 44 大江春塘「バスタード辞書」、奥平昌高、文政五（一八二二）年刊。
- 45 前掲「明治外交と青木周蔵」、七頁。
- 46 廣池千九郎編述「中津歴史」、鶴居村（大分）、一八九一年。
- 47 赤松文二郎編纂「扇城遺聞 郡誌後材全」、中津市立小幡記念図書館、一九三二年、四二八頁。
- 48 前掲「下毛郡誌 全」、七五五頁。なお、「内」は筆者による記述である。
- 49 前掲「中津歴史」、二五、二五三頁。
- 50 前掲「扇城遺聞 郡誌後材全」、四二八頁。
- 51 村上玄水については、今永正樹「医亦従自然也 村上医家事歴志」、中津、一九八二年、一〇一、一〇二、一〇三頁。川島眞人「蘭の泉中津に湧く」、西日本臨床医学研究所、中津、一九九二年、一六四、一六五頁。ヴォルフガング・ミヒエル「村上玄水の略歴」（ヴォルフガング・ミヒエル編「村上玄水史料」Ⅰ、中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館、二〇〇三年、一、六頁所収）を参照。
- 52 川島眞人「蘭学の泉中津に湧く」、西日本臨床医学研究所、中津、一九九二年、一八九、一九〇頁。
- 53 前掲「蘭学の泉中津に湧く」、一八九、一九〇頁。
- 54 前掲「下毛郡誌 全」、七五五頁。
- 55 前掲「扇城遺聞 郡誌後材全」、四二八、四二九頁。
- 56 「村上医家史料館史料目録」二部三六。
- 57 「村上医家史料館史料目録」一部三。
- 58 村上玄水の天文学や医学などの科学知識、ならびにその他軍学、また、村上家が蔵している文学書やランビキ（蘭引）などについては、吉田洋一「解蔵記并道原」（ヴォルフガング・ミヒエル編「村上玄水資料」Ⅰ、七、三九頁所収）、拙稿「佛國曆象編」（同書、四〇、一〇四頁所収）、香沢宣賢「シーボルトと日本医学—村上玄水写本「矢以勃兒社験方録」を中心に」（ヴォルフガング・ミヒエル編「村上玄水資料」Ⅱ、

中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館、二〇〇四年、四七～一二頁所収）、吉田洋一「江戸期中津藩村上家の軍学について」（同書、一三～四三頁所収）、拙稿「村上玄水著『富国篇』とその背景」（同書、四四～七〇頁所収）、W・ミヒエル「新旧西洋外科術が混在する地方蘭学者の史料―村上玄水写の「カスハル書口訣」を中心に」（同書、七一～九七頁所収）、朝稲香子「豊前中津」にみる天保期の中津俳壇」（『ヴォルフガング・ミヒエル編『村上玄水資料』Ⅲ、中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館、二〇〇五年、一～二二頁所収）、拙稿「村上医家史料館所蔵写本『老野子』における「有外子」・「老野子」とその背景」（同書、二二～五九頁所収）、吉田洋一「村上家の軍学修養―『旺相門解』を素材として―」（同書、五三～七五頁所収）、W・ミヒエル、遠藤次郎、中村輝子「中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館蔵の薬箱及びランビキについて」（中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館資料叢書四）、福岡、二〇〇五年を参照。

59 鷹 大江医家所蔵 辛島医家旧蔵史料展」目録参照。

60 前掲「富永家のこと」、八丁表裏。なお、便宜上筆者が適宜説点をほどこした。

61 嶋通夫「ふるさとの歴史」、中津市刊行会、一九八五年、二〇六～二〇七頁。

62 川島真人「医は不仁の術 努めて仁をなさんと欲す」、西日本臨床医学研究所、中津、一九九六年、一一〇～一一一頁。

63 前掲「富永家のこと」、九丁表裏。

64 前掲「中津酢屋富永家のこと」、三八丁表裏。

【付記】本稿を執筆するにあたり、中津市で銃砲火薬店を営む富永亮一氏は、青木周蔵の書簡三通ならびに富永家の「記録」、古門富太誌「中家津酢屋富永家のこと。」および「富永家のこと。」といった、これまで未発表であった一連の貴重史料の利用許可をくださった。また、中津市歴史民俗資料館の保科眞氏には、青木周蔵が接触した中津藩の学者を探る上で関係資料を博搜していただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

【資料二】明治一九年四月二五日付富永章一郎宛て
書簡（一七、七×一四八、四纏、三枚続、楮紙）

本月十三日之責書

両三日前接手無

恙御帰郷相成

候との賀々

尤船中より少々

眼痛二而御困却

被成候由災止此

事二御座候誠二先

達而御上京之節ハ

為何風情も無之

都合たり志二付

百里外ニ尋問セシ

甲斐も無之と嘸

々御後悔被成候

半氣之毒に奉存候

横須賀へ御出之節ハ

伊藤坪井両氏

共不存二而何故御不

如意之事而已有之

候由萬々氣之毒

ニ奉存候併ン鎌倉

地方へ御遊覧之
際ニハ萬端御都

合克敷珍貨

宝器等御一見

相成候由賀候

令息睦郎子身

上之義ハ萬々相含

居候得共目今之情

勢ニ而ハ強而東京

江呼寄候義却而不

都合ニ可有之候間

差当り縣地ニ而骨

折候様御説

論可被下候

御家内様へ可然御

敬意可被下奉頼候

先ハ拙答差出度

草々如此御座候

不一

周藏

十九年四月二十五日

章一郎様

梧右

【資料三】明治三二年九月一〇日付富永策郎宛て
書簡（一八、九×九三、三纏、一枚続、楮紙）

尚々老父母より可然御

悔可申進旨呉々も申付

候間可然御含可被下候

本月五日之哀計

昨日到来御親父様

御義久敷肺部之

疾ニ御罹り居被成候

処御保養不相叶

終ニ黄泉へ御旅行

被成候との御事

誠ニ驚愕いたし申候

最初御病氣ニ而有

之候事も夢ニ承知不

致候ニ付御見舞状

も不差進萬々遺憾

ニ存申候母上様其

他皆々様共嘸々御愁

傷之義と遠方より

洞察罷在申候 此上

ハ母上之御身ニ御病氣

不相起候様何卒々々

御孝養可相成候御

同人へは初二弔詞不申

進候間貴君より可然御

致意可被下候

先ハ御悔申進度

草々如此御座候

敬具

青木周蔵

式十式年九月十日

於東京認之

富永策郎殿

【資料四】明治二十四年二月二日付富永策郎宛て

書簡（一七、八×一五九、五糎、四枚続、楮紙）

逸次子出京之節

御投与之書帖并二

十月廿五日附之細

書共正二領収時下、

秋冷弥増候得共貴

君并北堂君其外様

御益御多样之由

重量新賀二御座候

陳逸次子之可修学

科之義再度までも

縷々御申越相成一応

承知いたし候共

底大学校ニ於而規定

通之専門的諸学科

を修るニは先高等中

学之試考を経たる者

ニ無之ては不相成候処

逸次子は不幸ニも

高等中学之試験

を経たる人ニ無之候放

所謂高等なる専門学ニ

従事するわけニハ参

兼申候且来論之

趣ニては数年間ヲ期シ

十分なる学資も御仕送

難被成放ニ推奉いた

し候間所謂早道の二容

易なる一学科を修メ

さ勢一日も速ニ自分

之腕前ニ而糊口シ得る

人と相成候様勸諭

罷在申候要するニ府下

ニ滞在する中等之学生ハ

毎年百乃至百弍十円

之学資を必需する振

合ニ御座候間逸次子ヲシテ

今より中学ニ入り遂ニ大

学門ニ進ミ終ニ規定之

試験ヲも経過セシムル事ニ

いたし候得者七八ヶ年

之内ニ学資金壹千円

ハ御仕送無之ては不相叶

候之ニ反シ前段ニ述置候

通り早道学問ニ而一科

目を修メシメ候得は弍年

餘間ニ弍百餘円之金子

有之候而事足可申候

貴君ニ於而は前述之事

情あるニも係らず別ニ御

考可有之致否サレハ右

早道学問ニ一契する云々

逸次子ハ篤与可申聞候

間至急ニ何分之義御

申聞可被下候

北堂君へ可然御致意

可被下候

先ハ為其草々不一

周蔵

弍十四年

十一月二日夜

策郎様

● 研究ノート

中津藩医村上玄水による

人体解剖の位置づけについて

ヴォルフガング・ミヒエル

これまで奥平藩御典医村上玄水に言及する研究者たちは、決まって文政二（一八一九）年三月に中津藩刑場長浜において行われた死体解剖を取り上げ、九州初の解剖であると強調してきた。初めてこの見解を示したのは今永正樹氏で、『医亦従自然也』という村上家に關する最も重要な研究書の中で記したようである¹。また、平成九年に明治初期までの解剖を総点検した故杉立義一氏も九州地方関係の最初の功績として玄水をあげており、この位置づけが定説となっているといつても過言ではない²。

筆者も歴代の著者たちと同様のことを述べていたが、その後福岡藩の医学史に精通しておられる奥村武氏のご教示を受け³、博多の聖福寺順心庵で墓地を調査したところ、その見解に揺さぶりをかけるような史料を確認した⁴。境内の整備や開発のためか古い墓は多くが失われてしまったが、幸い順心寺の納骨堂付近の一隅に天保一二（一八四一）年福岡藩処刑場大浜で行われた人体解剖の執刀者百武萬里の墓と、伊勢田道益義倫の墓石が遺されてい

た（図一）。道益の戒名は「瑞鶴軒仙峰道益居士」となっており、その裏面に刻まれている碑文によれば、安永一〇（一七八二）年より黒田藩の七代藩主治之（鳳陽院）及び八代藩主治高（龍雲院）の侍医を務めていた伊勢田道益義倫が、寛政九（一七九七）年頃、特に刑人の身首を請いてそれを解剖（解脈）している。また、道益はその成果を「解体図記」という文書としてまとめた。残念ながら浸食のため文字の一部はすでに消えてしまっている。伊勢田道益義倫の墓に関する情報をさらに追求したところ、荒井周夫が昭和四（一九二九）年に発表した『福岡県碑誌』に、完全な形で記述が見つかった⁵。道益による人体解剖を示す唯一の史料としてこの墓碑は大変重要なものである。

「伊勢田道益義倫、其先播州人、從藩祖之於移豊之中津、又從而来本州、其八世孫云道益素仲、長子則義倫也、自安永辛丑、而待医鳳陽、龍雲二君、寛政丁午歳、特請刑人之身首、於□府解脈之、撰書曰解体図記、實以文化己巳二月十有九日卒云」

（伊勢田道益義倫の其の先は播州の人。藩祖「黒田孝高」の豊の移るに従いて中津に之き、又従いて本州より来る。其の八世の孫は道益素仲と云い、長子則義倫なり。安永辛丑より鳳陽・龍雲二君に待医たり、寛政丁午歳特に刑人の身首を請い、□府に於いて之を解脈し書を撰して解体図記と曰う。実に文化己巳二月十有九日を以て卒すと云う。）

これは京都の山脇東洋による「観臓」(宝暦四年)、河口信任の『解屍編』(明和六年)や『解体新書』の出版(安永三年)などで時代が大きく動き始めた一八世紀後半に行われている。当時広まりつつあった身体の「内景」への知識欲は道益が著述した「解体図記」に裏付けられているが、その史料は現存しておらず、彼の動機、ねらい、解剖の成果などは謎に包まれている。



図一 伊勢田道益(どうえき)義倫の墓石①、百武万里の墓石②

一見したところ、上記の墓碑は村上玄水による解剖が九州初だったことを覆す内容であるが、解剖が行われた「□府」という断片的な情報の問題を見過ぎしてはならない。黒田騒動史跡の関連で糟屋郡須恵町の石瀧豊美氏による処刑場に関する詳細な研究があるが、氏のご教示によれば、「□府」をそれらの刑場に関連づけるには碑文の内容から見ても当時の福岡藩の刑場の状況から見ても無理があるということである。確かに、福岡藩の通常の処刑場ならば、それをわざわざ墓碑に入れる必要はなかったはずである。

福岡藩の刑場でなければ、次の選択肢として「江府」という解釈が考えられる。この場合も、様々な疑問を禁じ得ない。伊勢田道益による身首の請いは誰に提出されたのであろうか。江戸では藩主ではない。また、前野良沢と杉田玄白らが明和八年に江戸の処刑場で解剖を参観して以降、京都、大坂、甲洲、一関、萩、岡山、広島、日光、福井などで様々な刑死体解剖が行われたが、一八一〇年代から四〇余回の解剖に立会った南小柿寧一(一七八五―一八二五年)が文政二年に著した絵巻「解剖存真図」以外は、江戸での人体解剖を示す記録は見当たらない。寛政年間の江戸での状況を考慮すれば、伊勢田道益による「江府」での解剖は異例の出来事であったと思われる。史料不足のためこの件はいまだ多くの謎に包まれており、新資料の発見を待つしかない。

幸い村上玄水の場合は自筆原稿「解臓文」と「解臓記」が重要な情報源として残っている。臓器に関しては中国医学の各流派は宋時代以降ほとんど変わらない二、三種類の五臓六腑図を十分

と見なしたが、一八世紀後半に解剖を行った医師たちは深い探求心を持ち身体をより視覚的に理解、描写しようとしていたのである。質の高い絵図による記録を取るため、玄水は中津藩の画員片山東籬^{とうり}と助手の佐久間玉江を動員した。また、中津藩内外の同僚などに対する責任感と使命感も注目値する。筑前・肥前から解剖場に集まってきた五七人の見学者への連絡は彼の行動の計画性を裏付けている。上記の原稿に見られる帆足万里による校閲及び序文を考えると、その文書の刊行への玄水の意欲を感じ取れる。さらに、自序で「ヒツホカラテス」、「回斯篤児」(Lorenz Heister)、「パンリス」(賢理=Henry William)、前野良沢及び宇田川榛^{しんざい}を挙げ、自分が行った解剖の位置づけを示す姿勢も高評に値する。このことを総合すると、「九州初」かどうかに関わりなく、玄水による人体解剖が個人的好奇心を遙かに超えた、九州地方における偉大な歴史的功績であることに変わりはない。

近世日本の解剖史に関する研究には二つの流れがあるようだ。ひとつはそれぞれの時点で先駆的な役割を果たした医師(蘭方医)を中心に進める研究であり、もうひとつは、文化人類学の刺激によるものか、死体解剖と日本人の身体観に着目する研究である。多くの解剖場に数々の見学者が集まったが、その中の医師が受けた影響及び彼らの反応を示す史料はまれであるようだ。伊勢田道益の解剖からも村上玄水の解剖からも人体解剖の継続性のようなものは生まれなかった。山脇東洋の歴史的な「腑分け」から半世紀を経て刑死体の解剖は特別許可を前提とする例外的な行爲だった。勿論、権力側の消極性はひとつの理由だったであろうが、

解剖刀を握った医師及び立ち会った医師たちは一、二回の「観臓」でその知識欲を満たせたようだ。伝統医学との整合性がなく、その病理学的調整が難しすぎたためか、解剖により得た知識を実際の医療に生かせなかったためか、村上玄水も伊勢田道益も多くの先駆者たちと同様に二度と死体を請うことはなかった。

- 1 今永正樹『医亦従自然也 村上医家事歴志』、村上記念病院、村上医家史料館、中津、一九八二年、一一九―一二二頁。
- 2 杉立義一「江戸時代 解剖の事績とその反響」(山田慶児・栗山茂久共編『歴史の中の病と医学』思文閣出版、京都、一九九八年所収)、五一―八頁。
- 3 奥村武「福岡における医学の発達」第一〇四回日本医史学会学術大会、福岡、二〇〇三年四月一三日、記念講演配付資料。
- 4 阿部寛海住職のご協力にお礼を申し上げます。
- 5 荒井周夫編『福岡県碑誌 筑前之部』大道学館出版部、福岡、一九二九年。
- 6 西日本文化協会編『福岡藩浦方 近世史料編』、福岡、一九九八年。
<http://machi.monokarai.jp/?php?item=2733>
- 7 原文と読み下し及び現代語訳に関しては以下の文献を参照。吉田洋一「解臓記并道原」、(中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館資料叢書)第一巻、二〇〇三年所収、四―三九頁。

村上玄水自筆写本「草稿」について

大島 明 秀

「草稿」については、現在まで四冊刊行されている中津市歴史民俗資料館史料叢書の中で、過去二度にわたって部分的にヴォルフガング・ミヒエルが着目した。その最初は「村上玄水の略歴」¹⁾で、玄水の事蹟を語る上で、本資料の五丁裏に認められるオランダ語の格言について紹介している。次は「村上医家史料館のランビキについて」²⁾において、村上玄水が製造を意図していたであろうランビキ（蘭引）のデザインと、それにまつわると思われる夏至および冬至を描いた図を採り上げた。

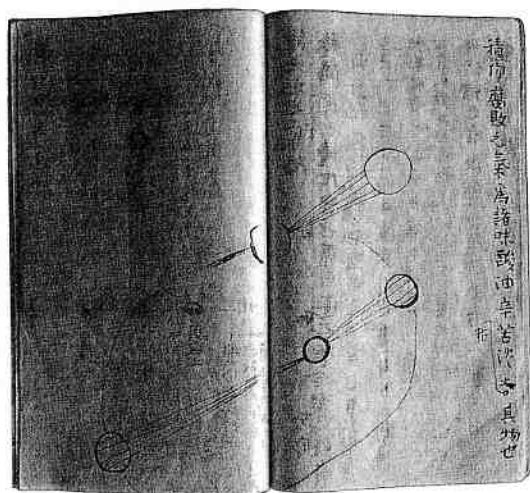
このミヒエルの一連の指摘によって、部分的に見ても「草稿」は豊富な内容を含む資料であり、村上玄水思想を探る上で重要なものであることにはや疑いの余地はなくなった。そこで本稿では、今後の研究上の活用を考慮して「草稿」の書誌と全体の内容構成を紹介し、本資料の全貌が可視化できるように情報を提供したい。

「草稿」は、表紙と裏表紙に用いている部分を除いて四八丁になり（白紙部分も入れる）、大きさは二〇・九×一三・二㎝で、紙平紐による四つ目綴じの写本である。著者については、本資料のランビキのデザインを描いた箇所の中に「文政九 六祖玄水製」³⁾

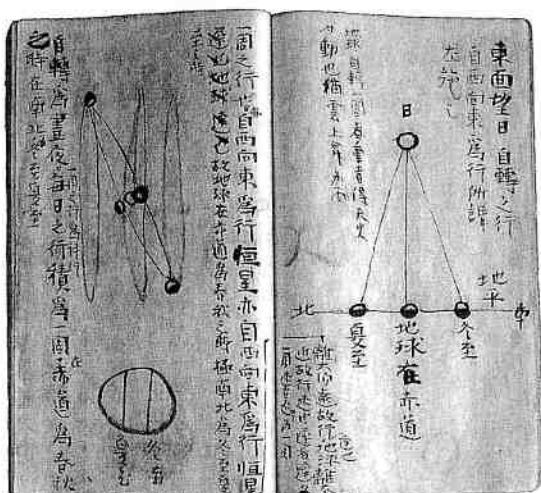
との記述が認められた⁴⁾。また、写本全体にわたって表記が平たく右払いや右はねに非常に力を込めた村上玄水独特の表記⁵⁾が確認されることから、本資料の全ての部分について、玄水の筆になるものと断定できる。本資料の作成年代についても、上記から文政九（一八二六）年頃だと分かる。

「草稿」の内容構成は次のようなものである。まず、表紙に「草稿」との表題が打ち付けで記され、見返しには「医範提綱」⁶⁾や「解體新書」⁷⁾といった医書の名前が認められる。一丁表裏は薬名とその製法などが列挙され、二丁表には不明の図が描かれ、二丁裏は白紙となっている。三丁表く四丁裏にかけては、三国志や中国古代の兵法などの話が記載されている。五丁表は再び白紙となる。五丁裏はオランダ語の慣用句が記され、オランダ語の下にはカタカナでその発音が付されている。六丁表く四五丁裏は、主に「夏至」、「冬至」、「氣」や「引力」など天文学的な話題が続く。四六丁表には様々な木の値段が記され、四六丁裏く裏表紙の裏にかけて、何か（ランビキを入れる棚か？）の設計のために、その諸材料の寸法が挙げられている。その中の四八丁表には玄水が製作しようとしていたランビキの図が認められる⁸⁾。

筆者はこれまで玄水による「佛國曆像編」⁹⁾、「老野子」¹⁰⁾といった天文学関係の写本を調査し、その成果として、釋圓通『佛國曆象編』（初版一八一〇年序）の刊行を起点として繰り広げられた、いわゆる「梵曆運動」に玄水の関心があったことを明らかにし、また、それに対して批判的な姿勢を採っていることなどを指摘してきた¹¹⁾。



図一 地球の公転の軌道と冬至および夏至の仕組みを描いた図。「草稿」、二八丁裏～二九丁裏（村上医家史料館蔵）。



図二 右図は太陽の高度と冬至および夏至の仕組みで、左図は地球の公転と冬至および夏至の仕組みを描いた図。「草稿」、二九丁裏～三〇丁裏（村上医家史料館蔵）。

「草稿」には、一七丁裏～一八丁表にかけて「夫大極者之屈居」図が示されている。また、二八丁裏～三〇丁表には地球の公転と夏至および冬至を表した図（図一、図二）が描かれており、三〇丁裏には太陽と地球の「寒帯」、「正帯」、「暖帯」の関係性や、地球の昼夜の仕組みについての図示が見える。この「夫大極者之屈居」図は朱子学的天文学に裏付けられたものであり、一方、太陽と地球の関係性については西洋天文学の知識に基づいている。ここから玄水の天文観が、ただに西洋のみならず漢学による知識と混在した複雑なものであることが分かる。

今後「佛國曆像編」の注釈部分や「老野子」の再考、ならびに「六祖玄水屈伸録」¹⁴、「天地分體論」¹⁵といった村上玄水著（と考えられる）天文関係の写本の追究を行う際の資料として、あるいは玄水の思想形成過程の一端を探る資料として、「草稿」は重要な位置付けを占めるものであろう。

1 「村上医家史料館目録」九部一〇七。「村上医家史料館のランビキについて」の脚注二三でミヒエルが提示した書誌は、おそらく「草稿」（村上医家史料館目録）九部一六六であり、本資料と情報が錯綜したのではないと思われる。前掲ヴォルフガング・ミヒエル「村上医家史料館のランビキについて」、七八頁。

2 ヴォルフガング・ミヒエル「村上玄水の略歴」（ヴォルフガング・ミヒエル編「村上玄水資料」Ⅰ、中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館、二〇〇三年、一～六頁所収）。

- 3 ヴォルフガング・ミヒェル「村上医家史料館のランビキについて」
(W・ミヒェル、遠藤次郎、中村輝子『中津市歴史民俗資料館分館村上
医家史料館蔵の薬箱及びランビキについて』〔中津市歴史民俗資料館分
館村上医家史料館資料叢書四〕、福岡、二〇〇五年、六九～七八頁所収)。
「草稿」、四八丁表。
- 4 前掲ヴォルフガング・ミヒェル「村上医家史料館のランビキについて」、
七七頁。
- 5 拙稿「村上医家史料館所蔵写本『老野子』における「有外子」・「老
野子」とその背景」(ヴォルフガング・ミヒェル編『村上玄水資料』Ⅲ
〔中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館資料叢書三〕、中津、二〇
〇五年)、一三三頁。
- 6 宇田川玄真(榛斎)『医範提綱』、須原屋伊八、江戸、文化二(一八〇
五)年序。本書は村上家の蔵書として現存している。「村上医家史料館
史料目録」一部三。
- 7 クルムス (Johann Adam Kulmus) 原著、杉田玄白訳、中川淳庵校『解
体新書』、須原屋市兵衛、江戸、安永三(一七七四)年刊。本書は村上
家の蔵書には確認できない。
(ただしこの間の一九丁表には不明な図があり、三四丁表裏はおそら
く玄水が住んでいた周辺の地理の説明で、三五丁表～三八丁表は白紙
である)。
- 8 ランビキの図も前掲ヴォルフガング・ミヒェル「村上医家史料館のラ
ンビキについて」、七七頁参照。
- 9 「村上医家史料館目録」二部三八。
「村上医家史料館目録」二部四五。
- 10 拙稿「佛國曆象編」(ヴォルフガング・ミヒェル編『村上玄水資料』I
〔中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館資料叢書一〕、中津、二〇
〇三年、四〇～一〇四頁所収)、および前掲拙稿「村上医家史料館所蔵
写本『老野子』における「有外子」・「老野子」とその背景」参照。
- 11 「村上医家史料館目録」二部四六。
- 12 「村上医家史料館目録」二部四七、二部四八。
- 13 「村上医家史料館目録」二部四七、二部四八。

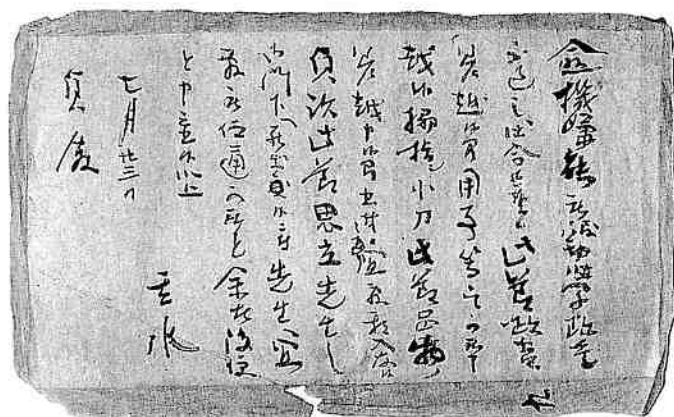
村上玄水の未発表書簡について

吉田 洋 一

はじめに

村上医家史料館には村上家関連の書簡・はがきなどの文書群、が約二五〇〇点所蔵されている。平成一七年二月現在、書簡（書状）類は一点ごとに仮番号が付されているが、はがき類は未整理のままであり、今後の整理・調査が急務となろう。本稿ではその文書群の中から七代目玄水の自筆と思われる書簡を紹介する。玄水関係の書簡は、現在のところ約十点ほど確認することができる。その内、書体の特徴や記されている内容などから、明らかに玄水自筆と思われる三点を翻刻した。三点の内二点（仮番号S4及びS5）は、中津奥平家の参勤（文政一三年）に随行した折に記したものとみてほぼ間違いない。以下これら三点の書簡について簡単に解説する。

玄水書簡（仮番号S3）縦一七、七×横三一、五糎（図一）



図一 玄水書簡（仮番号S3）縦一七、七×横三一、五糎（村上医家史料館蔵）。

【原文】

愈機嫌能被致勤学珍重

不過之仕合御察候、此節政吉

差越候間用事等を可被申

越候脇指シ小刀此節品物ノ

差越申候間書付之通り宜敷頼入存候

貞次此節思立先生之

御門下へ罷出候ニ付先生へ宜

敷被仰通可被下候余者後便

と申置候以上

七月廿三日

玄水

貞殿

【解説】

今永正樹『医亦自然従也 村上医家事歴志』の解説によると、文中の「先生」とは帆足万里（一七七八―一八五二）のことであるという。「政吉」は未詳であるが、宛名の「貞殿」とは玄水の息子の八代目村上春海（良一、貞、宗玄、宗元、玄秀、春水など）のことである。前掲の『医亦自然従也 村上医家事歴志』によると、文政七（一八二四）年六月から帆足万里の塾に入門したとあるので、おそらくその頃に出された書簡と思われる。

玄水書簡（仮番号S4）
縦一七、七×横四〇、五
糎（図二）



図二 玄水書簡（仮番号S4）縦一七、七×横四〇、五糎（村上医家史料館蔵）。

【原文】

伏見駅ヨリ一筆申入候先以
皆々達者相暮可申と此上も無く
大慶之至御察候爰許之野老
及皆々達者御供仕候

上御発駕ヨリ此方益御機嫌
克被為在恐悦之御事奉存候
随而御供も面々皆々格別之
不快も無之是又安心致し候
右安否申入度如此候以上
十月七日 玄水

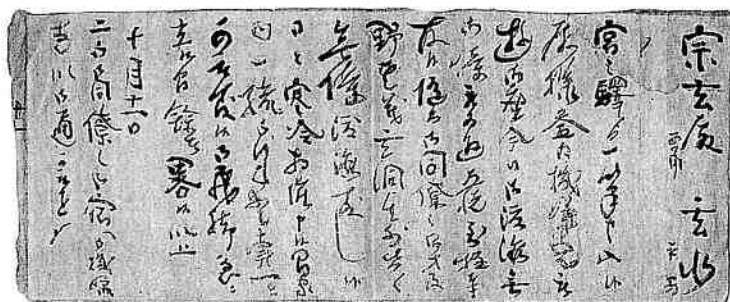
宗玄殿

二白殿町御隠居□原玄慶殿
如何被成候哉不安心ニ
被存候御序之節宜敷
頼入候

【解説】

文政一三（一八三〇）年の一〇月七日とすれば、この年玄水は一〇月六日に伏見に入り当地で二泊しているので、藩主随行之折に出された書簡であることは間違いない。内容は中津の家族の安否を気づかい、藩主はじめ随行者達も大事なことを伝えている。「殿町御隠居」に関しては現在のところ未詳である。

玄水書簡（仮番号S5）縦一七、七×横四三、五糎（図三）



図三 玄水書簡（仮番号 S 5）縦一七、七×横四三、五程
（村上医家史料館蔵）。

【原文】

（端裏） 宗玄殿 玄水

要用 平安

宮之駅ヨリ一筆申入候

殿様益御機嫌克被

遊御座今日御渡海無

御障被為遊恐悦至極奉

存候随而御同僚之御才及

野老茂玄洞其外皆々

無障渡海致し候

日々寒冷相催申候間家

内一統御自愛專一と

可被致候御飛脚急二

立候間余者略候以上

十月十一日

二白同僚之御宿へ御機嫌

克以御通可被下候以上

のであろう。

おわりに

以上、現在確認することができると玄水自筆の書簡を三点紹介した。仮番号 S 3 の「政吉」、同 S 4 の「殿町御隠居□原玄慶」、同 S 5 の「玄洞」などの人名を明確にすることが今後の課題となる。字の異同も含めて諸賢の御叱正を賜ることができれば幸甚である。

- 1 既存の目録に記載されている典籍を含む冊子類は除く。
- 2 拙稿「村上玄水の参勤随行記」（『村上医家史料館資料叢書』V、中津、二〇〇六年所収）参照。
- 3 村上記念病院、村上医家史料館、中津、一九八二年、一一〇頁。
- 4 同書一七四頁。
- 5 拙稿「村上玄水の参勤随行記」参照。

【解説】

S 4 の史料と同様に、この書簡を文政一三年と比定すれば、一月一日に宮駅に立ち寄っていることから、旅先より息子宗玄（春海）に宛てて出されたものに間違いない。「野老」とは参勤随行員の面々のことか。前日の桑名から宮（熱田神宮前）には船で渡海したとあるので、その無事をいち早く家族に伝えたかった

参考資料

史料

- ▲青木周藏書簡（二七、七×一四八、四糎、三枚続、楮紙、明治一九年四月二五日付富永章一郎宛て、富永亮一氏蔵）。
- ▲青木周藏書簡（一八、九×九三、三糎、二枚続、楮紙、明治二二年九月一〇日付富永策郎宛て、富永亮一氏蔵）。
- ▲青木周藏書簡（一七、八×一五九、五糎、四枚続、楮紙、明治二四年一月二日付富永策郎宛て、富永亮一氏蔵）。
- ▲オランダ国立公文書館所蔵（Nationaal Archief, s-Gravenhage）所蔵 Dagregister, Nederlandse Factortij Japan（出島オランダ商館長日誌）。
- ▲オランダ国立公文書館所蔵 Blomhoff Collection（VOC, Koloniaal Aanwinsten, Versch 1907）。
- ▲古門富太「富永家のこと。」（一一、六×一四、九糎、写本、一〇丁、富永亮一氏蔵）。
- ▲古門富太「中津酢屋富永家のこと。」（一一、一×一四、九糎、写本、三九丁、富永亮一氏蔵）。
- ▲村上玄水書簡（縦一七、七×横三一、五糎、村上医家史料館蔵、仮番号S3）。
- ▲村上玄水書簡（縦一七、七横×四〇、五糎、村上医家史料館蔵、仮番号S4）。
- ▲村上玄水書簡（縦一七、七×横四三、五糎、村上医家史料館蔵、仮番号S5）。

参考文献

- ▲「神谷氏略譜」（写本、宝暦三年一月一日、神谷源内（作？）、神谷正夫氏蔵）。
- ▲「記録」（三二、〇×二四、四糎、写本、一〇〇丁、安政六年、富永亮一氏蔵）。
- ▲「御家中系図 嘉永三年改」（複写、中津市立小幡記念図書館蔵）。
- ▲「探要集」（複写版、中津市立小幡記念図書館蔵）。
- ▲無題（神谷家の系図、享和二年～天保一五年、写本、著者不明、神谷正夫氏蔵）。
- ▲赤松文二郎編纂『扇城遺聞 郡誌後材 全』、中津小幡記念図書館、一九三二年。
- ▲朝稲香子「豊前中津」にみる天保期の中津俳壇（ヴォルフガング・ミヒェル編『村上玄水資料』Ⅲ、中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館、二〇〇五年、一～二二頁所収）。
- ▲荒井周夫編『福岡県碑誌 筑前之部』大道学館出版部、福岡、一九二九年。
- ▲生田重倫編集『奥平藩臣略譜集録』上巻、謄写版、「出版地不明」、一九七三年。
- ▲石川澄雄「シュタイン改革と日本」（『駒沢史学』第四七号、一九九四年所収）。
- ▲板沢武雄「日蘭文化交渉史の研究」、吉川弘文館、東京、一九八六年第四刷。

▲市丸祥子「明治期の日独交流におけるドイツプロテスタント宣教 普及福音新教伝道会について」(『西日本ドイツ文学』第一五号、二〇〇三年所収)。

▲今永正樹『医亦從自然也 村上医家事歴志』、村上記念病院・村上医家史料館、中津、一九八二年。

▲大石一男「青木外相期の条約改正交渉 方針形成と国際環境」(『史林』第八七卷四号、二〇〇四年所収)。

▲大分県教育委員会『大分縣人物志』(復刻版)、歴史図書出版、東京、一九七六年。

▲大分県教育委員会『大分県教育百年史』第三卷、一九七六年。

▲大分県下毛郡教育会編『下毛郡誌』、国書刊行会、東京、一九八〇年。

▲大分県総務部総務課編『大分県史』近世篇二、大分、一九八五年。

▲大島明秀「佛國曆象編」(ヴォルフガング・ミヒエル編『村上玄水資料』Ⅰ、中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館、二〇〇三年、四〇―一〇四頁)所収。

▲大島明秀「村上玄水著『富国篇』とその背景」(ヴォルフガング・ミヒエル編『村上玄水資料』Ⅱ、中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館、二〇〇四年、四四―七〇頁)所収。

▲大島明秀「村上医家史料館所蔵写本『老野子』における「有外子」・「老野子」とその背景」(ヴォルフガング・ミヒエル編『村上玄水資料』Ⅲ、中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館、二〇〇五年、一二―五二頁)所収。

▲奥村武「福岡における医学の発達」第一〇四回日本医史学会

学術大会、福岡、二〇〇三年四月一三日、記念講演配付資料。

▲笠井助治「近世藩校に於ける学統学派の研究」下、吉川弘文館、東京、一九九四年第三刷。

▲加藤吉弥「鴉外と青木周蔵」(『比較文学研究』第一八号、一九七一年所収)。

▲川島眞人「蘭学の泉中津に湧く」、西日本臨床医学研究所、中津、一九九二年。

▲川島眞人『医は不仁の術 努めて仁をなさんと欲す』、西日本臨床医学研究所、中津、一九九六年。

▲木村礎、藤野保、村上直編『藩史大事典』第七卷九州編、雄山閣、東京、一九八八年。

▲沓沢宣賢「シーボルトと日本医学―村上玄水写本『矢以勃児杜駿方録』を中心に」(ヴォルフガング・ミヒエル編『村上玄水資料』Ⅱ、中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館、二〇〇四年、四七―一二頁所収)。

▲黒沢翁満「刻異人恐怖伝」(『異人恐怖伝』第三卷、一八五〇年、W・ミヒエル蔵)。

▲黒屋直房『中津藩史』、碧雲荘、東京、一九四〇年。

▲河野福夫「中津奥平侯の参勤交代(上・下)」(『中津史談』第二号・三号、中津史談会、一九三九年三月―八月所収)。

▲坂根義久「青木周蔵の憲法草案について」(『国学院雑誌』第六六卷五号、一九六五年所収)。

▲坂根義久「青木周蔵論 対英条約改正交渉と外交政略」(『季刊国際政治』第三三三号、一九六七年所収)。

▲坂根義久「青木周蔵の帝国大日本区県六道政規草案 一」
〔『国史学』第七七号、一九六八年所収〕。

▲坂根義久「青木周蔵の在藩時代」〔『国学院大学大学院紀要』第七号、一九六九年所収〕。

▲坂根義久「青木周蔵の帝国大日本区県六道政規草案 二」
〔『国史学』第七七八号、一九六九年所収〕。

▲坂根義久校注『青木周蔵自伝』、平凡社、東京、一九七〇年。

▲坂根義久「青木周蔵の外相就任事情 第一次山県内閣の場合」
〔『国学院雑誌』第八〇巻五号、一九七九年所収〕。

▲坂根義久「青木周蔵公使の対英条約改正交渉 下巻」〔『日本史学論集 坂本太郎博士頌寿記念』、吉川弘文館、一九八三年所収〕。

▲坂根義久「明治外交と青木周蔵」、刀水書房、東京、一九八五年。

▲鹿野政直、鶴見俊輔、中山茂編『民間学事典』、三省堂、東京、一九九七年。

▲信濃教育会編『象山全集』巻五、信濃毎日新聞、南県町、一九三五年。

▲ジールトル著、斎藤信訳『江戸参府紀行』、平凡社、東京、一九六七年。

▲嶋通夫「ふるさとの歴史」、中津市刊行会、一九八五年。

▲下関市立長府博物館編『東アジアのなかの下関―近世下関の対外交渉―』、下関市立長府博物館、一九九六年。

▲杉立義一「江戸時代 解剖の事績とその反響」〔山田慶兒・栗山茂久共編『歴史の中の病と医学』、思文閣出版、京都、一九九八年所収〕。

▲武内博編著『日本洋学人名事典』、柏書房、東京、一九九四年。

▲中津市史刊行会編『中津市史』、中津市史刊行会、一九六五年。

▲中津市立小幡記念図書館『中津藩政史料選集（一） 奥平家中勤方覚書』、中津、二〇〇二年。

▲中津市立小幡記念図書館『中津藩政史料選集（二） 奥平家中勤方覚書』、中津、二〇〇三年。

▲西日本文化協会編『福岡藩浦方 近世史料編』、福岡、一九九八年。

▲日蘭学会編『長崎オランダ商館日記』一―一〇、雄松堂、東京、一九八九―一九九九年。

▲半田隆夫校訂・解説『中津藩 歴史と風土』第二―十五輯（中津藩史料叢書）、中津市立小幡記念図書館、一九八一―一九九五年。

▲廣池千九郎編述『中津歴史』、鶴居村（大分）、一八九一年。

▲文化財建造物保存技術協会『史跡 福沢諭吉旧居保存修理工事報告書』、中津市、一九八九年。

▲ヘンドリック・ドゥーフ著、永積洋子訳『日本回想録』、東京、雄松堂出版、二〇〇三年。

▲細田富多『村上医家資料集』一、中津歴史民俗資料館、中津、二〇〇五年。

▲堀口良一「長州出身者の反キリスト教論 木戸孝允・青木周蔵・島地黙雷の場合」〔『帝塚山大学教養学部紀要』第四六号、一九九六年所収〕。

▲松田清『洋学の書誌的研究』、臨川書店、京都、一九九八年。

▲丸山雍成『日本近世交通史の研究』、吉川弘文館、東京、一九

八九年。

- ▲三重野勝人『大分県先哲叢書 福澤諭吉』、大分県教育委員会、一九九九年。

- ▲水沢周『青木周蔵 明治外交の創造 青年篇』、日本エディタースクール、東京、一九八八年。

- ▲水沢周『青木周蔵 明治外交の創造 壮年篇』、日本エディタースクール、東京、一九八八年。

- ▲水沢周『青木周蔵 日本をプロシヤにしたかった男』上・中・下巻、中央公論社、東京、一九九七年。

- ▲W・ミヒエル『村上玄水の略歴』（ヴォルフガング・ミヒエル編『村上玄水資料』Ⅰ、中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館、二〇〇三年、一―六頁所収）。

- ▲W・ミヒエル『新旧西洋外科術が混在する地方蘭学者の史料―村上玄水写の「カスハル書口訣」を中心に』（ヴォルフガング・ミヒエル編『村上玄水資料』Ⅱ、中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館、二〇〇四年、七一―九七頁所収）。

- ▲W・ミヒエル、遠藤次郎、中村輝子『中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館蔵の薬箱及びランビキについて』（中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館資料叢書Ⅳ）、福岡、二〇〇五年。

- ▲山内祥二『奥平侯の参勤交代』私家版、二〇〇〇年。

- ▲山崎有信編『豊前人物志』（復刻版）、美夜古文化懇話会、一九七三年。

- ▲山本博文『参勤交代』、講談社、東京、一九九八年。

- ▲吉田洋一「解臈記并道原」（ヴォルフガング・ミヒエル編『村上玄水資料』Ⅰ、中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館、二〇〇三年、七―三九頁所収）。

- ▲吉田洋一「江戸期中津藩村上家の軍学について」（ヴォルフガング・ミヒエル編『村上玄水資料』Ⅱ、中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館、二〇〇四年、一三―四三頁所収）。

- ▲吉田洋一「村上家の軍学修養―『旺相門解』を素材として―」（ヴォルフガング・ミヒエル編『村上玄水資料』Ⅲ、中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館、二〇〇五年、五三―七五頁所収）。
- ▲羅竹風主編『漢語大詞典』、上海辭書出版社、上海、一九八六―一九九四年。

- ▲柳教烈「明治憲法制定期における華族土着論 青木周蔵の土着論を中心に」（『ヒストリア』第一五三号、一九九六年所収）。

- ▲渡部温『康熙字典 標註訂正』（影印復刻版）、講談社、東京、一九七七年。

- ▲Philipp Franz von Siebold: Nippon. Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen Neben- und Schutzländern Jezo mit den südlichen Kurilen, Sachalin, Korea und den Liuku-Inseln. (herausgegeben von seinen Söhnen). 2. Aufl. Würzburg/Leipzig: Leo Woertl, 1897, Bd. I.

- ▲François Halma: Woordenboek der Nederduitsche en Fransche taalen. Tweede Druk. Amsterdam: De Weyers & Smith, 1729.

- ▲Lodewijk Meijer: Woordenschat. Amsterdam: Hendrik Boom, 1688. W・ミヒエル所蔵。

- ▲Doeff, Hendrik: Herinneringen uit Japan. Heerlem: De erven François

Bohn, 1833.

◆ Overmeer Fisscher, J.F. van: Bijdrage tot de Kennis van het japan-
sche Rijk. Amsterdam: J. Müller, 1833.

索引

Abraham → 馬場佐十郎
 Berg, Hendrik van den → 伊藤盛永
 Blomhoff, Jan Cock 24 ~ 32
 Botanicus → 桂川甫賢
 Bürger, Heinrich 41
 Carolina Vrolijk 28
 Charlotte Blom 28
 Dapper → 鷹見泉石
 Doeff, Hendrik 21 ~ 24
 Frederik Hendrik → 奥平昌高
 Frederik van Gulpen → 伊勢屋七左衛門
 兵助
 Gerrit Pasop 28
 Globius → 高橋景保
 Golovin, Vasilii Mikhailovich ... 32
 Halma, François 23
 Heister, Lorenz 87
 Hemmij, Gijssbert 21
 Hoffmann, Johann Joseph ... 26
 Jacobus Paracelsus → 大江春塘
 Johannes Wilhelmus → 成瀬正壽

Klaas Kroon → 神谷久蔵
 Lade, Elisabeth von 63
 Lodewijk Smulgrag → 加藤彦兵衛
 Maurits → 奥平昌暢
 Meijer, Lodewijk 31
 NIPPON 33 ~ 35, 37, 38, 40 ~ 42
 Overmeer Fisscher, Johan Frederik van ... 29
 Paracelsus → 大江春塘
 Pieter Hart 28
 Pieter van der Stolp → 神谷弘孝
 Siebold, Philipp Franz von ... 32 ~ 48
 Sturfer Johan Willem de ... 32 ~ 48
 Tissingh, Isaac 47
 あ
 青木研蔵 63
 青木周蔵 62 ~ 84
 青木周蔵自伝 62, 63
 アブラハム → 馬場佐十郎
 い
 伊勢田道益義倫 85
 伊勢屋七左衛門兵助 ... 25, 37, 38

逸次(富永) 74
 伊藤盛永 26
 医範提綱 67
 今村金兵衛 25
 う
 宇田川玄真 88, 90
 宇田川榛斎 → 宇田川玄真
 梅津寿平 23
 え
 エリザベート・フォン・ラーデ →
 Lade, Elisabeth von
 鹽巖(橋本) 69
 お
 大江雲澤 69
 大江玄明 9, 12, 15, 69
 大江春塘 28, 31, 69
 大江久 67, 69
 大槻玄沢 25, 26, 37
 大浜 85
 奥平昌高 2, 3, 20, 22, 24 ~ 42

奥平昌服……………2、3
奥平昌暢……………2、3、23、28、

奥平昌猷（勇吉）…2、3、44、47、50
小幡竜洲……………70

か

解屍編……………86
解臈記……………85
解臈文……………85
解體新書……………86、88
解體図記……………86
解剖存真図……………85
解脈……………85
梯隆恭……………4
片山東籬……………85
桂川甫賢……………25、37、44、45、
加藤彦兵衛……………26、52、53、80
神尾雄策……………67、69、70
神谷久藏……………32、49、53、54
神谷鎌次郎↓神谷久藏
神谷源内↓神谷弘孝
神谷弘孝……………22、25、26、30、

辛島正庵……………35、37、48、56
カロリーナ・フロレーイク↓
Carolina Vrolijk

河口信任……………86
咸宜園……………65
観蔵……………86
寒帯……………89

き

気海観瀾……………67
木戸孝允……………63
久藏↓神谷鎌次郎↓神谷久藏
及門録……………53
記録……………62

く

黒沢翁満……………21
グロビウス↓高橋景保

け

夏至……………88
玄水↓村上玄水
村上玄水書簡……………91、93

こ

小石玄瑞……………70
語彙宝函……………31
刻異人恐怖伝……………21
小林リゾウ衛門……………29
古門富太……………62、77
古門林太郎……………77
コレラ……………77
ゴローニン↓Golovnin, Vasilii
Mikhailovich

さ

採要集……………7
佐久間玉江……………85
佐久間象山……………53
策郎（富永）……………73
鎖国論……………21
参勤交代……………1、5、8

し

シーボルト↓Siebold, Philipp Franz
von
シーボルト事件……………56
志筑忠雄……………21

島津重豪……………29、30、33、34、

釋圓通……………41、42、47、50、88

シャルロツテ・ブロム→Charlotte

Blom

種痘……………45、70

章一郎(富永)……………73

聖福寺順心庵……………85

進脩館……………64

新集日蘭辞書……………22

す

杉田玄白……………86、90

スチュルレル→Sturler, Johan Willem de

デ・スチュルレル→Sturler, Johan

Willem de

酢屋彦三郎→章一郎(富永)

せ

誠求堂……………65

正帯……………89

箭山(藤本)……………70

扇城遺聞……………70

そ

草稿(写本)……………88

惣町大帳……………6、76

徂徠学……………65

尊王攘夷……………68

た

大極……………89

大黒丸……………7

大砲……………53

高橋景保……………45、46

高橋作左衛門→高橋景保

鷹見十郎左衛門→鷹見泉石

鷹見泉石……………26、30

团七(三浦)……………63

暖帯……………89

つ

辻村仁兵衛……………53

て

ティチング→Tising, Isaac

手島仁太郎……………65、68、69

テル(青木)……………63

天地分體論……………89

と

土井大炊頭……………26

ドウフ→Doeft, Hendrik

ドウフ・ハルマ……………23

ヘンドリック・ドウフ→Doeft,

Hendrik

冬至……………88

道中日記……………4、5

痘苗……………70

富永家……………62

富永家のこと(写本)……………62

友子(三浦)……………63

な

内景……………86

中津医学館……………70

中津酢屋富永家のこと(写本)……………62

成瀬正壽……………50、60

に

西周哲……………70

は

広瀬淡窓……………64

回斯篤児→Heister, Lorenz

梅木堂……………36

橋本忠次郎……………65、69

バスタールド辞書…31

ハナ(青木周蔵娘)…63

馬場佐十郎……………28、30、50、55、

56

馬場貞由→馬場佐十郎

原岡平泉……………70

原玄慶……………92

播磨屋大吉……………7

治高(黒田)……………85

ハルマ→Halma, François

治之(黒田)……………85

晩生堂……………63

ひ

ピーテル・ハルト→Pieter Hart

ピーテル・ファン・デル・ストルプ

→神谷弘孝

久松方庵……………70

ヒツボカラテス……………87

百武萬里……………85

ふ

フィッセル→Oremer Frischer, Johan

Frederik van

福沢諭吉……………65

藤野啓庵……………70

藤本玄岱……………67、70、71

佛國曆像編……………88

物斎→手島仁太郎

ブトレマイオス……………26

フレデリック・ファン・ゲルベン

→Frederik van Gulpen

フレデリック・ヘンデリック→

奥平昌高

ブロムホフ→Blomhoff, JanCock

腑分け……………87

へ

ペリー……………56

ヘリット・パソップ→Gerrit Pasop

ヘンドリック・ドーフ→Doef,

Hendrik

ヘンメイ→Hennij, Gijbert

ヘンリック・ファン・デン・ベルグ→
・伊藤盛永

ほ

帆足万里……………71、91

ボタニクス→桂川甫賢

本多忠升……………50、60

梵曆運動……………88

ま

マウリッツ→奥平昌暢

前野良沢……………86

松川清庵……………70

松平主税……………50、51、60

松平忠恵……………50、60

松平直寛……………50、60

間宮林蔵……………45

萬目録……………52

み

三浦玄仲……………63

三浦玄明……………63

南小柿寧一……………86

む

睦郎(富永).....73

村上玄水.....1、4、5、70、

村上春海.....91、93

め

メイエル→Meijer, Lodewijk

明倫館好生堂.....63

も

毛利元義.....50

や

ヤコブス・バラセルスス↓大江春塘

柳沢光被.....50

山県有朋.....63

山脇東洋.....86

ヤン・ヘンドリック・ダッベル↓

鷹見泉石

よ

横井玄伯.....70

ヨハネス・ヴィルヘルムス↓
成瀬正壽

ら

蘭学.....66

蘭語名刺.....52、53

蘭語訳撰.....22、23、53、55、56

ランビキ.....88

蘭癖大名.....20、21

蘭方医.....67

ろ

老野子.....88

六祖玄水屈伸録.....89

わ

和中散.....36

● 執筆者一覧

Michel, Wolfgang (W・ミヒェル)

九州大学大学院言語文化研究院、比較言語文化学講座 教授

吉田 洋一 (よしだ・よういち)

久留米大学非常勤講師

大島 明秀 (おおしま・あきひで)

九州大学大学院比較社会文化学府

中津市歴史民俗資料館 分館 村上医家史料館資料叢書V
ヴォルフガング・ミヒェル編

人物と交流 I

平成18(2006)年3月

刊行 中津市歴史民俗資料館 分館 村上医家史料館
〒871-0049 大分県中津市1780番地
TEL 0979-23-5120

印刷 株式会社 川原田印刷社
